

平成22年度  
海外研修報告書集

(第38回)



公益財団法人

**中央競馬馬主社会福祉財団**

THE NATIONAL HORSE RACING WELFARE FOUNDATION

## は し が き

(公財)中央競馬馬主社会福祉財団が実施している海外研修事業は、昭和45年に初めて研修生を海外に派遣して以来、今回で38回目を迎え、この間に派遣した民間社会福祉施設職員は292名に達しております。

本海外研修は、各研修生の研修実施計画に応じて2か月から4か月にわたり、福祉の先進諸国の社会福祉施設等において、その運営の実際を現地で研修を行うものですが、今回も各研修生は意欲的に取り組み、多くの成果を収めて帰国いたしました。

研修生たちが、この貴重な体験を自らの施設運営の中に生かし、多くの仲間に伝達し、施設の処遇サービス、地域福祉の向上に努めていることは、正に本事業の目指すところであり、我が国の社会福祉の発展に寄与しているものと確信しております。

本財団では、毎年海外研修報告集を刊行し、広く関係各位に供しているところですが、本年も平成22年度の海外研修生5名から提出されました研修レポートを収録して、「平成22年度海外研修報告書集(第38回)」を作成いたしました。

研修のはじめに合同研修を行っていますが、今回も前回に引き続きデンマークの日欧文化交流学院との業務委託契約により実施いたしました。合同研修は、アイスランドの火山噴火の影響による航空便の欠航がありましたが、日程を急遽変更(4月19日から10日間の予定を4月28日からの5日間に変更)し、実施することができました。ひとえに千葉忠夫学院長をはじめ学院の皆様の多大なるご尽力ご協力の賜物であり、厚く御礼申し上げます。

また、合同研修でお世話になりました訪問施設の皆様、そして各研修生を個別研修でご指導いただいた皆様に、心から感謝の意を表します。

本報告書を関係者各位の業務上の参考としてご活用いただけたら望外の喜びであります。

平成22年12月

公益財団法人 中央競馬馬主社会福祉財団

## 目 次

デンマークでの合同研修	…… 石山 愛子 ……	2
1 障がい者の活動・参加に対する支援 ー作業療法士の役割の再考ー	…… 佐藤 崇 ……	7
2 盲重複障害者支援の可能性を求めて	…… 鈴木栄美子 ……	27
3 攻撃性の高い児童への治療的アプローチを探す旅 ードイツ・アメリカでの取り組みを学んでー	…… 益田 啓裕 ……	51
4 障害のある人の創作活動の視察 ーそれを支える専門的な人材の役割ー	…… 中井 幸子 ……	77
5 北欧での現場研修を終えて	…… 石山 愛子 ……	97
平成22年度(第38回)民間社会福祉施設職員 海外研修助成金交付要綱	……………	121

## デンマークでの合同研修

「欠航です」そう聞いて、皆、落胆した。海外研修に行かせていただけることになって、この半年、決死の思いで仕事の調整をし、準備をし、やっと出発前夜に成田のホテルにたどり着いたというのに・・・。

出発約一週間前、アイスランドの火山が噴火した。欧州で空港の閉鎖がでていること、多くの欧州からの旅行者が母国に帰れなくなっていることは知っていたが、まさか、このタイミングで、私たちがその当事者となろうとは夢にも思わなかった。

第38回の研修生の顔ぶれは佐賀県の重症心身障害児施設・身体障害者療護施設で働く作業療法士の佐藤さん、東京都の盲重複障害者支援施設で生活支援員をしている鈴木さん、奈良県の社会就労センターでアートアドバイザーをしている中井さん、大阪府の情緒障害児短期治療施設で働く臨床心理士の益田さん、千葉県で在宅高齢者の支援をしているケアマネジャーの石山の総勢5名である。

鈴木さんと石山以外の皆さんは遠方から来ている為、今後の見通しが立たない状況では自宅に帰るに帰れず、鈴木さんの職場である「東京光の家」に佐藤さん、中井さん、益田さんは宿泊させていただくことになった。「東京光の家」は突然の来訪にもかかわらず、とても親切に施設内を案内して下さり、旅立てなかった私たちを労わってくれた。東京光の家の利用者の方々も職員の皆様も非常に明るく和やかで、施設内のどこに居ても温かい気持ちになった。

結局、出発の目処は中々立たず、航空券の手配ができるまで、自宅待機となった。それから、旅行業者の方が色々なルートでの航空券を探してくださったり、スカンジナビア航空のホームページを益田さんがチェックしてくださったりした結果、8日後の4月27日、全員で出国できることになった。

この出発延期となった一週間で、研修生同士は連絡を蜜に取り合い、結束も強くなった。

急な出発延期にもかかわらず、日欧文化交流学院の千葉先生は柔軟に対応して下さい、合同研修を行うことができた。

合同研修は、障害児特別支援幼稚園、聴覚障害高齢者施設、障害児特別支援教育、知的障害者芸術作業所、高齢者センター、知的障害者作業所、在宅重度障害者訪問、オーデンセ大学病院など、多分野に亘り素晴らしい内容だった。

障害児特別支援幼稚園は普通の幼稚園と同じ建物内にあり、遊びの時間や行事などで、互いに交流をしつつ、自然と障害を持っていない子は障害を持っている子に対する理解、障害を持っている子は障害を持っていない子に自分の障害について説明をすることに慣れて行くとのことだった。特別支援学級は普通の小学校の中にあり、それぞれ少人数制（6人前後）に先生が2人ついて、授業を行っていた。“楽しめること”に重きを置き、ペタゴ（幼稚園・



保育園・障害者などの生活指導員)、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、スクールセラピスト、水泳の先生などの職種が共同して、子供のサポートをしていた。例えば、集中できない子には集中できるようなプログラム、ゲームなどの遊びを通して身に付けるようにしたり、運動能力が十分に発達していない子には遊具を使って、楽しく運動できるようなプログラムを考えたり、身体が不自由な子でも存分に身体を動かせるように、プールでできるプログラムを個別に行うなど、その子その子に合わせてプログラムが組み立てられ、授業の一つとして行われていた。また、子供たちの共同スペースがあり、休み時間には障害のある子もいない子も学年も関係なく、交流することができる。高学年になると昼休みにパンなどを売っている売店を運営し、遊びや学校生活を通して社会を学んでいた。知的障害者芸術作業所では各々の才能を生かした芸術活動をしており、プロのバンドとしてCDを出している方々やアトリエを持って絵画を描かれている方がいらした。バンドは、プロだけあって、一日8時間以上、練習することもあるそうだ。活躍の場もヨーロッパ各地や来日公演するなど、とても活動的だ。絵画を描かれている方はアトリエの出入りも自由であり、いつでも自分の創作意欲が湧いた時に絵を描くことができるという。アトリエには様々な作品や創作中の絵があり、彼の絵画に対する情熱を感じた。知的障害者作業所ではオリジナルの巣箱や廃品の燃料タンクを再利用して制作したバーベキューコンロなどの素晴らしい製品を生み出し、注文が殺到しているという。この知的障害者作業所では、そこでの売上を作業所に来ている皆で楽しむことに使っているという。売上で自分たちのサマーハウスやヨットを購入したそうだ。古くなったヨットのマストを買うと高いので、自分たちで作っていると加工途中の大きなマストを見せてくれた。在宅の重度障害者は5人のパーソナルヘルパーが24時間交代で介護を行っているので、在宅での生活が営める。パーソナルヘルパーの採用を決めるのはその障害者自身であるので、気の合うヘルパーから介護を受けられるという。車も自治体から支給されるので、行きたい時に外出もできる。福祉大国と呼ばれるデンマークの実態である。

千葉先生の講義はもちろん、NordfynsFolkehøjskole(北フュン島国民学校)Mogens Godball 校長の講義や Otterupgården (知的障害者作業所) の Bent Laursen 所長の講義で共通していたのは、教育の重要性である。幼少期の育て方、学校教育の在り方が、自分たちが暮らしやすい社会を作っていく福祉大国の根幹であるというのだ。合同研修中、あちらこちらで、どんなに教育を大事にしているか、まざまざと見せ付けられた。人を大切に育てると、暮らしやすい社会ができる。合同研修を終え、私たちは日本との違いを肌で感じ、個人研修への良い準備期間となった。

出発延期になった私たちを温かく迎え入れて下さった「東京光の家」の皆様、急な予定変更にもかかわらず、柔軟に対応してくださった千葉先生、銭本さん、Momoyoさん他日欧文化交流学院の皆様にこの場を借りて、お礼申し上げます。

(第38回海外研修生グループリーダー 石山愛子 記)



鈴木栄美子      中井幸子      益田啓裕      石山愛子      佐藤 崇



## 平成22年度(第38回)海外研修〔合同研修〕プログラム

(財)中央競馬馬主社会福祉財団

日欧文化交流学院：委託

月 日	内 容 等
平成22年 4月27日 (火)	12:30 成田国際空港出発 16:05 コペンハーゲン国際空港着 日欧文化交流学院へ移動
4月28日 (水)	9:30 障がい児特別支援幼稚園 14:00 聴覚障がい高齢者施設 19:00 講義：「デンマークの社会福祉制度」千葉院長
4月29日 (木)	9:00 障がい児特別支援教育 13:15 知的障がい者芸術作業所 15:30 高齢者センター
4月30日 (金)	10:00 知的障がい者作業所 13:00 講義：「デンマークの民主主義」 北Fyn島国民学校 校長 Morgens Godball 15:30 在宅重度身体障がい者訪問
5月 1日 (土)	10:00 オーデンセ大学病院 11:30 バリアフリーショッピングセンター 15:00 アンデルセン記念館
5月 2日 (日)	9:00 合同研修反省会 12:00 合同研修終了（個別研修へ）

宿泊先：日欧文化交流学院 (4/27～5/1)

障がい者の活動・参加に対する支援  
－作業療法士の役割の再考－



社会福祉法人 佐賀整肢学園  
からつ医療福祉センター  
作業療法士

佐藤 崇

〒 847-0001

佐賀県唐津市双水 2 8 0 6

電 話 0 9 5 5 ( 7 8 ) 3 0 6 4

F A X 0 9 5 5 ( 7 8 ) 3 0 6 4

平成22年度（第38回） 海外研修生 研修プログラム・内容

氏名	佐藤 崇					
所属	(福) 佐賀整肢学園 からつ医療センター 作業療法士					
合同研修	デンマーク オーデンセ (4/27～5/2)					
	国	期間	施設名／都市名	施設の種類	研修内容	掲載ページ
5月	デン マ ー	5/3 ～ 5/7 (5)	Varkstedet Pilevej /オーラップ ⑤	障害者作業所	青年期における就労支援や居住における社会参加の実態。クライアントと活動を共にし、日本との違いを検証	11
			フロントバレー小学校/コロラド州パーカー ⑩	小学校（障害者支援実施校）	作業療法士のもとでの実地研修。理念の明確さ、影響力の強さ・適切さ等日本への導入材料の発掘	13
			Jen-Lo Holistic Therapeutic Farm /コロラド州ロングモント ⑪	障害児の作業療法施設	自然や動物と触れ合いながらの「作業活動」を通して、直接アプローチする治療手段など、作業療法の原点を確認	16
6月	ア メ リ カ	5/8 ～ 6/28 (52)	リージョナルセンター /カリフォルニア州ロサンゼルス ⑦	障害者サポート機関	カリフォルニア州独特のシステムを持ち、福祉制度に関する情報提供、サポートサービス展開の合理的な在り方	17
			INALLIANCE/カリフォルニア州サクラメント ⑬	就労支援	日本と同様、障害者への支援問題である、施設から地域への就労移行手立てへの取組み方検証	19
			BUCS /カリフォルニア州サンタローザ ②	介助犬養成機関	障害者のメンタル面においても大きな役割を持ち、ライフステージにおける選択肢となりうる介助犬の養成実地研修	20
			TEACCH /ノースカロライナ州チャペルヒル ⑨	自閉症などへの支援・研究機関 (ノースカロライナ大学所属)	9ヶ所のセンターを持つ世界的に有名な機関で、個別セラピー、診断判定、ペアレントトレーニング、ホームプログラムなど実践研修	22
			Can Child /ハミルトン ⑨	障害を持つ子どものための研究機関	障害者ののための様々なアセスメント法開発や実態調査を行う世界的な機関で、活動参加状況を評価し、目標設定に繋がるアセスメントを学ぶ	24
7月	カナダ	6/29 ～ 7/17 (19)	Holland Bloorview Kids Rehabilitatoin Hospital /トロント⑨	障害を持つ子どもリハビリ病院	カナダ最大のこどもリハビリ病院において実地研修。専門家チームによる多数の独立したサービスなど、日々の業務に指針的な知見や価値観を得ることが可能となる	24
計82日		訪問国3カ国 訪問施設 8カ所				

注：( ) 内の数字は滞在日数、○内の数字は研修日数

平成22年度(第38回)海外研修生 ルート

○ 佐藤 崇 (成田～デンマーク～アメリカ<シカゴ→ロス→SF→ダーラム>～カナダ～成田)





## I. はじめに

私は作業療法士として、脳性麻痺や自閉症、ダウン症など、障がいをもった子どものリハビリテーションを専門とし業務を行っている。担当するクライアントの年齢層は生後6ヶ月から65歳と幅広く、そのライフステージや発達課題など考慮しながら、目標設定や介入方法など日々模索している。世界の小児作業療法の分野では、機能的アプローチ群の有効性や必要性が叫ばれており、ライフステージを考慮し、ICF(国際障害者機能分類)の活動、参加に焦点をあてた研究や取り組みが盛んに行われている。日本でもその必要性が論じられるようになってきているが、機能的アプローチ群の実践例はまだまだ少ない。還元論的な医療モデルにおける作業療法士の存在意義ではなく、活動や参加を含めた社会モデルにおける作業療法士の存在意義について、見つめ直し再考してみることを今回の自分の中のテーマとした。今回の研修では、デンマーク、アメリカ、カナダにおける障がい者の活動、参加に対する支援の実際や目標設定を学ぶこととした。

## II. デンマーク (4月29日～5月7日)

デンマークは幸福な国ランキングで常に上位を占める国である。高福祉と引き替えにある高負担を長年の議論や選挙で、国民が選択し、満足度も大きい。高福祉と言われる社会の障がい者の社会参加や活動はどのように実践されているのか、合同研修では、乳幼児期から老年期までのライフステージ全般を通して学ぶことができたので、個別研修では青年期における就労や居住における社会参加に焦点をあてて研修を行った。



研修先 Varkstedet Pilevej

研修先はVarkstedet Pilevej。オーデンセから車で1時間ほどのところにあるオーラップという町にある、25年の歴史のある就労支援やグループホームなどのサービスを行っている施設である。オーラップは自然に囲まれており、小さな市街地

を抜ければあたりは一面の菜の花畑が広がっていた。研修先の職員さんの家にホームステイさせてもらい、デンマークの家庭という視点からもデンマークの社会を学ぶことができ大変有意義な時間を過ごすことができた。

### 1. 就労支援施設

研修先の就労支援は、5つの就労グループに分かれていた。グループの活動やメンバーは、ほぼ固定されていて、1グループ7～8人に対して、1人のジョブコーチ的なソーシャルペタゴが配置されている。

スタッフが行う毎日の活動の電子記録化がなされていて記録は、パソコン上で行われていた。またミーティングやケースカンファレンスなどスタッフ間の情報交換が定期的に行われていた。

研修期間中全ての就労グループでクライアント達と一緒に活動させてもらった。就労グループでの活動のいくつかを以下に報告する。

#### ○ 創作活動をするグループ

今の時期、ココナツの実をくりぬいて、皮の部分成形に切ってヤスリ掛けをするアクセサリ作りと、施設周辺の運動を兼ねた散歩が一日の活動内容であった。活動に集中できない人へは無理に参加を促すことはせずに、出来そうな所だけ行ってもらっていた。

日本からお土産に持っていった日本画の塗り絵が好評で、皆さん楽しんでくれた。

デンマークでは、全国民一人一人にソーシャルワーカーがつく制度になっている。この制度に基づき、ライフステージにおける節目に、クライアントの意思決定や目標設定、家族の意志の確認が出来るシステムとなっている。この意思決定に基づきそれぞれの医療、福祉専門職が介入プログラムなどを立案していた。障がいをもった人全てが働くことは出来ないし、その必要もない。この就労グループの人たちは、ある意味で働くというより、働くことの体験や、生活の中に楽しみをつくるための目標設定がなされていた。日本でもこのような支援が必要な人たちが数多く存在するし、ある意味この部分の支援が一番難しいような気がする。学校を卒業した後の生活について、クライアント本人や家族が方針や目標を考える機会を提供していることに日本との違いを痛感させられた。

#### ○ 地域での活動グループ

日本にも、作業所において園芸や木工、農作業などを行っている作業所などが沢山存在する。このグループはこの要素に加えて、地域で活動を多く取り入れることで職業意識をもちやすい環境設定がなされていた。活動内容は、国道脇や民家の草刈り、福祉機器会社内での使用済み車椅子やベットなどの洗浄作業などであった。このグループは作業トラック一台をもっており、依頼があれば、地域各地へメンバー全員で移動し、活動を行っていた。クライアントのほとんどは芝刈り機、ガスバーナーなどの専門的な機械を安全に使い、本格的な仕事に励んでいた。



地域での芝刈りの作業

デンマークでは働きたい人、働けそうな人にはその意志決定に応じて、資金的にも環境的にも手厚い支援が行われている。その方針の明確さやその環境においては、クライアントはもちろんであるが、一緒に活動するスタッフにも仕事に対するやりがいを感じることができた。



## 2. グループホーム

デンマークでは、成人すると親と同居するという習慣がなく、学校卒業後は親元を離れ地域での生活を求められる。就労支援を受けている方々はどのような居住形態をとっているのか、生活を支える支援を学ぶというテーマをもち研修をさせて頂いた。



各ユニットのリビングルーム



グループホームではバンド活動など余暇活動も充実している

研修先の就労支援施設を利用する人のほとんどが、歩いて10分ほどのグループホームで生活していた。グループホームといえども、収容人数は約200人。日本の大規模収容型施設を思わせるような規模であった。しかし中身は、各フロアーがいくつものユニットに分けられており、5～6人の入居者に対し、1人のケアワーカー的なソーシャルペタゴグが配置されているマンション型グループホームのような作りであった。それぞれの居住用ユニットで、それぞれが食事、おやつを調理し、掃除洗濯などできる範囲で行っていた。調理は援助が必要で、ケアワーカーが行う場面が多かったが、出来そうなところはケアワーカーが居住者に声をかけ一緒に行っていた。入浴は、日本とは違ってシャワーのみ、お湯につからないので、このようなケアワーカー1人のみでのユニット運営もできるのではないかとも思われた。

大きな施設における生活は、安全面や衛生面の管理が行き届きやすい長所がある。しかし長年の生活を考えた場合、その人の自己選択や自己決定の場を

奪っている現状も存在する。小さな生活単位の長所と大きな施設の長所が両立できる施設について考えさせられた。

## Ⅲ. アメリカ合衆国

### 1. フロントバレー小学校（5月8日～5月17日）

ーコロラド州ー

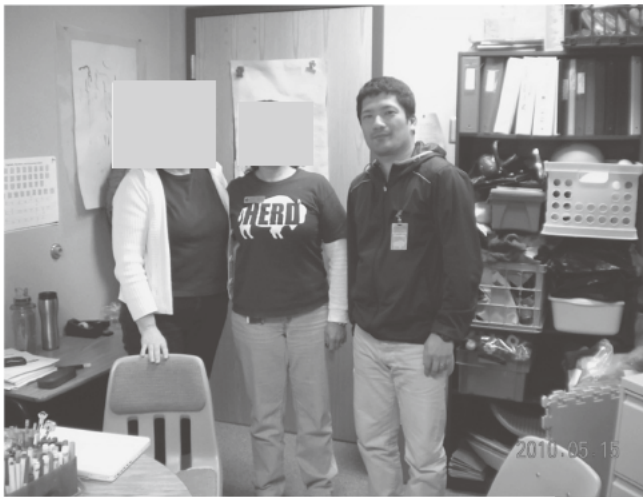
コロラド州はアメリカ大陸のほぼ中央に位置し、大自然と都市空間が近距離でつながっているアメリカ人が新天地として住みたい州の第1位の州である。この州の南部に位置するパーカーは、各都市を結ぶハブ的な都市であるデンバーから車で1時間ほどの街である。パーカーでは、小学校における障がい児

支援について、コロラド州の学区の作業療法士としてフロントバレー小学校に勤務している方のもとで実地に研修しながら学ばせていただいた。

### (1) アメリカの教育制度と学校における作業療法士の役割

アメリカのすべての障がい児への公教育の歴史はそれほど過去にさかのぼるものではなく、1975年に全障がい児教育法の制定によってすべての障がい児に無償の「もつとも制約の少ない (least restricted)」公教育が保障されたのが最初である。1979年に日本で養護学校義務化が開始されたことを考えればそれほど早くはない。しかし、その理念の明確さ、実際の教育現場への影響力の強さ、その後の改定の適切さ、迅速さを考えると現在は日本が格段に遅れている。

学校には教師だけではなく作業療法士、言語聴覚士、心理士、特別支援教育教師などが配置され、各専門職がチームでクライアントの学校生活支援に関わることが障がい児教育法によって義務づけられている。



小学校で作業療法士をしているロマーナさん (中央)



様々な学校生活支援の道具  
(椅子に正しい姿勢ですわるための補助具)

今回の研修をコーディネートして下さったのが、作業療法士のロマーナさん。彼女は作業療法士になって20年目のベテラン作業療法士であった。学校の作業療法士になって10年目、それ以前は一般の病院に勤めていたとのこと。作業療法を受けている担当児童は約30名。この中のほとんどの子どもが注意欠陥多動や自閉症あるいはその周辺の症状をもつ子どもであった。子ども達はそれぞれ決まった時間に、作業療法室にやってきて、個別のセラピーをうける。セラピーの内容は、鉛筆の握り方や運筆の練習など学校生活に必要な機能的課題に焦点をあてたものや、調理やグループ活動など、学校を卒業した後で使っていかなければならない生活技能や社会性に関する内容など幅の広いものであった。また学校生活における活動や参加ができるだけ成功体験に終わるように、クライアントが活動を行いやすいように様々な道具による支援も行われていた。この個別セラピーの時間以外は、授業中のクライアント達の学級を訪れ、授業での様子を観察評価する中で、セラピーの成果の確認や今後の方針の検討を行っていた。

このように作業療法士、言語聴覚士、心理士、特別支援教育教師などは、それぞれのセラピーや療育を行うだけではなく、クライアントが所属するクラスにおける授業中の不具合点などへの対応を、担任の先生と話し合い、情報交換など行っていた。話し合いは定期的なミーティングの他に、学校内でパソコンのメールを使用して教師から専門職への相談が行われており、教師自身も専門職に相談しやすい環境が保障されていた。日本でも作業療法士や心理士などの専門職は存在するが、普通小学校に配置される例はまだまだ少ない。このため、専門職が教師とクライアントの学校生活場面を共有することができず、不具合点への対応方法など学校の先生が一人で抱え込んでしまうケースが多い。さらに専門職を含めた家族との意見交換の場の設定が難しく、関わりが統一できない現状にある。日本の作業療法士は、アメリカの学校の中で働く様な役割を果たすことはまだできていない。私自身作業療法士として、学齢児を担当することも多いが、上述のような現実にかまけて、学校から情報収集や学校への働きかけなど、日本でもできる工夫を怠っているのではないかと感じさせられた研修であった。

## (2) 個別教育プログラム ( I E P Individual Education Program )

アメリカの学校における授業の受け方には、対応の個別性や柔軟さが保障されており以下のようなものがある。

### ・普通学級

主として普通学級で教育を受けるが、個々に合わせてさまざまな対応がなされる。

### ・リソースルーム

日本でいう通級指導教室制度。普通学級に所属し、一人一人の生徒の弱い教科をリソースルームで指導を受ける。

### ・セルフコンテインドクラス

その学級だけで独自に教育できるクラス。普通学級との連携は弱い、まったくない場合もある。

さらにアメリカでは、3歳から21歳までの障がい児への無償で適切な公教育を提供するために、個別教育プログラム ( I E P Individual Education Program ) を策定し、各州にこのための手立てをとるよう規定している。個別教育プログラムは、統一様式で記載が求められ、その作成の手立て、記入方法など基本的なものまで細かく定められている。個別教育プログラムは、 I E Pミーティングで決定される。 I E Pミーティングは、障がい児のニーズを満たすために、教育を監督する権限をもった地方の教育機関 ( 学校区 ) や校長をはじめとする校内の監督責任者、学校内外の専門職 ( 心理士、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士、ソーシャルワーカーなど )、教師、 ( 通常学級と特別支援学級の双方 )、障がい児の親または後見人、さらに場合によっては当事者も加えて構成される。

今回の研修時期が丁度アメリカの学年末にあたったことで、この I E Pミーティングがほぼ毎日開催されていた。私もいくつかミーティングに参加させてもらうことができた。



IEPには、学習に関する現在のレベル、年間目標、短期目標または評価水準、特別支援教育と関連したサービス、定型発達児との統合、州と地域全体の学力テストへの参加、提供されるサービスの日付と、場所、必要な移動サービス、進歩の過程を評価する方法などを記述することになっていた。

ミーティングでは事前に先生や専門職が記載した上記内容の案が提示され、家族や後見人などがそれについて意見を述べ修正やその必要性の説明がなされる。ミーティング時間は約1時間かけて行われていた。合意されると、参加者全員がIEPにサインしてミーティングは終了となる。

日本においても、支援方針や指導方針など決定のために、クライアント本人や家族のニーズを確認する作業が行われるが、学校と療育機関との間でそのニーズを具体的なものとして共有することはない。具体的で明確な計画は、家族の意志決定の促し、将来進路選択など、重大な意思決定の思考に向けての前準備になる。またクライアントに関わる多職種が、個別支援プログラムを参考にして、目標設定やセラピーの方針などを決定することが可能となる。

## 2. セラピックファーム (5月17日～5月28日)

ーコロラド州 ロングモントー



農場の主催者 作業療法士のルイスさん

がら作業療法を行っている施設は世界的にも珍しく、「作業活動」という人間の営みに注目してそこに直接アプローチしたり治療手段として用いたりする作業療法士にとっては作業療法の原点的な場所である。農場には畑をはじめ20種類以上の動物たちがおり、そこに3人の作業療法士と一人の言語聴覚士が運営に携わっていた。

大自然と動物達を最大限利用しながらクライアントに作業療法が展開される。畑の雑草取り、農場内

ロングモントはロッキー山脈の麓にある大自然に囲まれた場所にある。アスリートの高地トレーニングで有名なボルダーから車で30分ほどのところにあり、高地にあるためか、空気が澄んで空が大変きれいなところであった。周りは牧場や農場ばかり、地平線がどこまでも続く風景である。

ロングモントでは、セラピックファームとって、農場で障がいをもった子ども達に作業療法を提供している施設で研修を行った。自然や動物とふれ合いな



作業療法の一場面 畑の雑草取りを終えて一息



作業療法の一場面 犬小屋のグラインダーかけ

の動物の世話など一見ただの仕事のように思えるが、そこに作業療法的な専門的な治療要素を組み込んでいく。雑草取りであれば、雑草取りといった課題の遂行だけが目標となるのではなく、注意集中が難しいクライアントに対する注意の持続の練習になるだろうし、手先が不器用なクライアントに対しては、手先の操作の練習や摘んだり握ったりの筋力トレーニングにも成なりうる。加えて大自然から沢山のものをもらえる。病院内でのリハビリテーション室でも、注意集中や手指操作の練習は可能であるが、そこに雑草取り、

動物達に餌をやることで得られる自己責任や社会性などを含めた現在あるいは将来の生活技能に繋がるような作業活動を組み込むことは難しい。それらの多くを組み込むことができる農場での作業療法の実践は、本当に見ていて楽しかったし、自分自身もリハビリしてもらえた貴重な研修期間であった。

### 3. リージョナルセンター (5月29日～6月4日)

ーカリフォルニア州 ロサンゼルスー

アメリカの西海岸に位置するロサンゼルス。観光都市としても有名であるが、日本人が多く居住していることでも知られている。そんな背景もあり、アメリカで暮らす障がいをもった子ども及び家族を支援するグループが存在する。今回はこのグループを訪問し、アメリカの福祉制度に関する情報収集とカリフォルニア州独特のシステムであるリージョナルセンターで研修を行った。

カリフォルニア州には、障がいを持つ人達やその家族の話に耳を傾け、情報を提供し、サービスやサポートのコーディネーションをするパートナーとしてのリージョナルセンターという機関が存在する。

今回はロサンゼルスにあるラターマンリージョナルセンターで研修を行った。

1966年に発足したリージョナルセンターは、州政府との契約の下に活動する私立の非営利団体である。地域別に分けられ、障がい者やその家族、その地域のコミュニティーリーダーを含む役員によって運営されている。カリフォルニア州内で計21か所のリージョナルセンターが存在し、総数10万人以上の障がい者とその家族にサービスを提供している。

リージョナルセンターは、州法で定められた発達障



ラターマンリージョナルセンターにて

がい者すなわち、知的障がい者、脳性まひ、てんかん、自閉症、その他の知的障がいのような症状を持つ人々すべてに年齢にかかわらずサービスを提供している。上記の診断がつかないが、出産時に問題があり、発作を起こした、又は言葉や歩行に問題がある場合などリスクのある乳幼児の場合も対象で、アーリー・インターベンション（早期介入治療）や、発達障がい児を生む可能性が高いと危惧される妊婦に対する診断やカウンセリングも行っている。

またリージョナルセンターはクライアントに一番適当と思われるプログラムを両親とサービス提供者との間に立って探してくれる。ラターマンリージョナルセンターで、クライアントがよく利用するサービスは下記のようなものがある。

- ・乳幼児アーリー・インターベンション・プログラム（早期介入治療）
- ・公立校における特殊プログラム
- ・アフタースクール（放課後）プログラム
- ・成人障がい者用日常生活技術習得プログラム（料理、金銭管理、身の回りの世話、住まいの管理、他人との付き合い、買い物、交通機関利用法等）
- ・成人障がい者用職業訓練
- ・医療サービス
- ・夏季、週末レクリエーション・プログラム
- ・特殊器具購入
- ・送迎サービス
- ・在宅介護



送迎サービスの事業所  
-車社会のアメリカでは、クライアントの社会参加には必要不可欠なサービスである-

センターで働くスタッフはケースマネジャーやカウンセラーと呼ばれ、常時受け持ちクライアントに対してのサポート業務と同時に、年ごとにクライアントの受けるべきサービスの新たな計画を作成し、そのコーディネーションと管理を行っている。この計画は個人別プログラム計画IPP (Individual Program Plan) とよばれ向こう一年間の目標を定め、必要なセラピー等を詳細に計画したもので、年毎に親の意見を反映させ関係者により審議改正されていく。

日本におけるリージョナルセンターの役割は市町村が担うことが多い。国や州のお金の運営を民間の団体に担わせることのできるアメリカの社会の独特で合理的な部分は日本も見習うべきところが多いように思う。また当事者により運営されているリージョナルセンターは、障がいをもった人たちの目線にたてるのが最大の利点であり、必要なサービスが容易に検討してもらえる環境が整っていた。



## ○ 日本人の障がいをもつ子どもの親の会 (JASPPC)

アメリカでは障がいがあるからといって公的機関から自動的に障がい者年金のような一律のサービスを支給されない。「一人一人のニーズに合ったサービスを個別に提供する事が公平なサポートである」との認識から、サービスはいろいろと用意されているが、親が自分の子供に必要なと思うサービスを探し出し、要求・説得しない限り支給されることはない。これは学校や子供の医療・療育においても基本的には同様で、親がある程度の知識を持って対等の関係で話し合いを進めていかなければ、十分なケアや教育を受けられないのが現状である。言語・文化・習慣の違うアメリカで生活する障がいをもつ子どもの親たちに、アメリカのシステムを使いこなす知識とノウハウを身に付けていくための支援や精神的なサポートも含め福祉制度について相談にのっていくのが JASPPC の活動の主な部分である。今回の研修では親に対するカウンセリング的なミーティングに参加させてもらうことができた。子どもの障がいを理解認識すること、言葉や文化などアメリカの生活に慣れること、一つ一つ長い時間の中で、葛藤の繰り返しの作業である。

カウンセリングの後に親御さんの顔が和んでいたことが大変印象的であった。

## 4. インアライアンス (就労支援、自立生活支援) (6月7日～6月17日)

### ーカリフォルニア州 サクラメントー

サクラメントはカリフォルニア州の州都である。カリフォルニア州は先に紹介したリージョナルセンターなどが古くから確立し、アメリカの中でも福祉の進んでいる州である。今回はサクラメントにあるインアライアンスという障がい者の就労支援や自立生活支援を行っている機関で研修をさせていただいた。

### (1) 地域における援護就労プログラム (SEP) と就労生活支援 (WLS)

インアライアンスで展開されている就労支援は、地域を基盤としたものであり、先に報告したデンマークでの就労支援とは根本的に違っている。具体的には、施設が作業所や工場などを建設してそこに通ってもらうのではなく、地域に存在するスーパーマーケットや工場、レストランなどにクライアントが直接出向いて仕事の練習をしたり、実際就労するといった仕組みで就労支援を行っている。インアライアンスには、援護就労プログラムというクライアント一人に一人のジョブコーチがつく SEP プログラムとクライアント3人ほどのグループに一人のジョブコーチがつく WLS プログラムという、2つのサポートプログラムが存在する。WLS プログラムの場合、勤務時間全てにおいてジョブコーチと一緒に仕事をするのではなく、一定の単位時間において、必要な評価やクライアントとの面談や働く上での環境面の調整、他の従業員からの情報収集を行う。WLS の場合は、勤務時間全てにおいて3人の就労グループに1人のジョブコーチがつき、作業の仕方や安全面の見守りなどを行う。SEP プログラム部門のジョブコーチは3名。1人30名ほどのクライアントを担当している。WLS 部門のジョブコーチは20名。クライアントと週5日、1日5時間同じ仕事をしながら援助を行う。地域での活動における仕事の定着率は高く、85%のクライアントが3年以上仕事を継続出来ているとのこと。SEP で働くクライアントの給料は、アメリカの最低賃金が保障さ

れていて、時間給では7ドルくらいになるとのこと。地域での就労場所は、新聞社における印刷作業やスーパーマーケットの商品出しやレジ打ち、オールドカー博物館での車磨き、州庁でのメール配送係、物流センター内での清掃作業、レストランでの皿洗いなどと幅広く、100箇所以上の事業所に障がいをもった人たちに就労経験の場を提供している。

インアライアンスでは、クライアントが職場で行わなければならない仕事の内容や行動に対する決まりごとなどを、項目立てして達成度を評価するチェックリストを作成している。ジョブコーチはこのチェックリストにその日の就労の状況を記載したり、状況に応じてチェックリストの内容や項目数を変更させたりしている。チェックリストの項目は、ただ単に仕事内容を列挙するのではなく、クライアントの身体機能や認知機能など細かく分析し項目立てしていかないと、クライアントの変化や技能向上などを次のステップへつなげる取り組みを生まない。「就労支援において作業療法士は専門性を大いに発揮することができるし、作業療法士との連携や介入を期待している」とのインアライアンスのスタッフの言葉に大変勇気付けられた。



地域のスーパーで働くマークさん

アメリカで成人期に達した障がいをもった人たちに対する支援の中で問題になっているのは、友人関係、結婚、就労、居住など多岐にわたっているものの、その主要な部分は就労、職業的自立が難しいことが報告されている。日本においても、施設での就労を基盤とする就労支援ではなく、施設から地域に出て働くことが推奨されているが、施設から地域への移行支援の手立てが十分ではない。こういった意味で、インアライアンスの取り組みは、作業所や工場などといった施設を建設し、そこにクライアントを集めるといった様な従来型の手法よりも、コスト面を考えた場合でより経済的であるし、クライアント自身も地域で働くことにつながるもので大変興味深い取り組みであった。

## 5. BUCS (介助犬養成機関) (6月18日～6月19日)

ーカリフォルニア州 サンタローザー

障がいをもった方々のパートナーとして一緒に生活を共にして、手助けが必要な時に介助を行ってくれる介助犬。クライアントとの信頼関係のもとその身体機能だけではなく、メンタル面におけるフォローも大きな役割を担う。日本ではまだまだ一部のクライアントが利用するのみであるが、障がいをもった方々のライフステージにおけるひとつの選択肢となるのではと考え介助犬について学んでみることにした。





ドアを開ける練習

アメリカでは盲導犬も聴導犬も介助犬も全て「アシスタンス・ドッグ」と呼ばれる。私が訪れたサンタローザには、世界ではじめて介助犬という概念を考え出し、介助犬を世に誕生させたボニーさんが運営する介助犬とその訓練士の育成機関がある。この機関は3年前に介助犬訓練士を養成する大学として認可され、全世界から介助犬トレーナーを目指し学生が訪れる。今回はこの大学の第1号の卒業生であり、現在修士課程で学ぶ日本人の鉾山さんに案内していただいた。また彼女が修士課程で取り組んでいる、日本でいう少年院において介助犬を使用した更生プログラムを見学させていただいた。介助犬はクライアントが発するコマンドによって行動し介助を行う。犬たちが覚えなければいけないコマンドは100以上。同時にこのコマンドをクライアントも覚え、介助犬に自

分がしてほしい動作を行ってもらわなければならない。クライアントと介助犬をフィッティングさせる作業は、長い時間とパートナーとしての信頼関係が必要になる。このことは介助犬トレーナーの学生にも同じで、一日びっちり講義と実地の練習が行われていた。介助犬というパートナーを得ることでクライアントの日常活動の幅や質に関して、身体面や心理面にもプラスにはたらく面が多いように思う。しかし

そのためには、まずは「介助犬に自分のいうことをきいてもらう」という親子の関係にも似たねばり強いしつけと長い時間が必要になる。この過程を乗り越えられる強さと責任感がクライアントには要求されることを教えてもらえた研修であった。一方クライアントの身体機能面、認知機能、介助度などのア



街中での行動訓練

セスメントといった専門的な部分に対する取り組みが不足しているとのことで、作業療法士などの専門職の介入が期待されている。

#### ○ 少年院における介助犬を使用した更生プログラム

先に述べたような介助犬を育成した上で経験する「親子の関係にも似たねばり強いしつけと長い時間が必要になる」という部分を更生プログラムとしてアセスメントを行いながら活動を行っていた。

週5日1時間ほど、4人ほどのグループに一人の介助犬トレーナーがついてセッションが行われていた。メンバー一人一人にパートナー犬が決められており、1回に2つくらいのコマンドを練習していく。今回のプログラムにより施設内での生活も安定してくるクライアントも多いとのこと。「施設を出た後にもこ

の子育てにも似た経験が成功体験として残ってくれたら」という気持ちがこのプログラムにはこめられていた。

## 6. TEACCH (6月20日～6月28日)

ーノースカロライナ州 チャペルヒルー

TEACCHとは自閉症に特化したサービスをクライアント及びその家族に提供する機関で、ノースカロライナ州からの予算を割り当てられ運営を行っており、ノースカロライナ大学に所属している機関である。

チャペルヒルの他にノースカロライナ州に9つのセンターが配置されており、クライアントへの個別のセラピーの他に、診断判定や、ペアレントトレーニング、ホームプログラムのセミナーなど様々な取り組みを行っている世界的に有名な機関である。

今回はTEACCHセンターの中でも、中核的なセンターであるチャペルヒルで多くの研修を行わせて頂いた。

### ○ チャペルヒル TEACCH センター

#### ・援護就労プログラム

ジョブコーチ1人に対して、クライアント12人の就労やジョブコーチ1人に5人のクライアント、ジョブコーチとのマンツーマン就労など様々な就労プログラムがあった。就労先は図書館やスーパーマーケット、レストラン、ハウスクリーニングなど様々で10年以上といった長い期間就労しているクライアントも多い。様々な就労場所をジョブコーチとともに訪問させていただいた。写真や絵カードなどの視覚支援や、次の行動にむけたスケジュール掲示、認知面や感覚面を考慮した構造化など、クライアントに対して個々の必要性が評価され、自閉症のクライアントが働きやすい支援が的確に行われていた。



レストランの洗い場にて  
(作業手順など視覚支援が多用されている)

#### ・個別セッション

基本は心理士とクライアントで1対1のセッションを行う。構造化やスケジュールを使う練習や、その中で運筆や目と手の協調動作の課題など、自閉症の特徴を捉えた適切な支援が行われていた。

ここでは心理士の方と、「個別のセッション以上に家庭での取り組みが大切になる」こと、「鉛筆の握り方や椅子に座る姿勢など体の動かし方や筋力などの作業療法士が評価していく分野も大切」など有意義な意見交換を行うことができた。またホームプログラム用の教材を紹介してもらったり、実際のセッションに同席させていただいた。

- ・青年期自閉症者のためのグループ活動

大人のクライアントを対象としたグループプログラムである。仕事をしている方がほとんどで、夕方仕事が終わったあとに集まって活動を行っている。

日常生活におけるカウンセリングの意味もこめたストレス発散の場となっているようであった。

友達など気軽に作れないケースも多いため、ペンフレンドなどを紹介するプログラムも運営されていた。

- ・TTAP (TEACCH Transition Assessment Profile)

上述の援護就労や青年期におけるグループ活動などを通して、移行支援の大切さと難しさを痛感していたところTTAPを紹介してもらった。アメリカでは、中等教育を終了する時期になると、将来の職業生活、地域での生活について、移行を検討し、そのための移行計画を作成し、個別教育プログラムに追加することが定められている。生徒のニーズ、興味、好み、教育、地域経験、被雇用経験、自立生活のためのスキルの訓練、将来職業生活で使われるスキルの評価を行ったうえで、移行計画を作成する必要がある。この過程で、将来の職業や成人期の生活のための評価を行うツールとして、TTAPが有用性を発揮している。TTAPはクライアントの移行に関する目標設定や、クライアントの興味と強みを明確にし、家族と学校関係者間の連携を促すための包括的なスクリーニングであるとの評価を得て広く使用されていた。移行支援における地域に根差したこのアセスメントの情報は継続的に記録することができるようになっていて、生徒が成人期の就労場面と居住場面で卒業した後も将来のサービス提供者に引き継ぎもできる様な様式であった。私の作業療法の中にも、せひ取り入れていきたいアセスメントである。

- ・CLCC (グループホーム)

チャペルヒルセンターとは独立して運営されているグループホームである。特徴的なところは、クライアントに応じた日中の活動が提供されている点である。ガーデニングや農作業、石鹸づくりなど就労的な支援や調理や余暇活動など重度の自閉症のクライアントでも活動に取り組めるように、視覚支援や感覚面などの工夫がされていた。障がいや重度になればなるほど、働くことの意義や余暇活動など、その人独自の生活の質について深く考えていかなければならない。その部分に特化した取り組みは、私たちの臨床における指針となりうるものであった。

- ・自閉症キャンプ

チャペルヒルセンターから車で1時間ほどの場所の、TEACCHが運営するキャンプ場がある。ちょうど夏休み期間にここを訪れることができた。この期間は毎週のようにキャンプが行われていた。

自閉症キャンプは5日間を基本に母子分離で行われる。4歳の幼児から大人のグループまで沢山のキャンプが実施される。主にノースカロライナ大学の学生がボランティアでキャンプに参加し、キャンプの企画や運営を行っている。

## IV. カナダ

### 1. マクマスター大学 キャンチャイルド (6月29日～7月7日)

—ハミルトン—

アメリカの後はカナダでの研修を行った。ハミルトンには、キャンチャイルドという、障がいをもった人たちのための様々なアセスメント法開発や実態調査研究などで世界的にも有名な研究機関がある。ぜひ訪れてみたかった研修先の一つである。

ここでは活動への参加状況を評価し、目標設定につなげるためのアセスメントバッテリーを学ぶ目的があった。紹介していただいたアセスメントのいくつかを報告する。



CANCHILDE が発表した「肥満と発達障がいとの関連性」についての新聞記事

#### ○ ペグス・PEGS (Perceived Efficacy and Goal Setting)

ペグスは障がいをもった子どもたちが日々の生活において参加している活動(食事や余暇活動)に対して、どの程度達成感や必要性を感じているのかクライアント本人に主観的に評価してもらう。この結果を踏まえて作業療法士は活動参加の成功体験にむけて目標を設定することになる。活動の満足度や遂行度をクライアント自身に考えてもらうことで自己修正など促すことにもでき、非常に有用な評価バッテリーであり、絵カードを使用することで小学校低学年の生徒にも使用できる点が特徴である。

#### ○ ケープ・CAPE (Children's Assessment of Participation and Enjoyment)

ケープは日常生活や余暇活動に対する55の設問を通して、その活動の頻度や活動の場所、相手など詳しく聞き取るものである。障がいをもった人たちの活動や参加に関しての学術的な取り組みは、世界的にも最近始まったばかりである。障がい特性と活動状況や参加状況に関連性や特性があるのか、といった日本における状況調査など取り組んでみたいと考えている。

### 2. ブロービュー子どもリハビリテーション病院 (7月8日～7月16日)

(Holland Bloorview Kids Rehabilitation Hospital) —トロント—

カナダで一番大きな子どものためのリハビリテーション病院である。障がいをもった子どもたちの可能性ある世界の創造というコンセプトのもと様々な取り組みがなされている。毎年約7,000人以上の子どもたちが診察やサービスをうけに病院を訪れている。訪れる子どもの診断名も脳性まひやダウン症、自閉



症、神経筋疾患、頭部外傷など多岐にわたっている。

提供されているサービスは、50以上のサービスがあり、クライアントの学校での生活支援や就労支援、家族支援などきめ細かく行われている。

今回は時間の都合上2つのサービス提供部門での研修を行うことになった。

ここでは、その規模は全く比べ物にならないが、日々私が取り組んでいる障がいを持った方々へのリハビリテーションが同じように実施されていた。

日ごろ私たちがクライアントに対して悩んだり、迷ってしまう場面に関して意見交換ができ、同じようなところで悩んだり工夫をされているところが見られて大変共感するとともに興味深かった。その中に日本には存在しないシステムに驚かされた。50以上ものサービスが提供されていて、それぞれのサービスが独立して専門家チームが形成されていた点である。先に紹介した学生への支援や電子エイド部門のほかに、頭部外傷専門の運動機能チームなど、専門性に合わせて部門が細分化されている点が驚きとともに学術的な検討を行いやすい環境が保障されていた。



ブローアービュー子供リハビリテーション病院

#### ○ 学生支援サービス

小学校、中学校に通う子どもを対象に、学校における生活、学習に関する様々な技能の練習を行う。椅子に座るための自助具の提供や姿勢保持の練習、運筆の練習など、それぞれのクライアントの状況に応じて学校の中で支援が行われる。

訪問した時期は夏休みだったため実際の学校での介入場面はみることはできなかったが、夏休み中に実施されている短期セラピーに通われている子どものセラピー場面の見学をすることができた。このサービスに携わっている職種は作業療法士と作業療法アシスタント、言語聴覚士、理学療法士であった。

#### ○ エレクトロニック・エイド トウ デイリーリビング サービス

電動車椅子やトーキングエイド、AT、環境制御装置など日常生活の中に、電子デバイスを用いることで介入を行っていく取り組みがなされているサービスである。主に電子工学の専門家と作業療法士がチームで介入している。どのようなデバイスが必要なのかの評価から始まり、フィッティングと操作の練習を行い導入まで進めていく。最近、自閉症をもつ方のコミュニケーションエイドへのニーズが増えており、希望してから最初のアセスメントを受けるまで2カ月くらい待つ必要があるとのこと。

## V. 終わりに

日本の作業療法士の約7割が病院で働いている。今回の研修では、この枠を越えて学校や就労など、障がいをもった方々が活動、社会参加する現場を訪れる機会に恵まれた。

一步、参加や活動の場に足を踏み入れてみると、クライアント自身が行っている活動に対して、誇りややりがいを強く感じている場面に何度も出会うことができた。この経験は、活動や参加の場において作業療法士として介入できる部分が大いにあるという実感をもたらしてくれ、日々の業務における指針的な知見や価値観を得ることができた。

障がいをもった人とそうでない人、もしかすると行っている仕事や活動の内容・量には、差があるのかもしれない。しかし、活動に対するやりがいや誇り、楽しさなどといった部分の方が人生においては大切なのではと3ヶ月の研修の中でクライアントの笑顔が教えてくれたように思う。私たち作業療法士は、クライアントに対し、長期的あるいは短期的な目標を設定し介入を行う。「手指操作の向上」といった漠然とした目標では、クライアントの活動や社会参加における支援には役立たないのであって、「レジでお札を分けるため(行えるようになるため)の手指操作の練習」といったように、その活動が成功体験で終われる具体的で機能的な目標設定や介入が求められている。

「クライアントの作業活動成功のための支援」この研修で再考した私自身の作業療法士の大切な役割である。

このような素晴らしい機会を与えて下さった財団法人中央競馬馬主社会福祉財団の小川理事長をはじめ、研修全般にわたりお世話になり、アイスランド火山噴火という非常事態にも心優しく対応して下さいました長井企画管理部長、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。そして、デンマークでの個別研修では合同研修に引き続き、火山噴火のために日程変更が余儀なくされた中でも、研修先やホームステイ先のコーディネート等、全く不安がないように対応していただきました日欧文化交流学院の千葉学院長はじめスタッフの皆様、研修のみならずホームステイのホストとして、家族同然にお世話していただいたボニーさん夫妻に心から感謝申し上げます。アメリカコロラド州の研修では、事前の研修先を探す段階から親身になってお世話頂いた帝京大学福岡医療技術学部の渡辺直美先生、毎日のように夕食を御馳走していただき研修先での通訳までかってでていただいたスティーブさんと千佐さん夫妻、私の英語の先生であり一緒に楽しく遊んでくれた4歳の娘さんのリアンナちゃん。また、フロントバレー小学校での研修で、どんなに忙しい時でも私のつたない英語の質問につきあっていただきましたロマーナさんはじめスタッフの皆さん、コロ



小学生のクライアントが描いてくれた絵

ラド州の大自然の中で、私に作業療法の楽しさを教えて下さり、私自身の気持ちをリハビリしていただいたルイスさん、大自然の中で一緒に楽しく遊んでくれて沢山の笑顔を見せてくれたクライアントの子ども達に心から感謝申し上げます。

またロサンゼルスでの研修をコーディネートしていただき、ホームパーティにも何度もお招きいただいた馬上真理子さんはじめ JASPPC のスタッフの皆さん、インアライアンスでの研修のコーディネートをしていただき、いつもやさしく気にかけていたルビーさん、1年間の日本語を学んだ経験から私に日本語の研修資料を作成してくれたマイクさんをはじめスタッフの皆さん、働くということの意義について教えてくれた沢山のクライアントの皆さん。BUCS ではほとんど介助犬と接したことがない私に丁寧に教えていただいた銚山早絵さん。皆様との出会いをこれからも大切にしていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

ノースカロライナ州 TEACCH センターのジルさん、マイクさんをはじめ沢山のスタッフの皆さん、また清水基金海外研修生の高橋さんとは偶然にも研修時期が重なりご一緒させていただき大変お世話になりました。カナダにおいて宿泊先や研修先を紹介していただき、貴重なお話をお聴きすることできたマクマスター大学 CANCHILDE のピーターロウゼンバウム博士をはじめスタッフの皆さん、ブローアービュー子どもリハビリテーション病院のゴルダさんをはじめスタッフの皆さん、皆様のおかげで終盤にさしかかった研修において疲れがたまる中、力を沢山いただくことができました。本当にありがとうございました。

そして、この研修へのチャンスを与えて下さり、3ヶ月間という長期間の研修に送り出していただいた社会福祉法人佐賀整肢学園 からつ医療福祉センター 原寛道センター長はじめリハビリテーション課スタッフの皆様に心からお礼申し上げます。

最後に娘が生後2ヶ月という一番大変な時期に3ヶ月間も家をあけてしまい苦勞をかけてしまった妻 良恵と3ヶ月間元気に過ごしてくれた娘の緋依莉に感謝を伝えて研修報告とさせていただきます。

《研修先一覧》

〈デンマーク〉

Varkstedet Pilevej (障害者作業所)

Pilevej 4 5560 Aarup TEL 456-4432-309

〈アメリカ〉

Jen-Lo Holistic Therapeutic Farm (障がいをもった子どもへの作業療法実施施設)

5125Ute Highway Longmont Colorado 80503 TEL 303-823-6353

JASPPC (障がい児をもつ親のサポート機関)

231 East 3rd St. Los Angeles, CA 90013 U.S.A

E-mail:info@jspacc.org

INALLIANCE (障がい者就労支援施設)

6950 21st Avenue Sacramento, CA 95820 TEL 916-381-1300

E-mail:info@inallianceinc.com

BUCS (介助犬の育成・コーディネート施設)

1215 Sebastopol Road, Santa Rosa, CA 95407 TEL 707-545

E-mail:info@berginu.org

TEACCH (自閉症などへの支援・研究機関)

325 Russet Run Pittsboro, NC 27312 TEL(910) 251-5700

E-mail:TEACCH@unc.edu

<http://www.teacch.com/>

〈カナダ〉

CanChild (障がいをもった子どもたちのための研究機関)

1400 Main Street West, Hamilton, Ontario TEL(095) 525-9140

E-mail:canchild@mcmaster.ca

Holland Bloorview Kids Rehabilitation Hospital (障がいをもった子どもたちのリハビリ病院)

150 KILGOUR Road, Toronto Ontario Canada TEL 416 425 6220

<http://www.hollandbloorview.ca/pages/contactus.php>



盲重複障害者支援の可能性を求めて



社会福祉法人 東京光の家  
光の家新生園  
生活支援員

鈴木 栄美子

〒 191-0065

東京都日野市旭が丘 1-17-17

電話 042 (581) 2340

FAX 042 (581) 9568

平成22年度（第38回） 海外研修生 研修プログラム・内容

氏名	鈴木 栄美子					
所属	(福) 東京光の家 光の家 新生園 生活支援員					
合同研修	デンマーク オーデンセ (4/27～5/2)					
	国	期間	施設名／都市名	施設の種類	研修内容	掲載ページ
5月	デンマーク	5/3 ～ 5/5 (3)	Solgaven /ハイイレ ③	視覚障害者介護支援住宅	当事者の生活支援、介護支援者が働きやすい設備での介護は、高齢者施設でありながら介護付き住宅という国の姿勢	32
	フィンランド	5/6 ～ 5/15 (10)	Keskuspuiston ammattipiston, Arlan toimipaikka /エスポー⑧	職業専門学校	視覚障害者に対し、どのような職業訓練を行い、就労に繋げているか、その体制や環境作りの考察	35
			IIRIS /ヘルシンキ①	視覚障害者支援センター	フィンランドの中心的存在として視覚障害者に必要な支援を提供し研究を続けている実態を視察。その体制や環境作りの考察	37
6月	アメリカ	5/16 ～ 7/17 (63)	Perkins School for the Blind /マサチューセッツ州ウォータータウン⑦	盲学校	自閉症や重度の知的障害を併せ持つ盲重複障害児に対する教育の実地研修	40
			Lighthouse International /ニューヨーク州ニューヨーク④	視覚障害者支援センター	2歳児～就学前の児童の早期療育の実態	42
			New York City Industries for the Blind, Inc. /ニューヨーク州ブロンクス④	盲人工場	21歳～85歳の視覚障害者が働いている。新しい職業を提供し、障害者に就業の機会を与える工場の仕組み、内容	43
			TEACCH ノースカロライナ州チャペルヒル⑧	自閉症などへの支援・研究機関 (ノースカロライナ大学所属)	自閉症の特性を理解し、効果的な治療と教育を施すプログラムにより、最適な支援を探る	44
			The Chicago Lighthouse for People Who Are Blind or Visually Impaired /イリノイ州シカゴ②⑧	視覚障害者支援センター	日中活動提供の場としてのセンター機能を視察。民間において乳幼児～高齢者へと幅広くサービスを提供している実態を視察	46
7月			California School for the Blind /カリフォルニア州フリーモント⑦	盲学校	夏の特設クラスに参加。就労や自立のために必要なパソコン、生活訓練、金銭管理、経営について学ぶ	48
計82日		訪問国3カ国 訪問施設 15カ所				

注：( )内の数字は滞在日数、○内の数字は研修日数

○ 鈴木 栄美子 (成田～デンマーク～フィンランド～アメリカ～成田)



## I. はじめに

生まれつき眼が見えず、発達障害やその他の障害を持つ方にとって、暮らしやすい環境は何なのだろうか。私は約 15 年間、視覚障害とその他の障害を併せ持つ盲重複障害者への自立プログラムを提供する光の家新生園で働いている。

支援を通して成長する可能性を実感しつつ、視覚に障害を負った時期、知的障害の程度、自閉症やてんかん等個々に重複している内容が異なっており、様々な角度からの理解が必要と思われた。

個々のニーズ、文化を理解する手がかりとして、自らが異文化において視覚障害者に対してどのようなサービスが実施されているのかを研修することは、従来の日本文化に囚われた考え方とは違う何かを発見できるかもしれない。そう思い今回研修を希望するに至った。

今回の海外研修では、「個々の可能性を拡大するための支援とは何か」をテーマに、各国の視覚障害者施設を中心に提供されているサービスについて学びつつ、①0歳から3歳児を中心とした早期療育、②視覚障害者への自立に向けたトレーニング、③就労の3点を中心に視察ができるよう依頼した。また、視覚障害ではないが、重複する障害でもある自閉症者への支援を実践するノースキャロライナ大学 TEACCH 部への研修も実現することができた。

拙い語学力ゆえ、聞き取りが不十分なままの理解もあると思われるが、各国、各施設で学んだことを報告したい。

## II. デンマーク（5月3日～5月5日）

### 1. 視覚障害者介護支援住宅ソルガヴェン『Plejehjemmet Solgaven』

首都コペンハーゲン、オーデンセを経てさらに西へ向かい、ユトランド半島にあるヴァイレという街に「Solgaven（ソルガヴェン）」がある。大きな幹線道路沿いにあり、施設に沿った道路にはバス停、信号を渡った向かいには Bilka という大きなスーパーマーケットも存在しており、音信号もある。交通の便や生活を考えても良い立地と思われた。

#### (1) 施設概要

視覚に障害を持ち、日常生活に支援が必要な高齢者に、活動の場と生活の場を提供しているが、知的に障害を持つ方など若い方も少数だが利用していた。

居住者は 56 人（内 2 組は夫婦で利用）。20 人は通所利用。通所者の利用回数はそれぞれ異なっているとのこと。スタッフは 75 人おり、看護師、介護士、作業療法士、理学療法士、調理員等それぞれ資格を持ったスタッフが対応していた。

## (2) 施設の構造

入り口を入った待合室には、水の音や鳥のさえずりが楽しめるよう、噴水があり、鳥を飼っていた。リハビリをするための部屋、理美容室、作業室、食堂、パソコンが供えられた多目的室等共有の場所が中庭を囲んで配置されていた。通路は広々としており、手すりが設置されている。清掃用具や洗濯かごを収納したワゴンは廊下の中央に置かれている。これは、スタッフが最初に覚えることらしく、用具を中央に置くことで、視覚障害者にとって頼りとなる手すりを、安心して使えるようにしているとのこと。この共有場所を中心として、生活する場が左右にある。A～D棟の各フロアに14室ずつあり、共有場所に一番便利で近いB棟には、単独歩行が難しく、車椅子を必要とする等支援を多く必要とする方が住んでいた。部屋は2LDKで、簡易キッチンを備えたダイニングとリビング、寝室と浴室がある。

## (3) 研修内容

### ① 日中活動について

中央にある大きな部屋が通所者、居住者が日中活用する場となっている。活動時間は午前9時から12時と、午後1時から4時だが、参加する内容は自由に選択できる。作業を支援するスタッフが2～3名おり、利用者に声をかけながら活動内容を支援していた。活動内容は次の通りである。

- ・レクリエーション（体操・朗読・ゲーム）
- ・創作活動（織り機・革製品の作製）
- ・機能訓練（理学療法士により運動器具を用いたりハビリ・歩行訓練）

理学療法士の方は、今回私の実習担当者でもある。私がアロマセラピー有資格者であり、ハンドマッサージが可能であることを伝えると、希望を募りベッドを貸してくれた。4名の利用者にアロマ精油を用いてマッサージをさせていただいた。

- ・パソコン訓練（パソコンの操作方法やインターネットの使い方）

デンマーク政府の方針により、誰もがパソコンを習得する権利があり、情報を得る手掛かりとするべきであるとのこと。

操作が可能になった方の中には、自室にパソコンを購入し、使用している方もいるとのこと。故障や不調等のトラブルにも応じている。

### ② 生活について

起床し、食事の流れは8時から始まる。朝食は基本的に自室で食べる。自分で作ることも可能である。私は最も支援度の高いB棟で研修した。介護士は各居住者14室を一人で回り、起床、ベッドメイク、トイレ、着替え、洗顔、朝食、投薬を行う。できないことを支援し、できることは自分でやる。各人必要な支援が異なるため、自分で行っている間に他の居室を回る。支援員は携帯を所持しており、常に他のスタッフと連絡を取れる体制に

あった。

朝食は14名分を1台のワゴン上で準備する。部屋番号とそれぞれ希望する品が記載されたメモに基づき、飲み物、パンの種類、ジャムの有無、そして量をその表に準じてセットし、居室に運ぶ。朝食内容は、パンかクラッカーにジャムやチーズを乗せる程度である。

8時45分にはディレクターと介護士のミーティングが15分程ある。居住者の情報交換を行うが、時にはただのおしゃべりだったりすることもある。毎日意見を交換することが大事だとのこと。

中央で行われる日中活動とは別に、居住者が集う部屋で行われるグループ活動があり参加した。4～5名の少人数で実施されるグループワークで、歌をうたったり、会話を楽しんだりセラピー的な内容が行われていた。

昼食は食堂で利用者全員が一緒に食べる。研修した日が解放記念日にあたり、デンマークの伝統料理といわれる品々を一緒にいただいた。食事は大皿から自分が食べられる量を取ってから隣に回す。取ることが難しい方は、スタッフが取り分けていた。食堂では日中活動支援の職員全員が集まり、配膳に加わる。その後、ディレクター、日中活動の担当者がそれぞれプログラムの内容や連絡事項を伝える。昼食の場で、私が2日間研修することも伝えられた。



居住者へ朝食準備をする様子

#### (4) まとめ

ここでの研修を通して、当事者だけではなく、支援者が働きやすい設備や、当事者主体の考え方をもとに生活を支援する様子が、建物、設備、スタッフの服装からうかがうことができた。

利用者以上に配置されたスタッフ数と、設備が整った個室に驚いた。ディレクターは私が伝えた日本でのスタッフ数に驚き、まだ不十分だと思っていたがもっと厳しいところがあるのだと逆に感心された。日中活動の支援員は私服であったが、生活支援員は看護師のような制服を着用していた。これは居住者からの希望であり、従わなければいけないとのこと。

一見高齢者施設であるが、考え方は介護付きの住宅であるというデンマークの姿勢がうかがえた。

### Ⅲ. フィンランド（5月6日～5月15日）

#### 1. 職業訓練学校アルラ『Keskuspuiston ammattiopiston, Arlan toimipaikassa』

フィンランドでは、視覚障害者に対してどのような職業訓練を行い、就労に繋げているのか。アルラの視察を通して視覚障害者への教育、職業訓練について考える。

##### （1）施設概要

アルラはヘルシンキ市中心部から車で約40分程のフィンランド南部の都市、エスポーにある。視覚障害を持つ女性のための職業訓練所として始まったアルラは、以来視覚障害者への教育と職業訓練の場として存在していたが、2009年からケスクスピスト職業訓練専門学校の傘下となり、18のコースを備える職業訓練学校として、障害者に限らず、移民や成人に対しても教育を受けることができる場となったとのこと。

##### （2）リハビリテーションプログラム

視覚障害者に対して、アルラでは職業訓練前の準備段階として次の訓練を行っている。

- ① 自立訓練（調理・洗濯等身辺処理技術指導）
- ② 歩行訓練
- ③ 点字
- ④ 視覚の使い方（弱視者に対して）
- ⑤ コンピューター関連

アセスメントを併せて行っているため、個々の視力にあわせたテキストの貸与（フィンランドでは基本的に教科書は貸与）や、補助具の提供に繋がっている。

見え方について、支援者が学ぶ機会がある。保護者や支援者が、視覚障害について理解することが大切であるとの考えにより、目の検査器具の横に白内障や緑内障、網膜色素変性症等の見え方を想定したと思われるサングラスのサンプルが準備されていた。「歩いてみるのが一番」と今回は当事者になった気持ちで簡単な歩行訓練体験をさせていただいた。リハビリを指導する指導者のためのコースもあるが、まず当事者の気持ちを理解する努力が大切なので、このような訓練も行うとのこと。足や白杖を通した感触を確かめながら歩くことの難しさ、真っすぐ歩くために視覚を利用している自分に改めて気付かされた。

##### （3）職業訓練

ここでは18種類ある職業訓練コースのなかで、是非参考にしたいと重点的に視察した点を紹介する。



## ① 音楽コース

器楽演奏、ヴォーカル、作曲、音響、ピアノ調律に至るまでコースが分かれており、これだけで専門学校が一つできそうなプログラムの数である。

フィンランド在住の日本人女性ユキさん（健常者）に案内していただく。彼女はヴォーカリストを目指して学ぶ生徒だった。フィンランドは移民でも教育を無料で受ける権利がある。審査があり、合格した者が勉強することができるとのこと。視覚障害者の生徒と共に学んでいる。



ピアノ調律師コース

### ○ 技術指導の様子

1～3名程の小グループで実施している。個々のニーズに応じて、1対1でピアノの弾き方等の技術指導も行われていた。作曲ソフトとして「シベリウス」というソフトがある。これは、演奏をしながらの入力も簡単にできること、普通の楽譜だけでなく、点字楽譜のダウンロードもできるため、楽曲のアレンジや、パートごとに音を確認することが可能である。

## ② 身辺介護士・准身辺介護士コース

身辺介護士は、日本の看護師と介護福祉士の中間的な役割を担うことも可能な職業であり、救急対応や、医療補助、リハビリの手助けから身辺介護まで、幅広く対応している。

### ○ 目標

良い人間性や人間関係の構築、交渉技術や母国語以外の言語習得等、対人援助技術に必要な技術を身につける。



体の構造を学ぶ身辺介護士コース

### ○ プログラムの内容

- ・国で定められた規律や仕事に対する姿勢等の基礎知識
- ・看護と介護
- ・リハビリテーション支援
- ・障害者支援
- ・現場研修



受付業務等の基本的なマナーから体の構造、病気等の医療面、リハビリの実施等広範囲に学び、病院やリハビリテーションセンター等において幅広く業務を請け負うことができることを目標としている。就労が最終目標のため、現場実習をその都度実施し、最終的には5ヶ月間現場実習に向かう。

## ○ 准身辺介護士

身辺介護士の補助的な役割として働くための資格である。専門のコースは存在せず、身辺介護士の一環として出てきた名称であったため、就労する際の肩書だと思われる。正式な身辺介護士としての技術習得は難しい者が、補助的な存在として働くことができるよう支援している。身辺介護士について、基礎的知識の習得が目標である。

私が研修させていただいた日の授業では、アルコール中毒者が倒れた際の救急対応を学んでいた。先生がアルコール中毒者役で倒れており、視覚に障害を持つ生徒が、その臭いに気づき、呼びかけ、心身状態を確認後、駆けつけた救急隊員に状況を引き継ぐまでの一連の動作を確認していた。

この学校では、視覚障害者職業訓練所アルラとしての機能を持つからこそできる視覚障害者への専門的な就労支援は何かを模索する姿勢があった。触覚で確認できる人体模型等教材の充実や、学校内での実習、現場実習を通じた実践的理解に繋げるためのプログラムが充実している。それでも実際の就労に繋げるには、課題が多いと語っていた。

日本でも、視覚障害者が、介護福祉士やホームヘルパー等の資格取得は可能だが、その取得や就労に繋げるためには、当事者自身の努力に大きく委ねられているように思われる。

研修を通し、日本の介護や医療現場の補助的な存在として、盲重複障害者が出来る内容もあるように思われた。「人を助ける仕事をしたい」と思う盲重複障害者に対し、そうした現場で働くことができるよう体制や環境を整えていくことが、これからの私の課題である。

## 2. 視覚障害者支援センター イイリス「IIRIS」

### (1) 施設概要

視覚障害者に必要な支援を行う場所が「イイリス」である。フィンランドの視覚障害者サービスを行うなかでも最も規模が大きく、中心的な存在である。

2004年に設立される。乳幼児、児童、成人、高齢者、盲聾者に対するリハビリテーションプログラムがあり、医師の処方があれば受けることがで



配慮された色彩や構造

きる。プールやサウナ、運動器具も備えており、クラブ活動等日中活動を行う場としても活用されている。

図書、標識、録音物の作製、用具の貸し出し、必要な検査も全て行っている。また、視覚障害者協会や盲聾者協会等の各機関の活動場所も存在している。

## (2) 施設の構造

視覚障害者への配慮がとても行き届いていた。駅からも徒歩5分程度と便利な場所にある。玄関には鳥のさえずり音が流れているが、日本のように一定のリズムではない。あえて不規則にすることが大切とのこと。一定のリズムはいらだちを誘うからである。照明はまぶしすぎないように調整されており、道の中央に真っすぐ照らされるよう配慮されている。壁の色もまぶしく反射しない色で、分りやすい色を選んでいるとのこと。床は部屋の



白杖のガイドとなるライン

入り口にはマットを敷き、床のタイルは色と足触りが異なるものが敷かれている。通路の中央には白杖のガイドとなるよう点字ブロックではなく、細長いレールのようなラインが引かれている。日本の点字ブロックのような存在感がなく、車椅子の方にも邪魔にならない。健常者にとっても道の中央線のようにラインが引かれているので違和感がない。

表示は触れて判断できるよう点字と文字やイラストが浮き上がっており、青と白でコントラストをつけ、弱視者にも分りやすいように配慮されていた。

## (3) 0歳児からの早期療育プログラム

イイリスには宿泊施設もあり、親や兄弟と一緒に宿泊をしながらプログラムを受けることが可能な体制になっていた。家族ぐるみで取り組むことが大切とのこと。日頃の接し方や与えるべき刺激を指導している。また、当事者ではなく家族同士や兄弟同士のグループもあり、お互いの悩みを相談できる場としても機能している。

必要な支援をプロからしっかりと指導してもらえることは親にとって大きな安心感である。「広い」「狭い」「何か障害物がある」という感覚を、幼い頃から意識して身につけることの必要性を感じた。時期を見て「食べること」「歩くこと」を積極的に一人で行うことを指導しており、「自立」について障害があっても幼いころから意識して指導していることに感心した。

#### (4) 学齢期の教育へのフォロー

触る絵本から始まり、点字へと移行するための絵本は布製で安全な物が必要である。これらの本を作成し、貸出し、返却後はメンテナンスする図書館がある。これらを通して触ること、読むことの楽しさを覚え、学校での勉強に繋がっていく。

教科書を本人に分りやすいよう配慮し、作成する業務も行っている。これは単純に教科書を点字化するのではない。立体コピーを用いながら概念を理解できるように作成している。この教科書作りは、先生や本人の意見を合わせながら作成すること。高校の教科書は容易ではないと苦勞を語るスタッフだったが、この教科書を使って学ぶことの楽しさを知ってもらうことが何よりも嬉しいという気持ちが伝わってきた。

#### (5) まとめ

日本とは教育においても、就労においても考え方の違いを感じた。フィンランドは子育て支援として育児休暇の取得が可能という環境もあるが、0歳から家族とともに早期療育に携わる。また学校においても基礎学習の段階では保護者と協力しながら、個々の能力に応じて必要な支援を受けながら学ぶ機会があり、自立に向けて準備をする。高等学校相当になると、将来に向けて親からの自立や就労について意識した教育が成される。フィンランドでは、成人になっても親と一緒に暮らすことは恥ずかしいことと捉えられており、高校を卒業する頃には、ほとんどが親元を離れるとのことだった。

また、障害者が健常者と学ぶことは当然のことであり、必要な場合に特別な支援を行うというスタイルを取っている。これは自分の障害だけでなく、相手もその障害を理解することに繋がる。「お互いがお互いを助ける準備がある。」とアルラの生徒が語っていたように、制度、設備、そして人も障害者を助けるための環境が整っていることは理想的であると思った。

22%の消費税は、研修生の私を苦しめたが、福祉施設の研修を通して、支払った分が社会保障の充実となり、設備、サービスに繋がっていることを実感した。ヘルシンキの個別研修では丁度祝日に当たるが多かった。日本と違い、祝日は休むものとされており、デパートや主要な店がお休みである。不便さは感じるものの、必要以上のサービスはしていない。また、休まなければいけないという法律が、家族と一緒に過ごす時間を作り出していることも事実である。

障害者への偏見はあまり感じられなかった。建物や、道路、公共機関等、全てにおいて車椅子を使用する障害者や高齢者に対して、安心して道路やスーパーマーケット内を移動できる環境があった。そうした環境は、誰に対しても安心できるものと思われる。

支援者にも配慮されたサービスや設備があった。支援者は、それぞれ有資格者であり、プライドを持って仕事をしていた。そして、行き詰った時は仲間同士で相談し、一人で問題を抱えないように支援する体制があった。

ネットワークづくりに国が協力し、支援者が活用している。これは日本にはまだ不足している部分だと思われる。それまで私は日本の視覚障害者ネットワークに目を向ける余裕すらなかった。紙面上やネット上だけでなく、お互いが顔を知り、相談できるネットワーク作りが必要ではないかと思った。

## IV. アメリカ合衆国研修

### 1. パーキンス盲学校『Perkins School For the Blind』（5月16日～5月19日） ーマサチューセッツ州ー

3歳から22歳までが学ぶ盲学校である。アメリカで最初に視覚障害者や盲聾者に対して教育を始めた学校で、ヘレンケラーを教えたサリバン先生はパーキンス盲学校の先生であった。私が視察した全ての施設で見ることができた点字タイプライター「パーキンス・ブレイル」もここで作られ、全世界に供給している。今回は、自閉症や重度の知的障害等を併せ持つ盲重複障害者の方に対して、どのような教育が成されているかを知るため、低学年の授業を中心に研修を行った。

#### (1) Lower School（小学校低学年クラス）の実践

1クラス3名～5名が参加している。パーキンス盲学校では、貧困国から児童を預かり、盲重複障害児に対する教育を行っている。0歳児からの教育が盛んだが、就学年に英語という言葉の理解から始まる実践は、私自身が既に成人である盲重複障害者を支援している立場であり、トレーニングにより習得が可能な内容を探るのに非常に興味深いものとなった。

授業のなかで、意識的に行われていたのが次の2点である。

- ・月日、曜日、一日の流れを理解する。
- ・選択をする。

まず1日のルーティンを作り、スケジュールをチェックさせる。教室に入り、先生と挨拶をし、荷物を所定のロッカーに置いてからスケジュールをチェックする。この1日の決まった流れが自らの行動を促し、同時に自分で確認ができるという安心感



生徒の力にあわせたスケジュール表



を生む。

1年生はこの流れを理解することから始まる。1日の流れを繰り返しながら、コミュニケーションをすることの楽しさ、学ぶことの楽しさを習得していくのである。無理に言葉を発することを強要せず、意思表示の難しい子供には、○×を示したカードを提示させたり、「Yes」「No」が録音されたボタンを押す。○×が難しい子供には、実物を触らせたり、弱視には絵や写真を提示したり、その子供にあわせたコミュニケーションツールが用意されており、毎日繰り返す。

授業時間は40分だが、子供によっては途中休憩時間が入る。「スナックタイム」で、食堂に行き、ジュースを飲み、お菓子を食べる。これは噛むこと、飲むことで口を動かし、刺激に繋がるとのこと。言葉を発することが難しい生徒を中心にこの時間が設けられていた。

もちろんスナックや飲み物の選択、どちらから飲むか、食べるかのも意思表示も、言葉、カード、実物と同時に使う。言葉だけではなく、実物を理解することも必要だが、抽象化された絵や写真、点字を使うことでコミュニケーションの幅を広げようとする様子がみられた。

(2) 必要なことは実践する。必要な道具は作る。

#### ① 手作りのコミュニケーションツール、机、椅子

視覚障害者に必要な支援を常に模索し、実践する力がこの学校にはある。写真で示したスケジュールボードは全て手作りである。それだけではなく、机や椅子、棚に至っても、段ボールで子供にあわせたサイズで作られている。以前教師だった方が現在ボランティアで作製を行っているとのこと。必要な物を依頼すると、作ってくれるとのことだった。

#### ② 五感を生かした授業の実践

音楽療法はもちろんのこと、アロマセラピー、園芸療法も行われている。園芸療法は、温室を持っており、植物の栽培を通して香り、触感、植物の成長を知る機会となる。生け花のクラスもあった。私自身のなかに、視覚障害者に生け花という意識はなかったが、全盲の生徒に色のイメージを伝え、香りを楽しみ、触りながら形を整えていく。独特の感性が備わった作品が出来上がるとのこと。可能性を信じ、実践する姿勢の大切さに改めて感心した。

#### ③ 頻繁に行われる研修会

「悩んだり、嫌になったりした時に、相談する相手はいますか？」この質問に誰もが「YES」と答える。この学校は内部の教師の意見交換だけではなく、親や学校外の人に対しても研修会を頻繁に開いている。また、ここで得られた情報は、実践報告に繋がっている。マニュアル本が作成され、販売されている。見せていただいたが、とても具体的で支援者には分かりやすい内容である。この内容は常に見直され、改訂しているとのこと。常に進化し続ける学校

の底力を見た。

## 2. センター機能を兼ね備えた施設での取り組み ～2施設での研修から～ (5月23日～6月7日) ーニューヨーク州ー

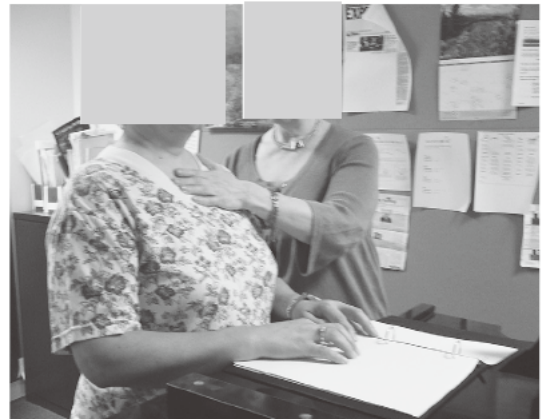
### (1) ライトハウスインターナショナル『Lighthouse International』

#### ① 乳幼児への支援 ーメインストリーミング(統合教育)ー

メインストリーミングは現在主流の考え方である。ライトハウスインターナショナルでは、2歳児から就学前までの早期療育に力を入れているが、遊び場では半数の健常児と視覚障害児が一緒にいる。あえて区別せず、一緒に活動することが大切とのこと。教室の掲示物や本には、点字、拡大文字等が英文と一緒に記載されており、健常児も視覚障害者への配慮を自然と学ぶことができるようにしているとのことだった。

#### ② 音楽活動

ライトハウスには視覚障害者を積極的に受け入れる音楽学校があり、幼児から高齢者に至るまで利用している。ここで重視されていることは、表現することである。習得した内容は積極的に発表する場を設け、その成果を披露している。年に1回メトロポリタン劇場での発表を始め、初心者のために、ライトハウス内の講堂で頻りに発表会を行っているとのこと。発表会の場に参加するが、決して上手ではなくても演奏する楽しさを学び、拍手を浴びることで笑顔になり次の練習へのモチベーションとなる。生き生きとした表情で披露する様子は私自身も励まされた。



ボーカルレッスンの様子

### (2) ユダヤ系ギルド『Jewish Guild for the Blind』(盲重複障害者に対する支援)

ギルドでは22歳から86歳に至るまで、日中活動の場として利用している。スタッフは13名に対して1名と厳しい様子だったが、利用者は明るく陽気な方たちばかりである。

ここで行われている支援は次のとおりである。

#### ①生活訓練 ②レクリエーション活動 ③職業訓練

レクリエーション活動には、運動や朗読等内容は多種に亘っている。生活訓練等も集団で

行われている。職業訓練も施設内の清掃や、食堂での販売補助等お手伝いの域を超えていないため自立に向けての訓練という印象はなかった。児童とは違い、成人へのスタッフの人員配置が厳しい状況は日本と同じである。穏やかな生活に向けての支援が主体であり、個別に目標はあるといっても、それに応じた細かなプログラムの実施は困難な様子。昼食後の午後の時間は迎えるバスを待つだけの時間になっており、アメリカは日本より更に厳しい状況で支援を行っていることが分かった。

一方で、就労に対する斡旋、プログラムは保障されたネットワークがあり、しっかりしているという印象を受けた。ライトハウスがその一環を担い、斡旋する一方で、ギルドのように就労の難しい対象者への受け皿としての役割を担う施設がある。相互のネットワークが構築されている点は見習いたい。

### 3. 個々への特別支援の役割を担う盲学校

#### 『The New York Institute for Special Education』

ニューヨーク特別教育盲学校は、重複障害の方のためと、進学クラスがある。今回は紹介していただいた校長先生が進学クラスであったため、その様子を視察する。

寄宿舎もあり、仲間と生活をしながら勉強を進める。学ぶことの大切さ、楽しさを学ぶことが重視されていた。そのためか、メインストーリーミングといった健常児と学ぶことに重きは置いておらず、視覚障害故に配慮されたなかで積極的に学ぶ機会を与えていくとのこと。同じ障害を持つ仲間同士が助け合いながら安心した環境で生活することが可能であること、進学を励行していることから、入学を希望する保護者が多いこともうなずける。

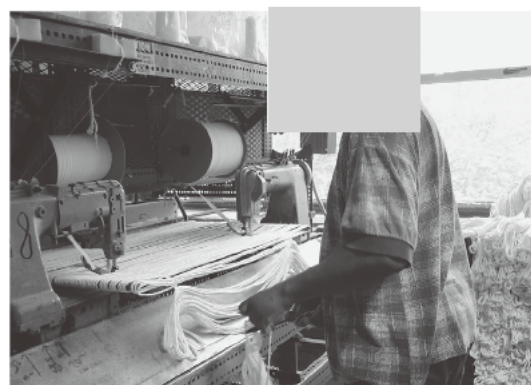
メインストーリーミングも最近早期療育の一環から取り組みが始まったばかりであり、今後の成果に期待したい。

### 4. 作業内容を模索し、収益に繋げる工場

#### 盲人工場『New York City Industries for the Blind, Inc.』

ライトハウスが授産部門から撤退したことで、ニューヨーク市郊外の倉庫を借り、1996年に設立された。21～85歳の方が働いており、盲聾者も受け入れている。

現在、対象者のほとんどが中国や中東等の移民であった。160名の従業員中、120名が法的な視覚障害者とのこと。視覚障害者を受け入れる工場と



モップを製作する様子

して、従業員の70%の障害者を受け入れる必要があるなか、現在75%を保っている。利用者の確保が現在の課題で、常にカウンセリング等を通して新しい職業を提供し、多くの視覚障害者に就業の機会を与えることができるよう努めている。

#### (1) 利用の仕組み

市に申請後、面接を通して、仕事への意思や日常生活態度を確認し、仕事ができるかを評価する。市は、就労を希望する視覚障害者の面接日を含め、仕事開始から90日間について、工場に補助金を出す。利用者は3カ月の試雇期間を通して、働きたいかを選択することができる。工場側も、業務実習を通して正規採用するかを選択することができる。

#### (2) 作業内容

モップやほうき、スポンジ等の日用品の製作、軍からの受注品（軍服、文具等）、郵便物の仕分け、クリーニング等多岐に亘る。国や市から、公的に必要な道具は障害者施設から優先的に購入することは定められているものの、最近では経費削減から輸入品や他の企業との競争も激しくなっており、新しい製品の開発も求められているとのこと。

従業員は、技術の向上が図れるよう、常に新しい作業内容に取り組み、自分に合った仕事探しができるように配慮されている。また、指導者としての養成も行われており、責任を持って仕事に取り組む姿勢の指導も行われていた。

工場として維持していく以上、収益を求められるのは当然である。服を縫うという細かい作業は従来のアメリカでは考えられなかったが、アジア系の移民が持つ細かい手指作業能力を生かし、服の縫製も可能となったとのこと。求められている製品に合わせて、機械を導入し、製作、販売に繋げる努力がなされていた。

### 5. TEACCH SUPPORTED EMPLOYMENT PROGRAM (TEACCH 援護就労プログラム)

(5月20日～5月22日・6月8日～6月12日) —ノースキャロライナ州—

TEACCH (Treatment and Education of Autistic and Communication Handicapped Children) は、自閉症者の特性を理解し、社会生活を送ることができるよう効果的な治療と教育を施すプログラムである。このプログラムを通して、自立した生活は可能になった自閉症者が、次の段階として、働くことはできないか、という親の声に応え、1970年代に援護就労を始める。1987年には州からのサポートを公式に受け、現在も障害者就労支援部 Vocational Rehabilitation (以下 VR) と協力しながら、自閉症の方が社会で働くことができるよう援護している。



### (1) TEACCH の職員体制

スーパーバイザーは2名、ジョブコーチは9名。この援護就労システムを利用している人は80名。TEACCH から15マイル以内の利用者に限定している。

### (2) 利用の仕組み

援護就労プログラムを利用することによって、VRから収入を得ている。本人や企業からはお金を取らないため、直接TEACCHに連絡があった場合でも、ここを通すようにしている最初にフォーマル(T-TAP)、インフォーマルな形で評価をし、最適な支援を探っている。

### (3) 4つの援護就労モデル

自閉症者が働きやすい支援体制とは何か。

TEACCHでは、4つの支援モデルを基に、対象者の特徴や能力に沿った援護就労を展開している。

それぞれのモデルにより、ジョブコーチが支援する頻度や、アプローチの仕方が異なっているが、自閉症者が安心して、長い期間、仕事に携わることができるよう支援が行われていた。



1対1モデル 棚卸し作業の様子

#### ① LTS(Long Term Support)

長期援護システムとでも言うのであろうか。

今はジョブコーチ一人に対して20人が利用しているとのこと。ジョブコーチの援護を常に必要としておらず、週～月単位で利用者に応じた頻度で状況を確認している。

#### ② Shared Support of Dispersed Enclave (グループモデル)

2～5人の利用者に対して1人のジョブコーチが常に付いている。現在は企業での食堂業務が中心である。

#### ③ Mobile Crew

清掃業務等を中心に、移動を伴いながらグループで活動している。勤務時間や1週間の内容は個々の状況にあわせて組まれており、ジョブコーチも仕事面や余暇(報酬含む)支援も行っている様子。ジョブコーチ1名に対し、1～3名の利用者で活動をしている。

#### ④ One to One Model

1対1モデル。利用者1名に対し、ジョブコーチが現場に常に付いている。就労時間雇用



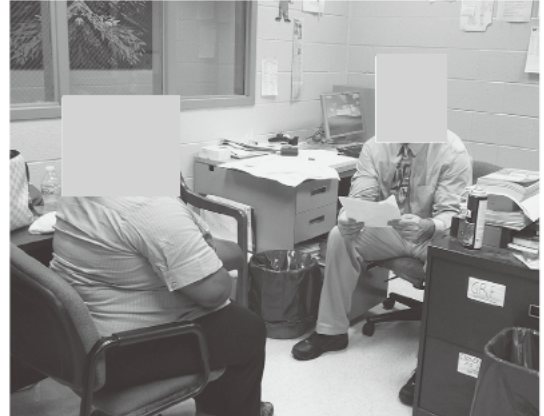
## 1) トレーニングの内容

### ① オフィストレーニング

パソコンを使って顧客対応訓練やデータ入力を実際に短期間で行いながら、次の就職に繋げていく訓練がされていた。

### ② パソコンスキル

基本的なパソコンの使い方から、ワード、エクセル、パワーポイント、ズームテキスト、ジョーズ、タイピング等それぞれの希望に応じ、講師が対応していく。受講は自由な様子。来た人の要望に応じて指導しているとのこと。



面接を実施し、就労内容を探る

### ③ ジョブプレズメント

面接を行い、本人の希望を尋ね、就労の斡旋を行っている。面接はそれぞれの学歴、職歴を尋ねたうえ、どのような仕事がしたいか、立ち仕事は大丈夫か、荷物を運ぶような仕事はどうか、等の確認と実際紹介できそうな場所を伝え、雇用者とコンタクトをとってみることを約束していた。

## 2) 就労のための努力

さらなる雇用場所の拡大を求め、雇用主とコンタクトを取り、就労を依頼することも業務のひとつである。断られることばかりだが、それでも毎日行くことで就労に繋がられるよう努力しているとのことだった。

就労は視覚障害の人にとって厳しいのはアメリカも同様で、支援者側の努力が必要とのこと。雇用者は視覚障害がある故に、できないと思っていることが多いため、まずはビデオを使い理解を求め、手の感覚は優れていて、秤を使わなくても大体の量を盛り付けることができたり、野菜をカットする力があることを伝えなければいけないとのこと。そして、オーナーよりもシェフを口説くこと。ファストフードのようなスピードを求める仕事は向いておらず、質を求めるレストランのほうが理解は得やすいとのことだった。無料で研修期間をもらえるよう口説き、その後は同等の給与で就労を求めれば、大方研修期間を終えると雇用に繋がってくれるとのことだった。

日本では、まだ十分でない分野だからこそ、周囲を口説くのは大変なことだが、やらなければいけないことだと思われた。就労は厳しい道のりだが理解を求めつつ、できる人についてはパートで就労できるよう導いていきたい。

## (2) シカゴ研修から見る視覚障害者のサービス利用

シカゴライトハウスは、日中活動の場を提供する場として乳幼児から高齢者、盲聾者へのプログラムに至るまで幅広いサービスの提供が特徴である。しかし、個別的な支援には限界があり、歩行訓練や生活訓練等リハビリテーション的な内容は州の公的リハビリテーション機関である『ICRE - WOOD』が担っていた。ここは、宿舎を伴った期間限定のリハビリ施設であるが、訓練以外の余暇活動について、ライトハウスの利用も可能で、双方の場所が真向かいにあることから相互に利用している方が多くいた。

また、生活施設である『Friedman Place』でも日中のレクリエーション活動は行っているものの、若い利用者はライトハウスでグループ活動に参加している。

シカゴライトハウスより規模は小さいが、同じく視覚障害者支援センター『Guild for the Blind』では、定期的にパソコンや調理、生活技術やグループワークの講座を設け、無料で視覚障害者や支援者に向けて、セミナーを開催しており、情報交換の場となっていた。

ひとつの施設利用で完結するのではなく、それぞれが持った特徴を生かしながら利用者や支援者が活用している様子を伺うことができた。

## 7. カリフォルニア盲学校『California School for the Blind』

(7月11日～7月17日) -サマースクールでの自立移行プログラム-

カリフォルニア盲学校では、夏の特別クラスに参加する。これはカリフォルニア州在住の視覚障害児が夏休みを利用し、就労や自立のために必要な訓練を行う時間であり、パソコン、生活訓練、金銭管理、経営について学ぶ。

生徒は一緒に寄宿舍でアシスタントにあたる職員と2週間生活し、仕事をする事、自分で生活することについて、体験を通して学んでいく。全てが実習を通しての内容となっており、興味深いものであった。プログラムの内容は次の通りである。

### ① 生活訓練

調理実習、清掃等一つの家で、それぞれの注意点を受けながら実際に調理や清掃活動をグループで行う。

### ② パソコン訓練

コミュニケーションツールとして、どのように活用されているかを学び、実際に操作をする。



近隣のスーパーマーケットへの買い物  
予算に応じた仕入れを学ぶ生徒



### ③ 職業訓練

学校の購買部にあるレジや、バーコードの読み取り機械等の操作方法、店での対応のマナーについて学ぶ。また、近隣のスーパーに買い物に出かけ、商品の仕入れを行う。売れそうな物は何か、予算を考えながら実施する。

## 8. 自立支援センター『The Hatlen Center for the Blind』での取り組み ーカリフォルニア州ー

学校を卒業した者が親元を離れ、自立するために必要な訓練を行う場所である。特徴的なのは、一般のアパートに利用者が住み、そこでトレーニングを受けて自立をするという考え方で、家賃を払い、食事も自分で確保しなければならない。今後自立できるか、グループホーム等の施設を利用していくのか、最後のチャンスとなる場であるとのこと。

生活訓練、金銭管理、歩行訓練も自分が生きるために必要な技術として調理、清掃、買い物等を行っている。あわせて職業訓練も行っていた。

## V. 最後に

今回の研修では、アイスランドの噴火という予期せぬ出来事の影響を受け、まさかの1週間短縮でしたが、海外研修生同士の結束が強まる結果となり、殊更に研修できる喜びをかみしめたひとときでもありました。今回の研修の機会を与えてくださった「中央競馬馬主社会福祉財団」の皆さま、合同研修の機会を失わないよう尽力し、サポートしてくださった長井充良企画管理部長に感謝いたします。

また、年度早々の大切な時に研修を勧めてくださった「社会福祉法人 東京光の家」田中亮治理事長は、研修生の先輩（第2回海外研修生）として、計画や滞在中のご配慮をいただき、感謝しております。「光の家新生園」川辺和政園長は、安心して研修に向かうことができるよう業務を整理し、研修中もメールを通して励ましてくださいました。この施設があったからこそ、研修に至ることができました。心より感謝申し上げます。

数えきれない方々と出会い、言葉の壁を越えて情報を分かち合えたことに心から感謝いたします。皆さんとの出会いを通し、実習生や海外からの研修生を迎え、指導する立場の私にとって、意味ある研修を提供することに必要な姿勢や大切さを改めて実感し、学ぶ機会となりました。自分の国の福祉を少しでも良くしたい。この気持ちは世界共通でした。些細な実践からになるかもしれませんが、多くの人に伝え、実践し、少しでも変わることができたらと思います。本当にありがとうございました。

《研修先一覧》

〈デンマーク〉

施設名 : Solgaven (視覚障害者介護支援住宅)  
住 所 : Solgaven, Solgavealle 14, 7100 Vejle N4 Denmark  
電 話 : + 45 75 81 62 11  
F a x : + 45 76 41 50 20  
E-mail : solgaven@vejle.dk

〈フィンランド〉

施設名 : Keskuspuiston ammattiopiston, Arlan toimipaikassa (職業専門学校)  
住 所 : Puustellinmäki 4 - 6 FIN-02650 Espoo Finland  
電 話 : + 358 9 51 108 242  
F a x : + 358 9 4748 2746

施設名 : IIRIS (視覚障害者支援センター)  
住 所 : Marjaniementie 74 Itäkeskus, Helsinki Finland  
電 話 : + 358 9 3960 41  
F a x : + 358 9 3960 43 45  
E-mail : Beatrice.Wallman@nkl.fi ( Ms. Beatrice Wallman)

〈アメリカ／マサチューセッツ州〉

施設名 : Perkins School For the Blind (盲学校)  
住 所 : 175 North Beacon Street , Watertown, Massachusetts 02472 U. S. A.  
電 話 : 617 972 7226  
E-mail : info@perkins.org

〈アメリカ／ニューヨーク州〉

施設名 : Lighthouse International (視覚障害者支援センター)  
住 所 : 111 East 59th Street New York, New York 10022 U. S. A.  
電 話 : 212 821 9484 (Policy and Evaluation, Research & Education)  
F a x : 212 821 9712 (Policy and Evaluation, Research & Education)  
E-mail : cstuen@lighthouse.org (Ms. Cynthia Stuen)

施設名 : Jewish Guild for the Blind (視覚障害者支援センター)

住 所 : 15 West 65 Street, New York, NY 10023 U. S. A.

電 話 : 800 284 4422

F a x : 212 769 6266

E-mail : info@jgb.org

施設名 : New York City Industries for the Blind, Inc. (盲人工場)

住 所 : 3611 14th Avenue, Brooklyn, NY 11218-3750 U. S. A.

電 話 : 718 854 7300

F a x : 718 854 2700

E-mail : RBland@nycib.org (Mr. Richard C. Bland)

施設名 : The New York Institute for Special Education (盲学校)

住 所 : 999 Pelham Parkway, Bronx, NY 10469-4988 U. S. A.

電 話 : 718 519 7000

F a x : 718 231 9314

E-mail : jcatavero@nyise.org (Mr. Joe Cataverro)

〈アメリカ／ノースキャロライナ州〉

施設名 : Chapel Hill TEACCH Center (自閉症支援機関)

住 所 : 100 Renee Lynne Court Carrboro, NC 27510 U. S. A.

電 話 : 919 966 5156

F a x : 919 966 4003

E-mail : Cagle@email.unc.edu (Ms. Jill Cagle)

〈アメリカ／イリノイ州〉

施設名 : The Chicago Lighthouse for People Who Are Blind or Visually Impaired  
(視覚障害者支援センター)

住 所 : 1850 West Roosevelt Road Chicago, IL 60608 U. S. A.

電 話 : 312 997 3662

F a x : 312 997 3667

E-mail : dominic.calabrese@chicagolighthouse.org (Mr. Dominic Calabrese)

施設名 : Illinois Center for Rehabilitation and Education-Wood  
(視覚障害者リハビリテーションセンター)

住 所 : 1151 South Wood Street Chicago, IL 60612 U.S.A.

電 話 : 312 633 3520

F a x : 312 633 3805

E-mail : Brenda.Alexander@illinois.gov (Ms. Brenda Alexander)

施設名 : Friedman Place (視覚障害者生活支援施設)

住 所 : 5527 N Maplewood Ave, Chicago, IL 60625 U.S.A.

電 話 : 773 989 9800

F a x : 773 989 4889

E-mail : noelle@friedmanplace.org (Ms.Noelle Mack Fisher)

施設名 : Guild for the Blind (視覚障害者支援センター)

住 所 : 180 North Michigan Avenue, Suite 1700, Chicago, IL 60601 U.S.A.

電 話 : 312 236 8569

F a x : 312 236 8128

〈アメリカ／カリフォルニア州〉

施設名 : California School for the Blind (盲学校)

住 所 : 500 Walnut Avenue Fremont, CA 94536 U.S.A.

電 話 : 510 794 3800

F a x : 510 794 3813

E-mail : pwilliams@hcblind.org (Ms.Patricia Williams)

施設名 : The Hatlen Center for the Blind (視覚障害者自立支援センター)

住 所 : 2430 Road 20, #B112 San Pablo, CA 94806 U.S.A.

電 話 : 510 234 8649

F a x : 510 234 4986



攻撃性の高い児童への治療的アプローチを探す旅  
ードイツ・アメリカでの取り組みを学んでー



社会福祉法人 阪南福祉事業会  
情緒障害児短期治療施設 あゆみの丘  
心理・職能判定員

益 田 啓 裕

〒 597-0101

大阪府貝塚市三ヶ山 1 3 8 - 2

電 話 0 7 2 ( 4 4 7 ) 1 2 0 0

F A X 0 7 2 ( 4 4 7 ) 1 8 0 0

平成22年度（第38回） 海外研修生 研修プログラム・内容

氏名	益田 啓裕					
所属	(福) 阪南福祉事業会 情緒障害児短期治療施設 あゆみの丘 心理・職能判定員					
合同研修	デンマーク オーデンセ (4/27～5/2)					
	国	期間	施設名／都市名	施設の種類	研修内容	掲載ページ
5月	ドイツ	5/3 ～ 5/14 (12)	Kinderheim St. Maurits /ミュンスター ②	非行性のある児童を対象としたグループホーム、一時保護所	施設紹介、問題への対処の仕方のDVDを視聴しながら、児童へのセラピーと効果的なアプローチ方法について	57
			LWL-Jugendheim Tecklenburg /テクレンブルグ ③	非行性のある少年少女向けの施設	施設の運営方法、スタッフ配置住宅環境、安定した大人との関わりが重要であることの意義	58
			Caritas-Kinder-und Jugendheim /レイネ ③	グループホーム 心理治療・療育施設	野外活動に重点を置き、困難を乗り越えて自信を持たせる療育方法	60
			Outlaw-Gesellschaft für Kinder-und Jugendhilfe gGmbH /グレーベン ②	小規模グループホーム 青少年支援センター	子どもへの関わりを通して孤立感を和らげ、プライベートが維持されるしっかりした構造を持つホーム運営の在り方	64
6月	アメリカ	5/15 ～ 7/18 (65)	Transition School at the Evelyn Hambleton Center /フロリダ州セントオーガスティン ②⑥	情緒障害児の学校	学校に適応できない生徒のための学校。日本にはないポイントシステム、グループワークによる学級運営の実態、IEP(個別教育計画)、PCM(専門的危機管理) 導入の検証	66
			Saint Augustine Youth Service /フロリダ州セントオーガスティン ②①	情緒障害児向け グループホーム (男児のみ)	小・中・高とTRAILと呼ぶ自立目的ホームの4つホームにて、心理計画、心理治療についての実態日本との社会的背景家族環境の違いを比較検討	69
			Center for Play Therapy /テキサス州デントン ⑦	プレイセラピー	ノーステキサス大学にあるプレイセラピーのワークショップに参加。日本でもなじみ深い療法のテーマで、ユニークさと工夫が随所に見られ、セラピー業務の重要性の確認	73
7月			Loma Linda University Behavioral Medicine Center ① /カリフォルニア州レッドランド	情緒障害児と大学病院との入院通院治療をつなぐセンター	子どもと家族との関係に焦点を当て、問題行動の背景にある感情を理解することの意義、日本での実践に調和させるには。	74
計 83日		訪問国2カ国 訪問施設 8ヶ所				

注：( ) 内の数字は滞在日数、○内の数字は研修日数

○ 益田 啓裕 (成田～デンマーク～ドイツ<ミュンスター→フランクフルト>～アメリカ～関西空港)



## I. はじめに

連日、思わず目を覆い、耳を塞ぎたくなるような児童虐待のニュースが報道されている。悲しいことではあるが、保護者と一緒に生活できなくなる児童が一定数生み出されてしまうのが現実である。ところがニュースでは、虐待環境から保護された彼らがどのような生活を送るのかについてまではあまり伝えられない。いったい彼らはその後、どのように生きていくのだろうか？

私が勤務する情緒障害児短期治療施設（以下、情短施設）は、いわば様々な事情で家庭で生活できなくなった児童の「その後」を扱う仕事をしている。その中には、虐待を受けた児童が数多く含まれている。彼らの一部は、情短施設や児童養護施設、あるいは児童自立支援施設のような入所型の児童福祉施設で一定期間生活することになり、自身の心身の傷つきからの回復のためのケアを受けることになる。

私は臨床心理士として児童の心理的なケアに従事しているが、虐待を受けた心のダメージから回復することは、一筋縄ではいかない。想像を絶する怒りや悲しみ、不信感が渦巻いており、ことあるごとにそれらの感情が暴力的言動となって噴き出す。治療に向けて前向きな気持ちを持たせることさえ困難な場合もある。このような言動が施設内で多発すると、施設の生活を円滑に運営することすら立ち行かなくなる危機を感じることも多い。

彼らの育ちを知れば、それまで辛い思いをしてきたことがひしひしと伝わってくる。しかし、だからと言って、私たち大人は彼らのこのような暴力的言動を許容してしまうことはできないだろう。それをしてしまえば、彼らに世の中で出会う問題や葛藤を、暴力という不適切な形で解決することを学ばせてしまうことになる。それは彼らとその後の社会生活における人間関係で、悲劇を再び繰り返すことにもつながりかねない。私たちに求められていることは、この暴力の背後にある感情を共に分かち合いながらも、その感情を暴力以外の方法で乗り越えていくためにはどうすればよいか、彼らと考えていくことであると思う。

しかしながら、私たちはこのような暴力を生み出す攻撃性の高い児童とどう付き合っていけばよいかについて、効果的な方法やアプローチを十分に持ち合わせているとはいえない実情がある。みな毎日頭を抱えながら、手探りを続けている。「世界中の私たちと同じような施設や機関は、どのように攻撃性の高い児童を援助しているのか？」。私の海外研修のテーマは、日本での児童の攻撃性を治療するためのモデルを作るため、ドイツ・アメリカを訪問し、それぞれの支援者がどのように児童へアプローチしているかを、体験的に学ぶことであった。3ヶ月あまりの訪問は、日々驚きと発見の連続であった。世界中に私たちと同じ心意気と願いを持って精力的に活躍しているたくさんの援助者と出会い、大いに勇気づけられた。簡潔ではあるが、以下はその時のことを記したものである。



## II. ドイツ研修

### 1. Kinderheim St. Mauritz (5月5日)

#### ○ 施設概要

1800年代半ばに、カソリック系の施設として設立された。組織全体では、入所児童数は170名。スタッフ数は150名。訪問した施設には、4つの小舎に平均10人前後の児童が生活している。1つの小舎に、ソーシャルワーカーが5人ずつ配置されている。夫婦小舎制になっているハウスもあり、主に12歳以上の非行性のある児童が対象。



Kinderheim St. Mauritz

#### ○ 施設の特徴

里親への指導、援助にも力を入れている。里親志願者や、既に里親をしている人々を対象に、グループワークを行っている。

日本でいう一時保護所にあたる施設もあり3歳から12歳までの児童が入所している。ここでは、数週間から数か月の間、保護のための施設内の建物で生活し、その間にアセスメントを進め、問題を把握する。その後は家庭復帰か、あるいは他施設への措置変更になるかが決められる。

保護者に未熟さや養育能力不足がある家族を対象に、家族全体が生活の練習をするハウスもある。4つの家族が、一つの建物の中で生活している。ティーンネージャーの母親が子どもと一緒にそのハウスで生活し、ソーシャルワーカーが指導や助言をする。

措置が可能な年齢は、0歳から21歳まで。乳幼児は、専門の養育ができるスタッフが対応する。成人の場合は、近隣にアパートを借りて生活をしており、必要があれば施設が支援をするという形式をとる。措置制度で費用は州が負担する。プロジェクトを計画し、スポンサーを募ることで支援してもらう場合もある。

新しいプロジェクトとして、施設内に学校を作り、そこに子どもを通わせることを考えている。少人数のクラスに、1名のソーシャルワーカーと、1名の教員が配属される予定。子ども用の机は暴れても動かないように重いものになっている。窓ガラスも割れないものを使用している。

## ○ 心理治療について

心理士は全部で7人いる。業務内容は、児童へのセラピーと、アセスメント。セラピーをするための単独の棟がある。児童の興味があることを共有するために、場合によってはパソコンや料理をしたりすることもある。そのため、セラピーの部屋の中にキッチンがあった。また、砂場がある部屋もあり、そこでは療育的な関わりを行っている。

訓練 (coaching) とスーパーヴィジョンが必要不可欠だと話す。週に一度外部から、スーパーヴィジョン専門の心理士と、生活を含めた教育的支援を行うペダゴグ (Padagoge) に来てもらい、両者からソーシャルワーカーに対して、スーパーヴィジョンをしてもらう。

施設が独自に作成した、施設紹介と、児童自身が出演している問題への対処の仕方を説明したDVDを視聴する。施設紹介については「なぜ自分がこの施設に来ることになったか」「施設に来る前の自分はどうだったか」「将来の夢」などについて、子どもたちがそれぞれに語っていた。問題への対処法の映像については、実際にトラブルに関わった児童自身が出演して、よく起こりがちな問題行動の対処法として、悪い方法と良い方法をそれぞれ演じている。仲間外れにあったとき、暴力を見かけたとき、犯罪に巻き込まれた時の対処法を、子ども自身が演じる。仲間外れには、話し合いをしようとする提案すること、暴力には、仲間に加わるのではなく、警察や大人を呼ぶこと、路上で恐喝や暴力などの犯罪 (児童からの場合も含む) に遭遇したら、大声で周囲に自分が犯罪に遭遇していることを知らせること、などが演じられていた。映像では、同年代の児童に携帯電話を奪われるシーンが演じられていた。

## 2. LWL - Jugendheim Tecklenburg (5月6日～7日)

### ○ 施設概要

ドイツの Lengerich 地方付近に数多くの施設を持つ。グループホーム、非行系の少年向け施設、愛着に課題のある児童向けグループホーム、父母子のための生活支援施設などを運営している。スタッフ数は全体で250人程度。

心理士からの話を聞く。心理士の仕事は、セラピー、アセスメント、保護者へのカウンセリングが中心。スタッフのスーパーヴィジョンを行うこともある。4日をこの施設の業務に充て、残りの1日を他の施設で働いている。心理士は、勤務時間はフレックスで、自宅で仕事をすることも可能。ソーシャルスキルトレーニングに力を入れている。感情について学ぶワークや、会話を増やすワークなど。AD / HD (注意欠陥・多動性障害) や、愛着に課題のある児童が増えていると話されており、この点は日本と同じ傾向があるように感じられた。

### ○ 非行系の少年少女向けの施設

この施設は元農場で、広大な敷地を持つ。作業が中心で、テレビやコンピューターはない。

14歳から18歳までの児童が10名生活している。スタッフは6人いる。人を信頼することを、体験を通して学ぶことに力を入れている。アフリカのナミビアに、児童をインターンシップとして派遣し、一定期間生活させることがある。

手作りのナイフを枕に隠し持っていたのを発見したこともあり、常に子どもの状態には目を配っておく必要がある。子どもには、一人一人役割があり、責任を持って生活をするようにしている。

法人として、現在は施設のホームをより自然に近くて、広いところに移動させている段階であると言う。それだけでトラブルがかなり減ったという。環境は大事であると話されていた。

子どもが無断外出をしたら、すぐに警察に連絡するようにしているとのこと。警察とは密接に連携しており、施設側でコンタクトリストが作成され、警察と共有されている。子どもが施設を出て無断外出をしても、スタッフが探しに行くことはなく、警察に一任するように決められている。もしスタッフが施設外で子どもとトラブルになった場合、施設が加入している賠償の保険が利かないためである。

#### ○ 不適應の強い児童向けの施設

広大な自然に囲まれた中に、一軒家があり、そこに児童が2名(定員5名)、スタッフ3名がいる。庭には大きな\_trampolineがあり、子どもはそれで遊ぶのが大好きだという。子どもとの関わりの際には、特になにか特別なことをするのではなく、自然の中で共に遊び、日常の関わりの中で、スキンシップを密にしていくことが、一番大切であるとスタッフが話されていた。2週間に一回、心的トラウマ治療が専門の心理士が訪問し、スタッフのスーパーヴィジョンを担当している。そこでは、スタッフは生活全般についての助言をもらっている。「スーパーヴィジョンなしでは、とてもじゃないがやっていけない」と話される。



ホームの庭にある\_trampoline  
小学生の子ども達が楽しそうに飛び跳ねていた。  
周囲は広大な自然に囲まれている。

#### ○ 情緒障害児向けの学童保育施設

学校が終わったら、特定の子どもが訪問して、時間を過ごす。グループワークを行ったり、保護者が訪問し子どもと交流する機会があると言う。保護者が施設を訪問できない場合

は、スタッフが家族の自宅まで赴き、面接を行うこともある。移動型教育支援（Ambulante Erziehungshilfen）と呼ばれている。青少年向けのグループホームで昼食を摂らせてもらった。そこでは、窃盗や暴力に課題がある子どもが7名生活していた。適応が良くなってくると、近所のアパートで独り暮らしを始め、自立への準備を行う。

この施設で感心したことは、地域にある様々なホームを、一つの法人が束ねて運営していることだった。情報はインターネットを通じて、全法人内で共有され、スタッフはどこからでも情報の入力・参照ができる。また、基本的なスタッフの配置基準が、子ども2人に対してスタッフ1人というのが原則であることに驚いた。特にプログラムなどはないが、広大な自然に触れること、十分に広い個室がある住宅環境、さらに加えるなら、濃密で安定した大人との関係を築くことなどが最も大切という哲学は、頷ける部分が大きかった。

### 3. Caritas-Kinder- und Jugendheim（5月10日～11日）

#### ○ 施設概要と特徴

グループホーム、家族介入、心理治療・療育等を行う法人。スタッフは、Social pedagogik（ソーシャルワーカー的役割）、Help pedagogik（発達の・療育的な専門性を持つソーシャルワーカー）、心理士と、大きく3つに分けられる。

特徴は、野外活動に力を入れているところ。自転車でフランスまで旅をしたり、不登校児にヨットを修理して実際に走らせたりしている。登山や、カヌーなどもしている。困難さを乗り越えることで、自信がつくという。



Caritas-Kinder- und Jugendheim

ドイツの学校には学力のレベル順に、上からギムナジウム、R、H、L、Gと5種類の区別がある。施設内の児童は、大抵HかLの学校に通っている。また、E-Schuleという情緒障害児向けの少人数クラスもある。

かつては、ELという主任のような役割のスタッフがいて、ほぼすべての処遇はELが窓口となり行っていたが、近年は完全一児童一担当制に変わっている。子どもへの援助について、個々のスタッフに主体性を持たせることが狙いだという。週に一回、ほぼ全ての職種のスタッフが集まって3時間程度のミーティングの時間を取り、児童についての報告と方針についての話し合いをしている。



## ○ 心理治療について

セラピーは小学低学年向けと小学高学年向けの部屋、加えてティーンネージャー向けのカウンセリングの部屋がある。アセスメントについても話を聞く。大まかにパーソナリティテストと、関係性を見るテストに分別される。投映法を用いることがある。アセスメント用のテスト用品が充実しており、子どもの愛着関係を見るためのテストを見せてもらう。このテストでは、検査のためのおもちゃ道具が用意され、例えばジュースをこぼして母親が怒った時にどうするかなどを、おもちゃを使って表現してもらった。家族関係を見るテストでは、F R T (Family Relationship Test) がある。本人と家族の関係を見る。他にも、文章完成法やC B C L (Child Behavior Checklist: 子どもの行動チェックリスト) などがある。アセスメントには、セラピー開始から約 10 セッションを充てる。

EVAS というデータベースシステムを見せてもらう。ドイツ内の 2 万人以上の公的保護下にある児童・青少年がデータベース化され、これまでにどのような養育や治療を受けたのかが網羅されている。施設関係者限定でアクセス・データ報告をすることができる。入力されたデータは、スタッフ間のディスカッションのために使用されることもある。お互いが違う評定をした場合、なぜそのような差が生まれたかを話し合うことで、児童への理解が進むという。

施設内で暴力事案が発生した際の介入について、心理士から話を聞く。被害・加害の児童が参加するグループワークを行った。何が起きていたのか、状況を話し合い、その時に感じた感情を表現させる。それぞれの場面について、振り返りを行っていく。その後、人間関係における距離の取り方について、心理教育を実施する。最後にお互いの感情を伝えあい、謝罪から許しへ至るプロセスをたどる。このような暴力や攻撃性のある児童へ介入する際に大切なことは、起きた問題事案のことを、関係者全員が把握していて、ことあるごとにその時に起きたことについて立ち戻り、振り返れるようにしておくこと、また、日頃から児童が自分の気持ちについて話し合える環境と雰囲気作りをしていくことだという。

## ○ 子どもの生活のケアについて

小学生が生活するホームを案内してもらう。子どもたちは守られている感覚を得ることが大切なので、ホームのスタッフ以外は、子どもの居住棟には立ち入ることができないようにしている。訪問した時間帯には子どもたちは登校しており、幸運にも部屋の中を見させてもらうことができた。「わかりやすい構造化された環境」(clear structure) が何よりも大切と話される。

児童の入浴については、スタッフは手伝うが、子どもの体に触れることはしない。テレビは 30 分に制限し、番組もスタッフが選択する。予定を前もって知らせておくことも大切だと考えており、日時に合わせて、表にスタッフの写真を貼り知らせておくようにしている。子



どもは自分の色のマグネットがあり、振り返りの時間に、各表情が描かれた顔の紙に自分の色のマグネットを置き、一日のことについて話ができるように工夫している。

エピソードを聞く。他人を叩くことでしかコンタクトを取れない子どもが入所してきた。コミュニケーションの取り方を知らないのだろうとスタッフは考えた。これまでの生育歴を知り、保護者との関係を把握した。殴られる関係が続いていることを知った。スタッフは車のおもちゃで本児と関係を取ることを試みた。少しずつやり取りができるようになり、今では叩くことはなくなった、と話される。

生活を見るスタッフは、心理士にケースを見てもらい、定期的にフィードバックをもらっている。各専門職から構成されるチームで働いているので、グループのダイナミクスを把握することが大切。スタッフ一人一人のリミットを知ること、お互いを信頼することが重要。子どもとの距離の取り方も徹底している。身体的に1メートル以上の距離を取ることが、ヨーロッパでは基本的な人と人の距離感であると話され、バウンダリー（境界線）は非常に意識されていることが伺われた。

子どものニーズを知ることが最も基本的なことであるとのことであった。子どもがどのような環境から来たのかを知り、子どもにとって必要な関わり方を考える。スタッフは子どもにとって、良いモデルになるように振舞わなくてはならない。被虐待の児童は、関わりに工夫が必要な場合が多く、トラウマの専門である心理士にも助言をもらっている。

子どもの問題のみに囚われず、子どもの全体性を尊重することの意義を強調されていた。問題行動については、児童のグループの力動性も理解しながら、トラブルがエスカレートしないように、予防的に介入していくようにしているとのことだった。また、スタッフと子どもの関係の取り方については、まずは、スタッフのアグレッション（攻撃性）のパターンを知っておくことが大切。子どもの課題にスタッフが触れることで、スタッフのアグレッションが職場で目立ちやすくなる。それを放置しておく、スタッフ間やスタッフと子どもとの関係で、アグレッションをぶつけ合い、関係が悪くなることもあるので、そこに巻き込まれないように自分を知ることは非常に重要ということであった。子どもがスタッフと展開しようとする過去の人間関係の再現は、いわばゲームであるので、そこを意識して取り組むようにしていると話されていた。また、援助に役立つ新しいコンセプトやアプローチは、積極的に検討・導入するようにしているとのこと。チームミーティングでは、児童の生活構造について話し合うための時間を定期的に設けているとのことであった。子どもへの援助の仕方を構造化するためには、その構造を話し合うための仕組み（ミーティングをするための時間や場、話し合いのルール）を作ることが大切であるとのことであった。

#### ○ 攻撃性の高い児童への治療について

攻撃性の高い児童の心理治療を行っている心理士から話を聞く。しっかりとしたアセス

メントと、子どもとの関係性を重視することが基本であると話されていた。彼らはトラウマ体験をしてきている者が多い。どうやって彼らが過酷な日常を生き延びてきたのか、児童の生きる上でのモチベーションは何かなどを知るように心がけている。攻撃性がある児童の場合、攻撃性を向けようとしている相手が誰なのか、それは父親なのか、母親なのか、などを特定していく。

最終的な治療目標は、他者に共感性を持てるように育てていくこと。誇りにできるものを持たせることが大切であるが、子どもたちは腕力の強さを自慢する傾向が高い。エネルギーを暴力的なものに使うのではなく、スポーツなどの建設的な方向へ使うように支援するように心がけているとのことであった。

暴力的事案が発生した時の対応についての基本的な方針を教えてください。まず、①自分が行ったことに責任を取らせ、その後、②問題の背景を聞き取り理解する。1970年代はこの順番が逆（②→①）だった。それではうまくいかないことが多いことが分かってきたので、現在では、この順番（①→②）で関わるようにしている。他者への共感性は、このような取り組みの後、しばらくしてから遅れて身に付き始める場合が多い。

攻撃性の高い児童へのグループセラピーも行っている。一週間に2時間、一年に35回のグループセッションを行う。「暴力以外の方法で、何が気分良く感じるのか」を知ることが大切。ルールを参加者全員で決めて行う。自分が行った暴力行為を社会（public）の中での振舞いとして扱う。セッションで人の話を聞いてどう思ったか、メンバーからフィードバックさせる。その内容について信じられるか、正直に話をさせる。ロールプレイも行う。加害者と被害者、両方の立場を演じさせ、責任の取り方を演じてもらう。暴力をふるった事実に向き合わせる（face the reality）ことをねらいにしている。そのように自分に向き合うことで、罪悪感が生まれ、被害者への感情が出てくる。一つのグループをやりきるのに、2年くらいかかる。並行して、親との関係についても話し合っていく。親がスタッフよりも影響力があれば、あまりセラピーの効果はないとのことであった。

他職種との連携は、この児童にとって、次の段階は何があるのか、ということを中心に話し合うことが多い。措置機関、被害者のセラピストと話し合いの機会を持つこともある。自分たちが行っていることを、なるべく社会にオープンなものにするように心がけておられるとのこと。

anverlo.deというウェブサイトを紹介してもらいながら、スタッフが児童から暴力を受けた際の身の守り方について話を聞く。問題行動には、長く話しかけても効果がないので、3語以内（stop it! など）で伝えるようにしているとのことだった。

#### 4. Outlaw-Gesellschaft für Kinder- und Jugendhilfe gGmbH (5月12日)

##### ○ 施設の特徴

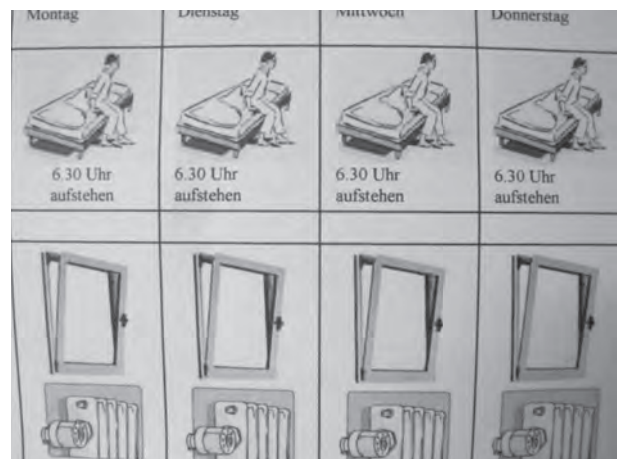
幅広く児童にまつわる支援を行っており、その中で、小規模グループホーム、青少年センター、非行傾向のある青少年入所施設を訪問した。

小規模グループホームは、郊外の閑静な場所にあり、看板などもなく、普通の家と見た目はまったく変わらない。ペダゴグ、教師、ソーシャルワーカーがいる。問題が深刻な児童が、少人数で生活している。ここでも構造がとても大切で、いたるところに工夫がみられる。一日の日課の流れが視覚化されて掲示されている。昼食後30分は、自室に入ることが決められている。地域に溶け込むことがとても大切。友人なども連れてきてよい。

児童は基本的に安心して生活できるように工夫しているが、それでも暴力的になる場合もある。その際は、部屋に一人にさせず、クールダウンさせる方法を考えながら行っている。隣にスタッフが座る。落ち着かない、叫ぶ場合はホールディング。他のスタッフは、子どもと該当児から離して、ほかの遊びをするようにする。日々子どもへの関わりを通して、孤立感を和らげ、「自分は一人じゃない」という感覚を得られるようにすることが大切とのこと。

グループホームを運営するにあたって大切な要素は「小規模であること」「プライベートが維持される家であること」「しっかりとした構造があること」とであると話される。

青少年の入所施設では、振り返りと、児童について話し合うミーティングに力を入れている。システムをサポートするためのシステムが重要であるという。最も大切なのは、スタッフにとって振り返られる (reflect) 場があるということ。



グループホームでの日課表

アットホームな雰囲気であったが、その中にも生活を構造化する知恵がさりげなくちりばめられている。

##### ○ ドイツのソーシャルワークの歴史

ドイツのソーシャルワークの歴史についても話を聞く。1980年代は好景気で、ソーシャルワーカーの職域が開拓された。しかし1990年代は景気が悪化し、予算がカットされるようになった。予算配分にも優先順位が決められ、施設での援助効果について根拠が求められるようになった。データベースの作成や援助効果の数値化などは、このような背景から進められてきた。2000年代は、福祉業界も失業が増えてきており、施設も生き残りをかけて、より高い援助効果を生み出せるように日々切磋琢磨しているとのことだった。

## 5. ドイツまとめ

ドイツの書店に行くと、子ども向けの本や教育関係の書籍が数多く並んでいた。社会が子ども達のことを本当によく考え、大切にしている様子が、各機関の実践を通して伝わってきた。訪問したドイツのすべてのホームが、子どもの健全な成長のために必要なコンセプトや資源と予算を獲得し、各職種の業務を専門職として確立させている印象を持った。施設で出会ったどのスタッフも、プロフェッショナルとして自分たちがやっていることを相手に自信を持って説明していた。子どもの援助についての話し合いを十分に行っているのも感心した。日本であると日々の忙しさにかまけて、話し合いをする時間がなかなか取れないのが実情だが、ドイツの児童福祉では、まず話し合いありきで、その話し合いを基に生活の支援を効果的に機能させていた。そのような姿勢で日々の業務に取り組むことにより、目的や方針が共有され、ぶれのない治療効果の高い支援が可能になるように思われた。また、スタッフのパフォーマンスの向上のためにも、スーパーヴィジョンや職場集団のチームワークのマネジメントを日本以上に重要視していたのも印象的だった。

私と同職種の心理士は、個別で広い部屋を与えられて、アセスメントと子どもの心理療法に精力的に取り組む、周囲から高い評価と信頼を得ていた。日本では児童指導員に当たるペタゴゲの人達も、専門職として高い援助スキルと知識を備えていた。彼らが自身の資質を研鑽しつづけることができる教育・訓練システムがあるとのことだった。日本でもこのドイツのように、子どもを育てる専門職を養成するシステムを作ることが不可欠であるように感じた。

また、あるグループホームでは、一つのホームで生活している子どもは2人のみで、彼らにスタッフが5人ほどで対応できるようになっていた。日本の児童福祉の実情からみたら羨ましい限りであるが、これも無尽蔵に予算を要求しているわけではなく、「なぜこの児童に少人数のグループホームが必要なのか」を検討しつくして出た結論であることを知った。彼らを大人数の集団で生活させても、もしかしたら衣食住の基本的な生活自体は「なんとかなる」のかもしれない。だが、そこを「なんとかなる」という漠然とした判断で済ませていない。子どもの個別の心理的な成長や環境を考えた結果、本児らにとっては非常にストレスがかかり、よい影響は少ないと判断され、これだけの環境を提供するに至った。その意思決定のプロセスをおろそかにせず、多くの職種間の話し合いや検討、アセスメント、そして実践が行われている。各ホームの実践の結果は、データ化され定期的に報告書としてまとめられていた。これこそが、子どもに関わるプロフェッショナルの姿勢だと感じた。

これだけの準備とシステムや人的・物理的な資源が用意されていれば、攻撃性の高い児童に対しても効果的な関わりができるように感じた。暴力的行動に直接的にプログラムを使って対処するというよりも、暴力を生みださないような環境を子どもに提供することで、健全



な成長を促進させることに重きを置いているようだった。十分なスタッフ数と、広大な自然環境、このような資源が子どもの援助に求められていることをスタッフ間全体で共有し、体系化されたチームで援助するための知識と技術を基に、実践していくことが重要であることを学んだ。

### Ⅲ. アメリカ研修

アメリカでは、1ヶ月半という比較的長期間、フロリダのセントオーガスティン市に滞在し、地域の情緒障害児のケアについていくつかの施設を訪問した。

#### 1. Transition School at the Evelyn Hamblen Center (情緒障害児向けの学校) (5月17日～6月11日)

##### ○ 概要

Transition School (以下、トランジッション) 主に地元の学校に適応できなかった生徒が通学する。AD / HD、被虐待などが多数を占める。教師への反抗、生徒間のケンカ、暴力・暴言などもある。教師へ暴力を振るった場合、アメリカでは教師がその対象生徒を受け持つことを拒否できる権利がある。そのような事情で地域の学校から、トランジッションへ通うことになる生徒もいる。問題行動の程度によって、地元学校のEBD (Emotional Behavior Disable: 情緒障害のある児童) クラス、トランジッション、入院治療施設に分かれている。

教師は、各1クラスに2名ずつ配置される。クラスは、小学クラス、中学クラス、高校クラス、知的障害クラスの計4クラス。1クラスの人数は2名～10名程度で、トランジッション全体で25名程度。メンタルヘルスカウンセラーが1名常勤で配属されている (他の通常の学校では、非常勤の場合が多い)。



Transition School  
At the Evelyn Hamblen Center

##### ○ ポイントシステムについて

学級運営は、ポイントシステムを軸に行われる。日頃の生徒の振る舞いについて、問題になる行動が特定化される。望ましい行動を維持できればポイントを獲得することができ、問題行動が起きた場合は、ポイントが与えられない。レベルは3段階ある。レベルが上がるにつれ、獲得すべきポイントのパーセントが上がる。レベル1は85%、レベル2は90%、レベル3は95%を獲得することが求められる。レベル3を一定



期間維持できるようになると、名誉生徒（Honor）と呼ばれる段階に入りトランジッションは卒業間近になる。子ども達は、自分達のレベルの到達度を常に意識しながら学校生活を送っていた。レベルが上がるにつれて、特典が増える。例えばレベル2になると、学校にある自動販売機でジュースが買えるようになるが、レベル1ではできない。

このようなポイントシステムは、日本では若干の違和感があるかもしれない。しかし、アメリカがチップの文化を持つ国であることを考慮すれば、ポイントシステムがアメリカで受け入れやすいシステムであることも理解しやすいと思う。というのも、アメリカのレストランやタクシー業界で働く人たちは、最低限の賃金でサービスをしており、よりよいサービスをすると客から、支払う料金の10%～15%程度のチップがもらえるシステムになっている。自分がよい働きをすればするほど、多くのものが得られるように動機づけされているのである。学校や施設で、彼らが社会から期待される望ましい行動をすれば、よりよい報酬が与え



「私たちの頑張りを見て！」

子ども達の今のレベルの到達度がどれくらいかわかるようになっていく。

られる。結果的に社会と本人が得をすることになる。このような社会背景を考えると、ポイントシステムがアメリカで一定有効に機能していることに肯ける部分があるのではないだろうか。

ポイントが一日で、規定の数以上貯まると、その日はゴールドデイになり、レベルが上がる。特典に換えられるクーポンや、お菓子やおもちゃがもらえる。規定数にポイントが達しない場合は、フリーズデイになり、特典はもらえない。レベルもそのままになる。

## ○ メンタルヘルスカウンセラーについて

メンタルヘルスカウンセラー（Mental Health Counselor）から話を聞く。授業中の特定の時間に、生徒はメンタルヘルスカウンセラーと個別の面接の機会を持つ。学校での生徒の振る舞いについて話し合い、助言したり、ソーシャルスキルを教えたりする。その際は家族のことは扱わず、学校での問題のみに焦点を当てる。話が家族の話題になりがちであるが、その際は学校での本人の振る舞いについて話題を戻すようにし、家族の問題については、他の機関にリファー（依頼）するようにしている。

メンタルヘルスカウンセラーは、生徒がトランジッションに入学する前から生徒とコンタクトを取り、スムーズに入学できるようにコーディネートする。本人と地元校の担任教師へインタビューを行い、これまでの問題歴や本人の状況について聞き取る。

グループワークも行っている。遊びを取り入れたソーシャルスキルトレーニングが中心。私が参加したグループワークでは、年度末の時期ということもあり、高校生を対象に、一年間の毎日のポイント獲得の推移を記録したものを黒板に掲示し、それぞれの時期に何が起きていたのかについて、一年の振り返りを行っていた。

地区内にはメンタルヘルスカウンセラーが4名おり、彼らがチームを組んで、情報交換を密にしながら、生徒のトランジションへの入学・卒業をコーディネートしていく。地区内の他のメンタルヘルスカウンセラーとの話を聞く機会も設けていただいた。教師と生徒をつなぐ役割として、それぞれが自分の持ち場で活躍しているように映った。「ポイントシステムは、生徒の学校内での良い振る舞いへの動機づけを高めることができるが、それも生徒とのラポール（信頼関係）なしではうまくいかない。」と力説されていたのが印象的だった。

また、情緒障害児についての理解を学校全体で深めるために、勉強会や情報提供を積極的に行っていると話された。

各生徒には、I E P（Individual Education Plan：個別教育計画）が作成される。学力だけではなく、本人の対人スキルの査定、獲得されるべき適切な行動の特定、問題行動への介入方法について話し合われ、シートにまとめられる。生徒への支援は、このI E Pを軸に行われる。

中には、ポイントシステムに馴染まない生徒もいる。その際には、全体で用いる基準を適用するのではなく、個別に課題を達成した際の報酬を設定する。例えば、なかなかレベルが上がらない生徒でも、一日問題なく過ごせた場合には、個別にメンタルヘルスカウンセラーとバスケットシュートのゲームができたりする。生徒の知的能力や情緒発達段階を丁寧に吟味して、それらをI E Pに盛り込むように工夫していると話す。

## ○ P C Mについて

生徒が不穏な状態になり、自傷・他害の恐れがある際には、P C M（Professional Crisis Management：専門的危機管理）という生徒の身体を安全にホールディング（抱えて保護）するアプローチが取られ、スタッフ全員がその訓練を受けている。P C Mの実施は、日時・関係者の名前などが詳細に記録される。私の実習中にも、P C Mが実施される状況に立ち会う機会が何度かあった。生徒が不穏になり、机をひっくり返すなどして暴れ、再度の指示にも従えなかったため、クールダウンの部屋に移動した。P C Mの手続きに基づき、教員3人でホールディングが始まる。2人が男児の腕の支点を上から押さえ、もう一人が男児の足を押さえる形で、男児が暴れないようにしていた。P C Mに基づき行うことで、生徒も教師もケガをすることなく、安全に落ち着くことができるとのことであった。

## ○ 授業の進め方について

中度の知的障害のある生徒向けのクラスは、教室にはキッチン、洗濯機、乾燥機などがあり、実際の生活のためのスキルを身につけることが主眼に置かれている。標識や数字などが覚えられるように、様々な素材を使って教えられていた。たとえば、信号の色が何を意味する

かについて、赤・青・黄色の丸型のチョコレートを並べることで学習していた。

一定時間を問題なく過ごすことができると、ゲームや遊びの要素が入った楽しい活動に参加できる。訪問期間には、日本の任天堂のコンピューターゲーム機のWiiで、教師と生徒が入り交じってダンスのゲームをしていた。

ポイントシステムやPCMは、「教師と生徒が共に授業に集中する」という学校本来の目的を、なんとかして達成するための必死の試みの上に成立しているように感じた。タイムアウト（クールダウンのために教室から一時的に離れること）や、立ち歩き、生徒間のいざこざなども何度か見受け



教室の内部

机は仕切られて、余計な刺激が入らないように工夫されている。ドアの奥は個室になっており、落ち着かない場合は自ら願い出て使用できる。

られたが、ほとんどの時間は、生徒と教師が穏やかに本を読みあったり、歴史についてディスカッションをしたり、自分の好きなことについて作文を書いて読み合うなどの、普通のどこの学校でも見受けられる、平和な光景であった。

## 2. Saint Augustine Youth Service (SAYS) (情緒障害児向けグループホーム) (5月17日～7月2日)

### ○ 概要

情緒障害児向けのグループホーム。4つのホームを持つ。小学生向けホーム、中学生向けホーム、高校生向けホーム、この3つのホームに加えて、自立を目的としたTRAILと呼ばれるホームが他のホームとは別の場所であり、そこでは主にSAYSで一定の治療成果が出た児童や、自立を目指した高校生が生活している。各ホームの入居数は、平均7～8名。



Saint Augustine Youth Service(SAYS)  
奥のホームは中学生向けの建物

スタッフは、施設長、治療部長、事務員が一名ずつ。セラピストが3名、ソーシャルワ

カーが2名、各ホームにハウスペアレントと呼ばれる夫婦が泊まり込み、生活場面での児童への世話をしている。補助的に各ホームスタッフが1～2名ほどつく。週末はハウスペアレントは休みを取って自宅に戻り、他のスタッフがホームに入る。

入所児童は男児のみで、小学生から高校生まで。全体で25名ほどが生活している。入所理由は、家庭での被虐待がほぼ全体を占める。日本の情短施設と比べると、比較的重篤なケースが多く、家族のほとんどは貧しく、保護者が犯罪を起こし長期間収監されている場合も少なくない。診断はAD / HDや感情障害、行為障害などが大半を占める。

平均入所期間は、12ヶ月から20ヶ月。入所条件は、地域の学校（EBDクラス、トランジションも含む）に通学できること、知能指数が基本的に70以上であること、入所までに診断を受けていること、などがある。

#### ○ SAYSでの治療システム

SAYSでもポイントシステムを活用している。入所から段階（フェイズ）があり、適応が進むとフェイズが上がっていく。フェイズが上がることは「グレイドアウト（Grade Out）」と呼ばれる。児童の生活の様子はポイント化され、一日単位、あるいは週単位でグレイドアウトできるかどうかのカウントされ、児童に知らされる。それぞれの子どもの振る舞いによって特典に差が出てくるので、例えば一つの空間内で、ある児童はテレビが見られるが、他の児童は見られずに、カーテンで仕切られた空間で過ごす、という状況が生じてくる。当事者の児童たちは、自分の振る舞いの結果、待遇の違いが生じてくることは当然のこととして受け入れていたのが印象的だった。

児童は男児のみであったが、スキンシップを求める行動は、日本に比べて少ないように感じた。

また、投薬治療を受けている児童は、年齢に関わらず自身の診断名を知らされており、そのことで副作用などについても自覚的に報告しているとのことであった。

#### ○ 心理治療について

週に一度、セラピストによって、各ホームごとにグループワークが行われる。主にソーシャルスキル習得をねらいとした心理教育が中心。

個別の心理治療も行っている。児童によって頻度は様々であるが、週1～2回で50分程度。主に児童の問題に応じた介入的な認知行動療法、ソーシャルスキル教育、心理教育、EMDRなどが主流。様々なワークブックが用意されており、子どもの特徴によって使い分けている。



## ○ 入所手続きと治療計画について

入所までの流れは、以下の通りである。虐待事案があれば、関係機関に通告（Baker Act）される。その後、措置機関（guardian, child guidance center など）から入所依頼が施設になされ、入所の可否が決まる。

入所すれば、2週間以内に初期入所計画を作成する必要がある。その後、1ヵ月以内に、治療方針の大本になるマスター治療計画を作成。内容は、心理社会的生育歴、投薬歴、現病歴、保護者情報、児童の長所、能力、中心的な治療テーマなど。必ず本人から、自殺や殺人の意志がないかどうかを確認・明記する。ターゲット行動（target behavior）を特定し、それぞれのターゲットに合わせてどのようにアプローチしていくかを明記する。退所の条件を、これらのターゲット行動が一定期間のうちに改善することを目標とする。たとえば、「児童Aは、120日間、他児への暴力的いじめをおこさないこと」などの条件が、具体的に複数設定される。それらの条件やターゲットは定期的に見直しが行われる。毎週2時間ほど、ハウスペアレントと児童についてのミーティング、セラピスト、ソーシャルワーカー同士のミーティング（clinical meeting）が行われる。

## ○ 自立生活について

自立生活を目指したグループホームもあり、トレイル（TRAIL）と呼ばれている。SAYSの児童で、行動が改善した児童がこのトレイルに移ってくることが多い。閑静な住宅街にある比較的大きめな住宅に、10代後半の男児が生活している。現在は5名。スタッフはハウスペアレントが2組、ソーシャルワーカーが2名、セラピストが1名いる。

子どもたちは特典が増えるので、トレイルに行くことを目標にしている児童が多い。SAYSの児童に比べると、トレイルの児童はトラブルは少ないとスタッフは感じている。その理由としては、もちろん成熟した児童が多いということもあるのだろうが、生活空間が広いからという部分が相当大きいように感じている。過密な空間であれば、すぐにトラブルが起きる。この家は個室が確保されており、いざこざがあればすぐにその場を離れて落ち着くことができる。子どもはこのトレイルを退所した後も、スタッフを頼って連絡してくることがある。彼らに自立のための情報提供や、連絡を取ることで、様子伺いの連絡を定期的に行うことも大切だと考えている。トレイルはSAYSに比べて自由な部分が多いが、それでも児童自身がルールが必要だと訴えることが多い。一日の振り返りシートを作成して、活用している。また、学校で停学（suspend）になれば、その期間はホームでも特典がなくなったり、逮捕されればこのホームを出なくてはならないというような、自然な結果（natural consequence）を児童に学んでもらうように工夫している。

日本の児童や家族を取り巻く環境について話し合う機会があった。日本では核家族化が進み、地域の支えが得られなくなってきている。また、これまでのしつけが伝承されなくなっ



てきており、そのため母親が育児を一人で抱え込まなくてはならない状況が増えてきていることなどを伝える。それらを聞いたスタッフからは、1980年代のアメリカの家族の状況に酷似しているという感想を頂いた。

スタッフは、子どもとの関係づくりにいつも気を配っている。開設当初は、セラピストやソーシャルワーカーやハウスペアレントの役割があいまいで混乱した。現在は、セラピストはセラピー、ソーシャルワーカーはサポート役、ハウスペアレントは総合的に指導の責任者と分けている。そのことで児童も大人との関係を取りやすくなってきている。女性スタッフだけではトラブルに対処できないことがあるので、その際は警察を呼ぶようにしている。

#### ○ 性問題のある児童について

性加害を行った児童は、原則的に裁判所からの命令を受け、日中は性加害児童のための教育機関に通学することになる。ホームでは子どもの行動が改善していくと、その分フェーズが進み特典が増えていくが、その際、性的問題のある児童に必要な制限について、細かくチェックしていくとのこと。海やプールなどの肌の露出を目にする機会の多い場所は、例えば児童のフェーズが進んでいても、制限されるか、大人の監視が必要とされる、と話される。性加害をした児童への治療プログラムは、パスウェイズやRelapse prevention（再発予防法）などで、日本でも翻訳されている。グループワークも行っている。

性問題を起こした児童は、警察の取り調べを受けるが、その際は、児童自身が性犯罪の被害にあっている場合も考えられ、大人の性犯罪者に比べて、より丁寧できめ細かい対応をする必要があると話される。この性加害児童のための教育機関では、通所児童は、基本的に知能が平均レベルの児童に限定しており、知的障害や自閉症のある児童の治療・教育は行っていない。

#### ○ 治療システムと社会背景の変化について

SAYSのスタッフに、＜民族や文化の違う子どもやスタッフたちで、どのようにコンセプトや関わり方を共有しているのか？＞と尋ねる。タイムアウトや、コンセクエンス（自身の行動の結果を体験的に学ばせること）については、ここ数年で浸透してきているとのこと。それまでは子どもと揉み合いになることが多かったが、そのようなやりとりは、子どもによっては、過去のトラウマを活性化してしまい、逆効果になることが分かってきた。ホールディングもトレーニングを受けたうえで行うことで、怪我なく実施することができる。

ホールディングは、最後の砦（last resort）としてあり、そこに至るまでには複数の段階があるので、大抵はホールディングに至る前にトラブルは解決される。このようなプログラムやシステムに救われている部分があると話す。ハウスペアレントは、この施設で働くようになってからも、大学でフォローアップのトレーニングを受けることができるという。

20年近くこのホームで働いている SAYS のスタッフから、「子どもが大人に向ける態度が大きく変化している。かつてはスタッフや警察に反抗する児童は少なかったが、今は当然のようになってかかかるとなっている。子どもの中には、警察に拘束されたことを勲章のように自慢する風潮さえある。」と話される。

### 3. Center for Play Therapy Summer Institute (7月5日～7月10日)

ノーステキサス大学 (North Texas University) にある、プレイセラピーセンター (Center for Play Therapy) 主催のワークショップに参加した。ワークショップの内容は、日本でもなじみ深い箱庭療法や表現療法についてであり、それぞれのテーマについては、私もよく知っているものであったが、テーマへの切り口に講師のユニークさと工夫が随所に見受けられ、とても興味深く学べた。例えば、箱庭療法についてのワーク



Center for Play Therapy

室内にはプレイセラピーの文献情報が世界中から集められていた。

ショップでは、脳科学の知見がふんだんに盛り込まれていた。なぜ箱庭療法が子どもの心理治療に効果的なのかについて、論理的で説得力のある説明が行われた。たとえば、記憶には、自伝的記憶、顕在記憶、潜在記憶という、3種類のレベルがあるという。自伝的記憶は、時系列に沿って整理された、自身のライフストーリーに沿った記憶。顕在記憶は、言葉によって概念化され、整理されている記憶。潜在記憶は、言葉になる前の記憶で、様々な種類の感覚、身体感覚、感情、イメージなどが、入り混じっている。箱庭療法は、様々な感覚を使って行う治療法なので、これらの潜在記憶が顕在記憶に移行していくことを手助けすることが可能になる。そうすることで、これまで整理されず曖昧であったものを形にすることができる。それは不安が少なくなることにつながり、症状が改善されていくという。

他のワークショップでも、一つ概念を説明する際に、様々なメタファー（隠喩）や例え話、モデルが用いられており、心理士自身が実践していることを相手に理解しやすく伝えることも、心理士としての重要な業務であることを、あらためて理解することになった。

#### 4. Loma Linda University Behavioral Medicine Center (7月15日)

大学病院と連携しており、入院治療と通院治療をつなぐ役割を持つ。対象は児童から成人まで。特に、思春期から青年期にかけての患者の治療に力を注いでいる。15名のセラピストで120名程度の患者を受け持っている。

基本的に、児童のみに焦点を当てることはせず、家族を含めた治療を行うようにしている。子どもに顕在化している問題は、家族の協力なしでは解決しないとのことであった。

アドラー心理学をもとに、治療プログラムを実施しており、治療方針について、以下のような説明を受ける。保護者や彼らの周囲の大人は、社会的常識(Common Sense)に基づき、彼らの行動をより現実的に適応的な行動に修正しようとするが、なかなか問題は解決しないだろう。それは彼らの「個別の論理(Private Logic)」を理解しようとしなからである。子どもにはそれぞれの個別の論理があり、これは必ずしも事実に基づいていない。これまでの家族における彼らの生き立ちの中で、彼らは自身についての信念を形成する。子どもたちに見受けられる怒りや自傷行為や破壊行為などを「問題」と捉えるのではなく、彼らを取り巻く家族との関係を「解決」しようとした結果の行為として理解するようにしている。

家族内で問題が起きるのは、子どもが持つ個別の論理と、大人の持つ社会的常識がぶつかりあうからであると考え。そこで、まず子どもの論理と、大人側の論理がどのように違うのかを理解するように働きかける。互いの認知、感情、精神性がどのようなものか、それぞれがどのように機能しているかを理解する。次のステップとして、子どもに顕在化している行動を通じて、本当の問題が何かを特定する。これは、破壊行為や自傷行為などの表面化している行動ではなく、その水面下にある、意識化されていない感情を特定する。例えば、攻撃性の高い子どもの背景に、不安や悲しさや怒りがどうかを探り、それらを特定化し、問題とする。それらの感情を理解することで、子どものこれまでの生き立ちの中で、彼らが何を感じ、どのような自己概念や人との関係性を形作ってきたのかを、正確に理解するように努める。その上で、社会的常識に基づいた望ましい行動習得のための働きかけを行うことにより、大きな変容が見受けられるという。

「親は子どもを変えよう変えようとするが、本来変わるべきは、親自身や、親の子どもについての理解の仕方である」と話されていたのが印象的であった。顕在化している問題行動



Loma Linda University Behavioral  
Medicine Center

のみに焦点を当てた場合、一旦解決したかのように見えるが、その後また新しい問題行動が出てくることが多い。行動の背景にある様々にうごめく感情や、自尊感情に焦点を当てていくことがとても重要であることを強調されていた。「私たちが子どもの問題に対処する際に最も大切なことは、むやみに子どもを変えようとするのではなく、子どもが感じている感情や心情に向き合い、とどまり続けながら、彼らがどのような体験をしているかを理解しようとするのだと思う」と話されていた。

## 5. アメリカまとめ

様々な人種と価値観が入り組んでいるアメリカの子どものケアを、一括してまとめるのは難しい。ただ、アメリカの特徴として一つ言えるのは、様々な価値観を持つ人々が受け入れられるように、分かりやすくしっかりとした枠組みのあるシステムを作っているということである。言葉を尽くして議論し、具体的で分かりやすいケアを提供する。このことは、援助者自身がケアの方法を理解しやすくなるだけではない。最も大切なのは、子ども自身が分かりやすいケアの環境で生活できることであろう。アメリカで出会った子ども達は、自分が不適切な行動をすると、どんな結果が返ってくるかを明確に知らされ、それが起こると実際に知らされていたことと同じ結果を体験していた。これは不適切な行動だけに限ったことではなく、望ましい行動をしたときにも、同じように本人が得をするような結果をもらえるようになっている。アメリカの援助者が子ども達に学んでほしいことは、むしろこの社会的に望ましい振る舞いであることを何度も強調されていた。自分が社会に対して貢献すること、そのことが自身の人生にも良い影響をもたらすことを、具体的に経験的に学んでほしい、というメッセージを、スタッフと子どもとの関わりを見ている中でよく感じた。このような人生哲学は、アメリカ人の根底に美徳のようなものとして息づいているのだと思う。

アメリカの心理士にも数多く出会い、彼らとよく話をした。訓練を受けてきたバックグラウンドは様々であったが、自身の実践スタイルや、アプローチの根拠となる概念を、熱心にこちらが理解できるまで説明してくれるところに、強いプロ意識を感じた。

暴力的言動を止めるために、アメリカの心理士が考えていることも多岐にわたっていた。行動分析士 (Behavior analyst) と呼ばれる心理士は、暴力を生み出す行動に焦点を当て、その行動が発生する環境や人とのやりとりを詳細に分析した上で、具体的な行動で介入し、より望ましい振る舞いができるようにトレーニングしていた。プレイセラピーのワークショップで出会った心理士は、箱庭、絵画、粘土のような素材を用い、視覚、聴覚ではなく、触覚、嗅覚なども含めた多くの感覚に働きかけることで、これまでの体験が整理され問題行動が改善していくことを、脳科学の見地を援用しながら体系的に説明していた。思春期向けのクリニックで働く心理士は、子どもと家族との関係性に焦点を当て、親が子どもの内面



を理解し直し、問題となっている行動のみを見るのではなく、問題行動の背景にある感情を理解していくことに意味があると話していた。それぞれの心理士は、アプローチこそ違えども、根拠や一貫性を持って説明され、どれも説得力があった。

#### IV. 全体的考察

ドイツ、アメリカの様々な機関を訪れたことで得られた知見をもとに、子どもの攻撃性を治療するための知恵をまとめてみようと思う。

まずは、子どもを取り巻く環境を調整することの重要性である。私たちは、暴力をふるう子どもがいる場合、まず彼らの個別の内面に焦点を当てがちである。しかし、子どもを取り巻く住環境やスタッフの人員数が子どもに大きく影響し、また、自然に恵まれた地域で生活することで、様々な問題行動がかなり減少することが多いのを実感した。子どもたちも自然の中で遊ぶことが好きだと話すことが多かった。日本でも、住環境が子どもに及ぼす効果について、もっと注目してもよいと考える。

二つ目は、子どもの治療に家族を参加させることである。どの施設でも、家族の協力がなければ、子どもの治療は好転しないということを力説されていた。欧米では家族も治療を受けることがほぼ義務づけられていた。ドイツの施設では、家族が子どもと一緒に施設内に用意されたホームで生活し、援助者からサポートと助言を受けていた。このように、徹底的に家族の面倒を見ようとする姿勢に感服した。日本では「親はなくても子は育つ」という言葉に代表されるように、子どもが育つ環境は、ある程度自然に任せておいても構わず、特に手立てをしなくても子育ては身につくものだという認識がどこかにあるように思う。しかし、ドイツやアメリカではそれを一つ一つ教え込んでいた。移民が多く多文化な国は、日本に比べて、お互いが理解しあうこと、伝え合うことにとっても意識的だった。育てを家族に委ねてしまうのではなく、社会が丁寧に具体的に確認して、不足している知識や技術があれば、それを余すところなく教えていくことが、これからの日本でも求められているように思われる。

三つ目は、子どもにとって分かりやすい環境を作ることである。子どもに何をして欲しいのか、そして何をしたらいけないのか、また、して欲しいこと、してはいけないことをするとどうなるのかを、明確に示し実行に移している施設は、問題行動が少なかった。加えて、このような分かりやすい環境を提供している施設は、スーパーヴィジョンが効果的に機能し、スタッフが高いチームワークを維持していることも特徴的だった。彼らスタッフ間のコミュニケーションは非常に活発で、子どもとの関わり方についての話し合いを大切にしていた。子どもが理解しやすい環境を提供するためには、スタッフ同士が理解しあえる場を意識的に作っていくことが不可欠であるのと思う。

最後に言えるのは、暴力的な部分だけを見るのではなく、子どもの全体性を見ていくこと



である。暴力や器物破損、自傷行為などの目に見える子どもの問題行動については、まずはそれらをやめさせるための働きかけが求められているのは言うまでもない。しかし、そこで働きかけを終わりにするのではなく、本当に大切なのは、当事者の子どもたちと共に、その暴力を生み出す様々な感情が一体どこから来るのかを探索し、理解していくことなのだということ、改めて実感した。

振り返ってみれば、ドイツの子ども達もアメリカの子ども達も、話す言葉こそ違え、振る舞いや表情、やりとりは日本で見る子ども達とほぼ同じだった。出会うスタッフの人々が話すことも、日本でも大切にされている事柄が多かった。「基本は世界中、どこでも一緒なのだ」と行く先々でよくそう思った。

それでも、日本へ帰国する機上で、以上に挙げたようなことを、「日本の福祉施設で実践に移せるのだろうか？」と、ぼんやりと考えていた。すぐに達成するのは難しいかもしれない。でも、不可能ではないと思う。ヨーロッパやアメリカの広大な大地のいたるところで、日本車をよく目にした。その中でもハイブリッドカーのプリウスは、特別目を引くものがあつた。電気とガソリンという、全く違うものを一つのシステムとして調和させているプリウス。そこには、まったく異なる多種多様なものを取り入れ、その中に独特の調和を見出す日本人の生き方が色濃く反映されているように映った。

プリウスを見習って、今回の海外研修で得た知見を日本での実践の中で調和させていきたい。きっと可能だと思う。そして、日本の子どもたちが、悲しみや苦しみを乗り越え、欧米で見てきた子どもたちの笑顔に負けないような子どもに育つように、生かしていきたいと強く思う。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった財団法人中央競馬馬主社会福祉財団の小川理事長、長井企画管理部長をはじめとする財団の皆様、馬主の皆様に厚くお礼申し上げます。また、ドイツでの実習先を紹介していただいた福岡女学院大学の内本充統准教授、3ヶ月という長丁場の研修を、快く送り出していただいた阪南福祉事業会の永野孝男理事長、あゆみの丘の白土隆司施設長をはじめスタッフの皆様、本当にありがとうございました。

《研修先一覧》

〈ドイツ〉

施設名 Kinderheim St. Mauritz  
Mauritz-Lindenweg 56 48145 Münster  
Phone: +49(0)251-1330415  
<http://www.st-mauritz.de/>

施設名 LWL - Jugendheim Tecklenburg  
Kieselings Kamp 149545 Tecklenburg  
Phone: +49(0)05482/66-0  
[http://www.lwl.org/LWL/Jugend/W\\_J\\_T/](http://www.lwl.org/LWL/Jugend/W_J_T/)

施設名 Caritas-Kinder- und Jugendheim  
Unlandstraße 101 48431 Rheine  
Phone: +49(0)5971- 4002-37  
<http://www.caritas-rheine.de/>

施設名 Outlaw-Gesellschaft für Kinder- und Jugendhilfe gGmbH  
Theodor Boomgaarden Münsterstraße 105 48268 Greven  
Phone: +49 (0) 25 71 / 95 39-0  
<http://www.outlaw-jugendhilfe.de/>

〈アメリカ〉

施設名 Transition School at the Evelyn Hamblem Center  
1 Christopher St. St. Augustine, FL 32084  
Phone: (904) 547-8560  
<http://www-gats.stjohns.k12.fl.us/>

施設名 Saint Augustine Youth Service(SAYS)  
50 Saragossa Street St. Augustine, FL 32084  
Phone: (904) 829-1770  
<http://www.staugustineyouthservices.com>

機関名 Center for Play Therapy

1400 Highland St. Room 114 Denton, TX 76203-0829

Phone:940-565-3864

<http://cpt.unt.edu/>

施設名 Loma Linda University Behavioral Medicine Center

1710 Barton Road Redlands, California 92373

Phone:909- 558-9200

<http://lomalindahealth.org/behavioral-medicine-center>

障害のある人の創作活動の視察  
—それを支える専門的な人材の役割—



社会福祉法人 わたぼうしの会  
たんぽぽの家  
アートアドバイザー

中井 幸子

〒 630-8044

奈良県奈良市六条西3-25-4

電話 0742 (43) 7055

FAX 0742 (49) 5501

平成22年度（第38回） 海外研修生 研修プログラム・内容

氏名	中井 幸子					
所属	(福) わたぼうしの会 たんぽぽの家 アートアドバイザー					
合同研修	デンマーク オーデンセ (4/27~4/30)					
	国	期間	施設名/都市名	施設の種類	研修内容	掲載ページ
5月	イタリア	5/1 ~ 5/8 (7)	Reggio Children /レジ ョ Emilia ⑧	市内乳児保育所・幼児 学校教育機関	8日間の研修プログラムに参加幼児の 創造性に着目し、保育に生かすこと の実習。障害児の受入れ方法も議 論・視察	88
	デン マ ー ク	5/9 ~ 6/4 (27)	FOF's KUNSTSKOLE Bifrost /ヲナス⑩	障害のある人の芸術学 校	自立的な創作意欲を育むことを目的 とする芸術的環境作り（展覧会開催 など）の重要性	84
6月	デン マ ー ク	6/5 ~ 6/4 (27)	Kultur Huset /オーデンセ ⑫	知的障害のある人の活 動センター	アクティビティハウスにおける絵 画、音楽セラピスト、織物専門家など日 本では体系化されていない専門知識 を持つスタッフによるサポートの現 状	86
	ア メ リ カ	6/5 ~ 7/5 (31)	The National Institute of art & Disabilities /カリフォルニア州リッチモンド ⑪	障害者芸術機関	障害のある人の表現活動、自立とコ ミュニティ参加を可能にするための アート環境を提供しているサービス の在り方とは。	93
			・Creative Growth ・Creative Explored /カリフォルニア州オークランド ①	障害のある人のデイセ ンター	障害のある人の表現活動、多彩なプロ グラムとスタジオやスタッフなどの運営の工夫 実態を探る	94
			Creative Clay, Inc. /フロリダ州セントピーターズ バーグ ⑬		障害のある人の創造性を軸に、芸術 活動を展開する施設でのプロジェクト に障害者自身が参加することによ り、社会へ提案をしていくことの可 能性を検証	91
7月	大 韓 民 国	7/6 ~ 7/18 (13)	社団法人 able art center /ギョングドゥ スウォン ⑩	知的障害のある人の芸 術活動センター	韓国で初めてとなる障害者アートセ ンターの設立経緯、活動状況の視 察。ボランティア参加による設立活 動の実態	95
			G-mind /ギョングドゥ スウォン ①	京畿道広域精神保健セ ンター	自殺者急増社会の韓国にあつて精神 保健の重要性を、文化芸術活動によ り広報をしている国の機関を視察	96
			・Another Way of Seeing ・Raw side /ソウル ②	視覚障害者のための教 育施設	美術教育施設での作品展示、パ フォーマンス活動を展開している団 体の実態	96
計82日		訪問国4カ国 訪問施設 11カ所				

注：( ) 内の数字は滞在日数、○内の数字は研修日数



○中井 幸子 (成田～デンマーク～イタリア～デンマーク～アメリカ<ワシントン→タンパ→フェニックス→SF>～大韓民国～関西空港)



## I. はじめに

私は美大生であった1998年に社会福祉施設たんぽぽの家を訪れ、はじめて障害のある人の創作活動を知った。たんぽぽの家では1995年から「ABLE ART MOVEMENT（可能性の芸術運動）」を提唱、障害のある人など社会的弱者といわれる人たち自身の文化や思想を創作活動や作品を通して社会へ発信し、成熟した社会へ変えよう、と市民活動に取り組んでいた。

私はその思想と障害のある人自身が作品づくりに向かう姿に惹かれ、ボランティア活動を始めた。

2001年、社会就労センターたんぽぽの家のスタッフとなり、日々のケアとともに、①障害のある成人の方への創作活動のサポート（創作活動、展覧会、商品開発など）②地域に暮らす障害のある子どもたちへの創作活動の場づくり、を担当した。私自身も作家としての活動を続けながら、その専門性から自助具の開発や、二次障害・自閉症などへの対応のスキルをみがき、2009年には創作環境の充実に特化した役割を担うアート・アドバイザーとなり現在に至る。

児童―青年―成人までの各年齢層の様々な障害のある人たちと接してきた中で、私は、障害の有無や人種・性別や年齢に関係なく、人はそれぞれの人生において適切な時期に、表現活動を通じた体験や自発的な経験をすることが、その人の成長や成熟を促す重要な機会になると気づいた。創作的行為は第三者と共有できるツールとなり、その人自身の思想を生み伝えるものと考えている。

欧米諸国では、社会的な背景は異なるとはいえ、すでに数十年の事例をもつ障害のある人が活動できるアートセンターが多く存在していて、アート・アドバイザーなど創作活動に特化した役割を担う人が活動をサポートするシステムが継続しているという。日本においてもこうした人材は増えてきたように思うが、今後さらにアート・アドバイザーという役割が社会的に認知されるようになれば、より多くの実践づくりにつながり、障害のある人たちの生活がより豊かなものになるかもしれない。それはサポート側の継続的な関わりこそが障害のある人たちの豊かな環境づくりにつながると考えているからだ。

さらに、幼児教育に創作活動を取り入れた、独自の教育理念を実践するイタリアのレッジョ・エミリア市、アジア地域の現状視察として韓国京畿道地域などで見聞の幅を広げることにした。

今まで実践してきたことを踏まえ、しかしこれにとらわれず見聞を広め、障害のある人を含む社会的弱者にとっての創作活動の意味を身をもって探りたいと考え研修に臨んだ。

## II. 個別研修

主なテーマとして以下を念頭に研修を行った。

1. 障害のある人を含む社会的弱者における自己表現と創作活動の意味を探る
2. 創作活動をサポートする専門的な人材とその役割を視察

## III. デンマーク (2010年5月8日～6月4日)

北欧にある小さな国デンマーク。総面積は約43,000 km<sup>2</sup>、人口551万人。九州とほぼ同じ面積で、東京都の半分以下の人口と聞けば分かりやすい。車窓からは田園風景が延々と続き、菜の花畑の鮮やかな黄色が目映える。国内でとれる農作物の1/3で全人口が賄えるほどの高い自給率の農業国であるというのもうなづける。

就職率も非常に高く、16～66歳までの国民の77.7%は労働市場にいる。理由のひとつは女性の73.5%が働いているからである(2004年)。因みに日本の労働人口は62.9%(2010年)。どおりで駅構内でも街でも多くの女性労働者をみかけるわけだ。運転手や車掌も女性(しかもたくましい!)

医療費・教育費が生涯無料。全国民に年金が支払われ、障害者には早期年金といった生活保障費が支払われる。そのためにはたくさんの財源が必要であるが、デンマークでは国民が納める税金が国家財源の主たるものとなっている。国民は収入の約50%を直接税として納めており、消費税は25%である。税収増に一役買っている女性労働者の役割は非常に重要であるといえる。

すべての人が健康に働き、税金を納めて安心した生活をおくれる環境がある。それが普通だったのが驚きだった。

そんなデンマークで私が訪れた二つの創作活動の拠点と障害のある人たちの暮らしを紹介したい。

### 1. FOF's KUNSTSKOLE Bifrost /

障害のある人の芸術学校(5月11日～21日)

#### ○ 学びと創造の場所

障害のある成人のための芸術学校として1995年に始まった国と県が支える教育組織の一つ。Bifrost(ビフロスト)は、北欧神話で人間と神の世界をつなぐ虹という意味。ひとりひとりの意見



F.O.F 概観 この中にBifrostがある

を尊重し、自立的な創作意欲を育む芸術的環境をつくることを目的としている。先生（5名）は芸術の専門知識をもつアーティストでもある。

北西ドイツと繋がるユトランド半島のラナス市にあり、市が運営するF.O.F（カルチャースクールを紹介する機関）に加入している。建物の中にはヨガや陶芸などさまざまな講座が受講できるよう設備が完備されている。細い階段を上がった一番上の教室がアトリエだ。

登録制で生徒は15名（うち車椅子1名）。2週間の試行期間の後、本人が希望すれば入学可能となり1年間通うことが出来る。もちろん1年以上の継続的な利用も可能だ。移動はタクシーや徒歩などで、周辺のマンションに住む生徒も多い。

デンマークでは国民全員にケースワーカーがついて必要に応じて相談し、社会資源を活用する。だからBifrostのスタッフは個別支援計画を作成する時と活動時に日常生活に影響を及ぼすような出来事があった時（年に数回程度）など必要に応じて連絡・連携をとっている。生活面で出来ないことを指摘されがちでも、制作面で展示会や販売など出来ることを示すことでポジティブな方向へ向かえるという。個人を尊重するという姿勢と過干渉でない適切な距離感が伺えた。



Bifrost アトリエの様子

1日の活動スケジュールは以下である。

- 9時～ 各自教室へ着いた人から制作準備
- 10時～ ブレイクタイム
- 11時～ 制作
- 12時～ ランチタイム
- 13時～ 制作
- 14時～ ブレイクタイム
- 14時半 片付け、終了

休憩コーナーでは担当の生徒がいてくれるお茶がいつでも飲め、本棚には図鑑や活動写真を貼ったスクラップファイルがたくさん並んでいて自由に閲覧できる。

アトリエは個人のスペースが確保されており、それぞれが好きなように使っている。壁いっぱい雑誌の切抜きや自作品を飾ったりしている人もいる。自由でゆったりした雰囲気の中、それぞれの個性がしっかりと作品に反映され、様々な表現が生まれている。

生徒を支える先生たちが、アーティストの視点から行っている様々な工夫を紹介したい。

## ○ 専門的な観点からの環境づくり

Bifrostでは平面絵画や版画、塑像技術などを学ぶことができる。障害のある生徒にとって学びやすく安全性があるということを重視し、技法や素材を選んでいる。生徒は一通りの

技法を体験したあと、自分に合った制作方法を選ぶことができる。訪問初日、自分のファイルを見せてくれたケネットさんは、Bifrost で版画（リノリウム版：ライナーカット）を習得、制作に生かし国内外で発表している。また、裏の公園や植物園、図書館など様々なところに出かけ、素描やロウ粘土による成形を行う。体験を通した作品づくりは欠かせない。

これら専門的なサポートを行う先生は前述したようにアーティストである。それぞれ展覧会やそれに向けての制作などのスケジュールを持っているので長期休暇も欠かせない。そこで、月1回、調整会議をもち、独自にシフトを作っているという。私が研修中は2名がフルタイムシフト、2名がパートタイムシフト、1名が長期休暇中であった。こうして自身の制作とBifrostの運営のバランスをとっているのだ。

また生徒との接し方に関しても工夫をしている。

研修初日、ブレイクタイムに生徒に混じってお茶をする私に生徒は怪訝な様子。あとでスタッフにお茶や昼食時は生徒だけで過ごせるようにしていると聞いた。「休憩時間、生徒は先生の、先生は生徒の話をするものでしょう？同じ場所にいないようにしているんだ」。生徒同士の自然な仲間意識が生まれ、コミュニケーションが生まれるという。感心した。

展覧会は年に12回前後。定期展覧会のほかに銀行や駅構内、ホテルなどでの展示も行う。作品が販売された場合の-marginは75%が作家、25%がBifrostとなる。展覧会に出品する作品や値段も生徒が決める。「先生の意見を聞いて、最終的に生徒が選ぶ責任を持っている。生徒もいろいろな人がいて変化していくから影響させないようにしつつ、彼らの素質をみて伸ばすのは難しいことでもあるが、コントロールしないことを大切にしている。我々は自分の好みではなく客観性を持つことが大切」と言う代表のペアさんに同感した。

5月27日、Bifrost主催の展覧会が開催され、多くの来場者でにぎわった。会場は教室を利用し、展示も自分たちで行った。活動を紹介するDVD完成試写会も行われ、皆がその完成を喜んでいて。生徒たちはおしゃれをし、来客者をもてなす。自分たちでつくる展覧会。それを通して多くの協力者をねぎらい、喜びを分かち合う姿が印象的であった。

制作を通し、芸術と関わることで自分自身の生き方を見出し成長することを大切にしているBifrost。改めてその大切さを感じる事ができた。

## 2. Kultur Huset / 知的障害のある人の活動センター (5月25日～6月3日)

### ○ 挑戦し経験する機会をもつこと

Kultur Huset はフェン島のオーデンセ市にあるアクティビティハウス。かつて軍隊が使用していた建物の中にはロックバンド、アトリエ、カフェテリア、織り学校があり知的障害をもつ成人が活動している。

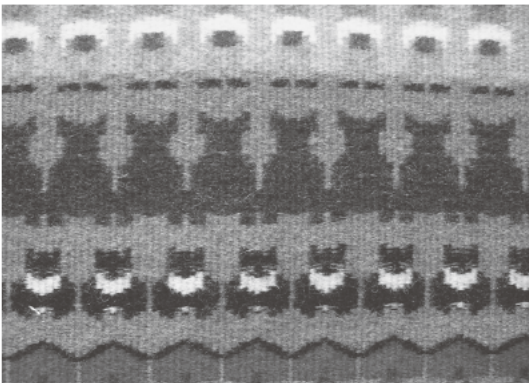
利用者45名、スタッフ6名、臨時スタッフ3名。スタッフは画家、織り専門家、音楽セ



ラピストなどの専門の知識をもつ。同じ建物内にオーデンセ市内在住の110名のケースをもつケアチームの事務所もある。

私は研修中に3人のスタッフ（織り、アトリエ、ケアチーム）の話聞くことが出来た。

織り担当のカリンさんは障害のある人に20年織りを教えてきた。「障害のある人はたくさんものに触れる機会が少ない。もちろん織りの経験もない。チャンスがあり挑戦できることが大切だし、彼らには特に必要だ。だから手仕事の好きな人に織りの機会を提供することをしてきた」と言う。デンマークの伝統的な織りとスウェーデンの柄織りを習得した利用者のアン・リテさん。



上：アン・リテさん 何本もの糸を操る  
下：複雑な織り模様

言葉の通じない私に対して、織りのことを目を合わせ、微笑みながらとても誇らしげに紹介してくれた。挑戦し経験する機会を積んだことで養われたプライド。ものづくりをする人にとってその誇りは共通だ。彼女はここでそれを体得している。

アトリエのスタッフ、アンネ・メリーさんはペタゴ（介護支援員）である。他にアーティストでもあるスタッフ1名と連携している。

大きい部屋には棚やソファで仕切ったスペースや、人によっては小部屋のような個人スペース

もある十分な環境だ。

彼女は「障害のある人の生活には、すべてのことに人が関わるので、時々フリーの時間が必要。それがアートだったりする。彼ら自身がすべてのことにYes/Noと言える、決められることを大切にサポートしている」と言う。

デンマークの障害のある人の生活や活動へのしっかりした保障に驚いたことを話すと、彼女は「たぶん10年後にここはなくなってコミュニティに入っていくと思う」と言った。現場で働くスタッフがそういった考えを現実として感じていることに衝撃を受けた。それだけ社会保障がされているということである。



小部屋のようなスペース

## ○ デンマークの障害のある人たちの暮らし

2つの活動場所は学びの場として障害のある人たちの暮らしを豊かにする役割を担っていた。仕事か活動のあと、カフェや余暇活動ができるところで過ごし、夕食後自宅に戻るというライフスタイルが主だった。結婚している人も多かった。暮らしについて知るために、研修中に3人のお宅にお邪魔した。一般のマンション、知的障害のある人専用のマンションや

24時間ケア付きマンションの十分な広さの居室でそれぞれ自立した生活を送る。



Bifrost 近くのカフェ  
他にギャラリー、クラブ、放送局などがある

Kulture Huset ケアチームの Lene さんによると、生活費（衣食住）として国から 12,000dkk の補助がある。プライバシーを保つため、基本的に本人から連絡があったときのみ出動、お金の管理も本人が行うが、難しいケースもある。そして、一人暮らしが難しいと判断されたケースはペタゴがコーディネイトし、集団で生活するところへ移住 24 時間介護が受けられるようにする。このような判断を行うには、ペタゴ自身

が経験豊富であることが重要である。特に地域ケアにはさまざまなケースが発生するので、若いペタゴにはストレスが多い。大人として成熟したペタゴが地域ケアを担い、集団生活の場などで若いペタゴが経験を積む。彼女自身も 1994 年に修了後、ドラッグ中毒者のケア、自閉症児のケアなどを経て現在に至る。実際、グループホームを訪問した際も若いスタッフが多かった。

このような考え方は、日本では体系化されていないが、とても合理的である。

彼女はたくさんのケースの面接を行うが、Kultur Huset の人たちは不思議な理由でものごとを決めることが多く、とてもユニークだと感じていると嬉しそうに話した。アートを通して培われるその人なりの価値観が確かにあり、それを豊かに感じる人が周りにいること、その環境が大切だ。

## IV. イタリア（2010 年 4 月 30 日～5 月 8 日）

Reggio Children / 市内乳児保育所・幼児学校教育機関（5 月 2 日～5 月 7 日）

イタリアのレッジョ・エミリア市で 40 年以上続く、先進的な教育文化活動を推進し、展開していく目的で、1994 年に設立された教育機関。教育体験から生まれた「レッジョ・アプローチ」と呼ばれる教育的取り組みは、子ども、学校、保護者の 3 主体の視点が常に密接な関わりを持ちながら実践されている。子どもたちへの関わりのみならず、保護者との連携、

国内外の教育関係者との交流、教育理論者の導入、実践など、多面的な要素を含んでいる。今回は NAREA (North American Reggio Emilia Alliance) の研修グループに合流、8日間のプログラムに参加。講義と現場の視察よりその思想と手法を学んだ。

ここでは創造性に着目し、積極的に保育に生かしていること、障害のある子どもへの配慮を述べたい。



地元高校生によるカルチャーツアー  
古い町の歴史を自分たちでガイドする

### ○ レッジョ・エミリア市で生まれた教育

レッジョ・エミリア市はイタリア北部にある。人口は15万人を超え、ここ十数年間で人口が急速に増えている。出生率が上がったことと、イタリア国内あるいはEU以外の国々から移住してくる人々が増えたからだ。実際に市内にいと、民族の多様さに驚く。

第二次世界大戦後、ファシズムを繰り返さないために「子どもは自由であるべきで、自分で決断できること、従わないことを学ぶ必要がある」と考え、子どもたちへの教育の必要性を感じた親たちが手作りで幼稚園をつくった。それが市によって運営されることとなったのは1963年。その後、女性の労働市場の拡大により、より多くの幼稚園・乳幼児センターが必要となり、現在に至る。

現在市立・付属・私立をあわせて30の保育所(0～3歳:1,830人)、64の幼稚園(3～6歳:4,783人)がある。

### ○ 芸術専門家(アトリエスタ)と記録(ドキュメンテーション)

1991年、アメリカの週刊誌「ニューズウィーク」で取り上げられ、さらに各国で開催された「コミュニケーション100の言葉」という展覧会では体験型プロジェクトとその際に制作された子どもたちのグラフィック・ランゲージ(図像言語)が紹介され世界中の教育者の話題となった。

最初に創作的な要素が加わったのは1963年。物語をもとに子どもたちと対話をし、最終的にそれに登場する舟を実際に作った。創作的な活動は子どもたちにさまざまな要素で複合的にアプローチし、かつ園外で子どもたちの可能性を見せ、地域に発信できるツールになると考えた。美術教育ではなく、美術を手法に用いた教育方法と言えば分かりやすいだろう。このプロジェクトが園内にアトリエとそこで働く専門のフルタイムスタッフを配置するきっかけとなった(芸術専門家:アトリエスタ)。現在も全体ディレクターのもと、各園に1名配属されている。



実際に各園を訪問すると、子どもたちの自由さと先生の記録の量と質に驚いた。建築家によって設計された園内は、自然光を生かした照明、鏡や段差、窓、広場などで子どもの五感に働きかける構造。各教室は自由に往来でき、ライトボックスやプロジェクターの上に物を置き光と影の質感を楽しむ、ごっこ遊びに戯れる、アトリエで先生と粘土で遊ぶ、もちろんアトリエ外でも絵を描く、そのかわらで調理師とキッチンやテーブルで磁器食器を配膳する…これらがカオスのように自然



自由に表現を楽しむ子どもたち  
壁には記録や作品が展示されている

発生して子どもたちは自分の意思でこれらのグループの間を自由に行き来する。しかし、騒然とはしていない。先生たちは子どもたちの行動を理解し、さりげなく声をかけ合っていた。そしてそれらを見守りながらカメラやメモでごく自然にかつ詳細な子どもたちの記録をとる。壁面にはつくった作品やその記録がアーティスティックにかつシンプルに展示されていた。これらの膨大な観察や記録は単なるレポートではなく、子どもの進歩を支える各分野の専門家と家族と教師の協同を反映するものとして有益に活用される。

## ○ 障害のある子どもたちへの対応



様々な素材が子どもたちの五感に刺激を与える

陽だまりで先生に抱かれながら他の子どもたちと楽器演奏を楽しむ子どもがいた。身体障害のある子どもだった。皆と手をつないで輪になり先生に助けってもらって楽器に触れる。ゆっくりした時間を皆で楽しんでいるように感じた。障害のある子どもたちは特別な環境におかれるのではなく、すべて一緒に過ごしている様子だった。

イタリアでは障害のある人の社会的統合と包括をめざす運動が1960年代に始まり、1992

年に公立学校での統合教育が、1995年に乳幼児の保育の保障がそれぞれ表明されたという背景がある。市内の保育所・幼稚園では全体を統括する部署に教育専門家7人のほかに、心理学者（特殊教育支援保育者）が1名配置されていて地域や親、医療関係との連携、先生への助言・提案などを行う。障害のある子どもは待機せずに入園することができ、1クラスに1名、同年齢児と一緒にクラスに配属される。その際、心理学のペタゴジスタと教師の判断に続いて

クラス全体の補助として、通常職員2名のところに臨時雇用の先生が1名派遣される。差異に対して価値を置き、できる限りの可能性を引き出すことを大切に努力している。

ここで学んだ多くのことをここに記すには文章の量も私の知識も不十分ではがゆい思いである。障害のある人の文化芸術を取り入れた活動をする上で専門家の役割、地域や親、当事者の意識をどう作っていくかということに関して例になると思い研修に挑んだ。しかし、そのこと以上に教育について考えさせられ、日本もまた日本でできるやりかたで実践することが必要だと感じた。

## V. アメリカ（2010年6月4日～7月5日）

広大な大地をもつ国アメリカは、気候も州によって大きく異なる。レイジョナルセンターを地域拠点として行われている障害のある人のサービス。多民族国家であることも特徴の一つで、個人の意思や意見を尊重することを重んじる。フロリダ州とカリフォルニア州のアートセンターで研修を行った。

### 1. Creative Clay, Inc. / 障害のある人のデイセンター（6月7日～6月18日）

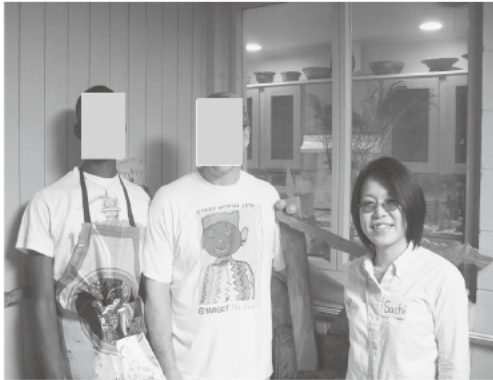
Creative Clay, Inc.（クリエイティブクレイ；以下Clay）は、年齢、性別、能力などに関係なく社会の全ての人々が芸術にアクセスできることをミッションとし、障害のある人の創造性を軸に1995年から芸術活動を展開している。デイサービス型（利用者：障害のある人36名）とプロジェクト型（利用者はプログラムごとに異なる）のプログラムがあり、スタッフ13名で運営。アーティストはオブザーバーやワークショップリーダーとしてプロジェクトに関わるのが主で30名以上が関わる。フロリダ州セントピーターズバーグという街は、リゾート地として観光産業が発展、ビーチやヨットハーバーなど海のレジャーのほか、美術館やギャラリーなども多い。ホスピタリティーにあふれる明るい街である。

#### ○ おしゃべりをするように…

研修初日、Maryさんとスタジオ、ギャラリー、ショップ、事務所を廻る。彼女は利用者の母親でもある。利用者の作品に夢中になっている私に、ディレクターのGraceさんが新しいプロジェクトのため作成したTシャツの着用モデルにと声をかけてくれた。いろいろな人を巻き込んで楽しくやるのがClay流のようだ。



スタジオに併設されているギャラリーは、利用者の作品がメイン、そこから数十メートル先にあるもう1箇所のギャラリーにはプロのアーティストたちの作品が並ぶ。ブースごと



Art Link : 左がマーキーさん

にレンタルされ、さまざまな分野の作品を見ることが出来る。利用者も人によっては、ここにスペースをもつ。このようなアーティストのネットワークがプログラムに生かされる。

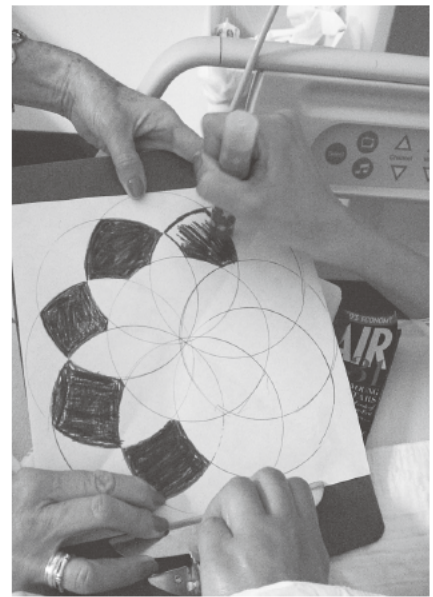
Clayでは、障害のある人とプロのアーティストが一定期間制作活動を行い発表する、というプロジェクト「Art Link (アート・リンク)」を1999年より毎年行う。今年参加するマーキーさんは、アーティストの自宅兼アトリエでオープン粘土を使い制作中

だった。自作の物語をテーマにしているという。そこに至った経過を説明してくれたアーティスト。寄り添う姿勢で、本人の変化を注意深く観察しながら素材や技法を提案し、ともに挑戦する。

また、地域の病院ではそこを利用する子どもや大人にアートプログラムを提供するプロジェクトを進めている。ダンサーやアーティストは楽しい会話を通して参加者の心を和ませ、描いたり踊ったりする能動的な動きで、病で萎える気持ちに自信を持つきっかけを与え勇気づけているようだった。小さな声が大きな声に、青い顔に赤みがさす、そんな変化を積み重ねるなかにチャンスを見出すアーティスト。それを形にし、社会へ提案する客観性をもつため、情報共有をするミーティングも欠かせない。

おしゃべりからはずむ会話のような自由さ。これらのプロジェクトから、一方の視点にかたよりがちな社会的弱者と言われる人々へ多角的な視点をアートを通して社会へ提案すること、また、参加する人自身の創造性に可能性を感じた。

新しく作ったオリジナルTシャツ。< earth >の中の< art >のスペルが赤く記されていた。経験し挑戦し続ける社会のあり方と、アートの可能性が表現されている。Clayの願いだ。



病院内でのWSの様子

## 2. NIAD (The National Institute of Art & Disabilities)/ 障害者芸術機関 (6月2日～7月1日)

カリフォルニア州にあるサンフランシスコ市・リッチモンド市・バークレー市はベイエリアと呼ばれる。気候はちょうど日本の北海道のよう。私が滞在した時期でも朝晩ウィンドブレーカーは欠かせない。太平洋に面し、魚介類が豊富。車で4時間ほど行くとヨセミテ国立公園があるなど自然豊かで住み安い地域だ。

リッチモンド市にあるNIADは障害のある人の表現活動、自立とコミュニティーへの参加を可能にするため、アクセシブルなアート環境を提供することを目的とし1982年に設立。登録者は63名、スタッフ10名（非常勤含む）。利用時は自力かベイエリア対象の移動サービスを利用して移動する。

建物内に入るとショップ&ギャラリーエリアが来訪者を迎える。その奥にあるスタジオは大きな部屋を柵で仕切られていて、アクセサリ、絵画、版画、陶芸、テキスタイルなどのプログラムを行う。庭では休憩時間になると皆スナックやドリンクを手に思い思いに楽しんでいる。

常勤スタッフはギャラリーやスタジオなどでアートを専門とするスタッフ、ケアや送迎バス、利用者の出欠など各種調整を担うスタッフがいる。非常勤スタッフはAdult education（移民への語学教育であったが、現在は生涯教育のプログラム）から派遣される。アートから生活スキルまでさまざまな専門スタッフがおり、サービスを提供できる。

接しているとスペイン語を話す人が非常に多く、スタッフに尋ねると元々メキシコ領であっ

たからだという。さらにアジア人なども多く、「違うことがあたりまえ」である日常を感じた。「どうやって理解できない部分があることを知っているからこそ、お互いの意見をはっきり言えるのかもしれない」といったスタッフの言葉が印象的だった。ここはベイエリアでも特に治安の悪い場所でもあり、そのような状況下で、NIADがあること自体、感慨深い。様々な背景をもつ人たちがそれぞれ尊重し合い、人が人としてあることを大切にすることは本当に難しいことだと実際に身を置くことで体感した。私はスタッフに混じり、パラシュートのプログラムを提供しながらの研修となった。パラシュートは、ペンで傘に絵を描き、ゴムボールを重りにしたもの。最終日に屋上から飛ばした。みんなの歓声がうれしく、楽しいひとときとなった。



NIADのみんなは明るい!

NAIDで研修中にサンフランシスコにある2つのアートセンターを訪れたのであわせて紹介したい。

### 3. Creative Growth Art Center 訪問 (6月29日)

障害をもつアーティストのためのNPOの芸術センター。精神的、身体的、経済的に障害をもつ成人に対して芸術創造のプログラムや自立のための教育、職業機会を提供している。また障害と芸術の関わりについて興味のある人に対し調査やトレーニングの機会も提供している。クライアント(利用者)85名、1日45名が来るが、スタッフは10名に対して1名の配置。

ギャラリーとそこからつながるスタジオは天井が高く、窓が大きい開放的な空間。陶芸、絵画、テキスタイル(ラグ)、版画、アニメーション



スタジオの様子

などのプログラムがあり、のびのびとした作品がたくさん並んでいる。クライアントのプログラムは月ごとにスケジュールを決め、クラス替えをする。作品はギャラリーや展示会で販売され、売れた場合の-marginは、クライアント50%、センター50%。訪問時はフランスの作家とのコラボレーション作品が展示されていた。

スタジオ部門ではスタジオマネージャーのもと、アートティーチャーがクライアントと創作活動をしている。アートティーチャーの多くはオークランドパブリックスクールとプレザントヴァリーアダルトスクールから派遣されている。ここで働くアートティーチャーは、殆んどが現役のアーティストであり、クライアントとともに創作活動をすることでお互いに刺激を与えあえると考えている。

驚いたのはスタッフのホスピタリティー。スタジオマネージャーのジョーダンさんが私の研修テーマを聞いて、スタジオ内を自由に見学できるように計らってくださった。どの人たちも皆快く説明してくれ、クライアントと表現を楽しんでいる様子が伺えた。

### 4. Creativity Explored 訪問 (6月29日)

同じくサンフランシスコにある身体的精神的な障害のある人のためのヴィジュアルアートセンター。利用者は1週間で延べ150名、15名のプロのアーティストがインストラクターを勤める。入るとギャラリー、奥に広いアトリエがあり、絵画、版画、ミクストメディアなど





作品撮影室

の作品が所狭しと並ぶ。さらに、作品撮影室、額装をするスペースがあり、それぞれ専属のスタッフが配属されている。

利用者はみな自由に創作活動に取り組み、何人かは自作の作品を私に自ら説明してくれた。ここで長年働いてきたエスターさんは、若いスタッフの教育も欠かせないという。「障害のある人の才能をどうやって引き出すかは人によって違う。経験の浅い若いスタッフには難しいこともある。どうすればいいのか説明

するのではなく、時には一緒に取り組んで伝えていく」と。アトリエに1枚の写真があった。設立当初のモノクロの写真には当時のエスターさんと今はベテランになっているスタッフの若々しい姿。環境は場所や物だけではなく、やはりチームで取り組み、持続可能な状況をつくる大切さを学んだ。

## VI. 大韓民国（2010年7月6日～7月18日）

各国を回ってからの入国となったが、同じ文化圏内であることを生活や食べ物から感じ、親近感を抱く。日本人の観光客も多く、日本語を話せる人が多いのにも驚いた。

街の急速な発展が伺える一方、路上には足が動かない人が這いつくばって投げ銭を乞う場面をみかけた。このように残念ながら生活に窮する障害のある人たちもいて、この国で社会福祉の改善に取り組む人たちも心を痛めていることだろうと想像した。自分が何を学びに来たのか、つきつけられた思いだった。

### 1. 社団法人 able art center (7月6日～7月18日)

able art centerは2010年末までにオープン予定の障害のある人の芸術活動センター。スウォン市にある社団法人である。理事長で牧師でもあるチャンさんを中心に教会関係者やボランティア、3人のスタッフで設立にむけて奮闘されていた。カフェ&ギャラリー、アトリエや陶芸のスタジオ、ダンスや音楽、講演活動などができるホールなどができる予定。資金を集めるためバザーやパーティー、展示会などの活動も行ってきた。障害のある人だけではなく市



建設中のセンター  
ホームステイ先のボラさんと

民も集える場にしたいと、韓国で初めてとなるアートセンター作りに挑んでいる。

サンフランシスコ同様、able art center で研修中にいくつかの団体を訪ねた。その中で特に印象的だったところを紹介したい。

## 2. G-mind (京畿道広域精神保健センター) 訪問 (7月7日)



木のぬくもりがこちよいうリドンネ

「ようこそ Sachiko さん」という案内。歓迎してくれるスタッフたちに、ここで行われている活動の雰囲気を感じる。

韓国では近年、自殺者が急増、精神保健の重要性を文化芸術活動で広報することを目的とし、2000年にはじまった国の機関。道内 31 都市にセンターがある。音楽や写真、演劇や絵画などの活動をサポート、毎年展覧会を開催している。利用者は無料で受講できる。先生はプロから学生までさまざま、ボランティアだ。作品展図録より作品の幅が広く、活動が着実に成果を上げている

のがよく分かる。絵の販売も行ったが、売れたということで精神的に影響を受ける人も多く難しいこともあるという。

また、2008年カフェ「ウリドンネ (意味:わたしたちの町)」をオープン、2009年に社会的企業認定され、現在道内に4箇所ある。

## 3. Another Way of Seeing 訪問 (7月13日)

インサドンは若者が多く集まる代官山のような街。5年前にこの街の一角にギャラリーと事務所を構えた。14年前から、視覚障害のある子どもたちの美術教育を行い、作品展示やコレクションも行っている団体だ。展示入れ替え中の忙しい時にもかかわらず代表のオムさんが話を下さった。

2つの盲学校で1週間に2回、2時間のワークショップを行い、年間100人の生徒と関わる。体験を重視し、写真や絵、粘土などで表現をする。韓国には12の盲学校があるが、3/4は美術の先生がいない状況だった。



「まるで土偶のようで神秘的でしょう」  
とオムさん



ここにオムさんたちはプログラムを提案していったという。その他にもプロジェクトとしてさまざまな取り組みを行う。

親と離れて暮らす学生が自分のさみしい気持ちが包み込まれるイメージをカンガルーの袋に重ねて表現したという陶芸作品にふれ「美術は難しいことではなく自分の物語を表現する道具と考えている。美術の中で住んでいる、生きていると考え、みんなで学んでいる」と自身もアーティストであるオムさんの言葉が印象的だった。

#### 4. Raw + Side (ロー・サイド) 訪問 (7月17日)



中央: チャヌくん、右: お母さん  
上: 代表の Cho さん

その日は大雨。傘で街の様子がよく見えず、知人に案内されるがまま、あるビルの中に…。ドアを開けると正面に部屋が一つ、右奥に小さな部屋、左奥にキッチンスペース。決して恵まれた環境ではないというが、ここに至るまでに大変な努力をされてきたのだろうと感じ取ることができた。スタッフ3人はアーティスト。2008年から活動をはじめ、障害のある人のヴィジュアルアートとパフォーマンスを中心に活動を展開している団体だ。

みせて頂いた参加者の作品はどれもとてもユニークでキュート。大切な瞬間がここにはたくさん集まっているんだと感じる。

すると参加者のチャヌくんがオリジナルキャラクターの人形をプレゼントしてくれた。お母さんが「私も一緒に絵を描くことで解放された。先生たちが作品をファイリングしてくれて、それを見た人が感動してくれる。世の中で表現することで社会的な意味が生まれるんだなって…」とおっしゃった。「自分たちができることの中からやっていく、それが活動のベースだと思う。コミュニティーの中に活動するところがたくさんあることが大切」と言った代表のChoさんの力強い言葉と重なった。

## VII. おわりに

アメリカのClayでArt Linkに関わるデービッドさんはアトリエ兼自宅で制作を行っている。デービッドさんはいわゆるプロのアーティストとして活躍している。デンマークのBifrostのケネットさんは自宅マンションで自分の作品を制作している。ケネットさんには障害がある。公的な支援も受けている。しかし、二人とも、それは創造するという行為の前

では障害のあるなしはまったく関係がなかった。このような素晴らしいアーティストに出会えて本当に嬉しく思っている。

また、各国で体験した異常気象、人口増加や移民問題、不況による各活動先の人員削減・予算カットなどの財政問題…さまざまな状況を目の当たりにした。未来に不安を抱くときこそ、希望ある未来をと願うとき、すべての子どもたちに何を託すのか、それを実践から世界に発信していたレジヨ・チルドレンの例から学ぶことは多い。

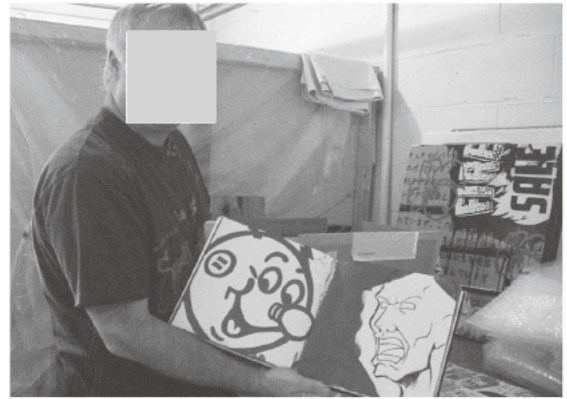
私は、海外の障害のある人のアートセンターを訪問し、その現場を直接感じることで知りたいという夢を長年持っていた。今回実際に現場で働く人たちと接し、私たちと何ら変わることはなく、哲学と情熱を持って仕事をされる姿に感動した。そういった一つ一つの取り組みは繋がっていて大きな動きを生むのだと信じている。これからも障害のある人の表現活動を支える人材として関わり続けていきたいと思う。

国によって事情は様々だが、障害のある人たちの創作活動を通して多様な文化のありようを視ることができた。幸福な発展と出会いが各国の障害のある人たちや家族、そしてそれを支える人たちに訪れることを願っている。

最後に、この度このような研修の機会を与えて下さった財団法人中央競馬馬主社会福祉財団小川理事長、研修決定後から様々なフォローをして下さった長井充良部長はじめ財団職員の皆様には厚くお礼申し上げたい。

また日欧文化交流学院長 千葉忠夫氏には合同研修予定変更への対応、デンマークでは受け入れ先やホームステイ先の紹介などにご尽力頂いた。また、イタリア Reggio Children への足がかりがなかった私に連絡をとる道筋をつくって下さった Adarsh Sharma さん、主要な受入先のデンマークは FOF's KUNSTSKOLE Bifrost と Kultur Huset、イタリアは Reggio Children と NAREA、アメリカは Creative Clay, Inc. と NIAD、韓国は able art center の協力に感謝すると共に、ホームステイ先や訪問先、観光、交流などで快くかつ快適・安全に実行して下さいました各国の皆様には合わせて感謝したい。そして、私の活動先であるたんぽぽの家の関係者の皆様には、様々な協力と支援と元気を頂き感謝している。

そしてアイルランド噴火による日程変更というアクシデントを乗り越え、他の研修生と共



デービッドさん



ケネットさん

に研修に挑み、全ての日程を終え無事笑顔で帰国の途につけたことは生涯忘れることはないと思う。この研修に関わっていただいた皆様のおかげである。本当にありがとうございました。

《主な研修先一覧》

〈デンマーク〉

◎ FOF's KUNSTSKOLE Bifrost (障害のある人の芸術学校)

住所：J.V.MARTINS PLADS 1 8900 RANDERS C

TEL：+45 8712 4048

E-mail：bifrost@fof-randers.dk

URL：www.bifrost-art.dk/

◎ Kultur Huset (知的障害のある人の活動センター)

住所：Rytterkasernen 19, 5000 Odense Denmark

TEL：+45 6551 3956

URL：kulturhuset-odense.dk/

〈イタリア〉

◎ Reggio Children (市内乳児保育所・幼児学校教育機関)

住所：Reggio Children S.r.l. Via Bligny 1/a - C.P. 91 Succursale 2 42100 Reggio  
Emilia Italy

TEL：+39 0522 513752

FAX：+39 0522 920414

E-mail：info@reggiochildren.it

URL：zerosei.comune.re.it/

〈アメリカ〉

◎ Creative Clay, Inc. (障害のある人のデイセンター)

Creative Clay, Inc., Cultural Arts Center

1124 Central Avenue St. Petersburg, FL. 33705

TEL：+1 727 825 0515

FAX：+1 727 825 0525

URL：www.creativeclay.org/site/index.html

© The National Institute of Art & Disabilities <NIAD>(障害者芸術機関)

住所：551 23rd Street, Richmond, CA 94804

TEL：+1 510 620 0290

FAX：+1 510 620 0326

E-mail：admin@niadart.org

URL：www.niadart.org/

〈韓国〉

© able art center (障害のある人の芸術活動センター)

住所：243-3, Geumgok-dong, Gwonseon-gu, Suwon-si, Gyeonggi-do, Korea 441-841

TEL：+82 31 295 1077

FAX：+82 31 295 1070

URL：www.ableart.or.jp

#### 《参考文献》

- ・千葉忠夫著 「世界一幸福な国デンマークの暮らし方」
- ・デンマーク社会事業省編 / 山田駒平訳 「デンマークの社会政策」
- ・レッジョ・チルドレン ドムス・アカデミー・リサーチセンター著 / 田邊敬子訳 「子ども、空間、関係性 幼児期のための環境メタプロジェクト」
- ・J. ヘンドリック編著 / 石垣恵美子、玉置哲淳監訳 「レッジョ・エミリア保育実践入門」
- ・C・エドワーズ、L・ガンディーニ、G・フォアマン編 / 佐藤学、森眞理、塚田美紀訳 「子どもたちの100の言葉ーレッジョ・エミリアの幼児教育」
- ・佐藤学、今井康雄編 「子どもたちの想像力を育むーアート教育の思想と実践」
- ・辻井正著 「ベストキンダーガーデン」
- ・京畿文化財団編 「アートリンク プロジェクト2009 関係のドローイング」 展覧会図録
- ・辻本恵美氏 2007年作成 Bifrost 代表ペア氏へのインタビューレポート
- ・2007年奈良NPOセンター主催 レッジョ・チルドレン講演会録
- ・山本雅美氏 1999年作成 Creative Growth Art Centerパンフレット

北欧での現場研修を終えて



社会福祉法人 六高台福祉会  
老人居宅介護支援事業所  
松寿園  
ケアマネジャー

石山 愛子

〒 270-2203

千葉県松戸市六高台 2-19-2

電 話 047 (386) 6357

FAX 047 (387) 8720



平成22年度（第38回） 海外研修生 研修プログラム・内容

氏名	石山 愛子					
所属	(福) 六高台福祉会 老人居宅介護支援事業所 松寿園 ケアマネージャー					
合同研修	デンマーク オーデンセ (4/27～5/2)					
	国	期間	施設名／都市名	施設の種類	研修内容	掲載ページ
5月	デン マ ー ク	5/3 ～ 6/13 (42)	Vesterbo Plejecenter /ソノスー ⑭	高齢者住宅	12戸の高齢者住宅で三交替制の介護 実習。介護情報のIT化を図るなどの 効率化を学ぶ	105
			Fredensbo Center /ソノスー ⑧	訪問介護施設	きめ細やかな訪問介護の実態を探る 実地研修	109
Radgivnings-og kontaktcenter for demensramte og paroredde /オーデンセ ⑥		アルツハイマー 協会	ボランティア主体による運営をして いる施設。認知症とその家族の日常 プログラムの検証	112		
Pjecenter Solgarden /ホーゲンセ ⑦		高齢者住宅	認知症フロアにおいて、夜勤専門ス タッフと現場実地研修	114		
6月	ス ウ エ ー デン	6/14～ 6/24⑩	Sodra langgatans Aldreboende /ランスクローナ ⑩	高齢者住宅	快適な生活を送るための介護士の 質、設備の検証と介護実習	116
	イ ギ リ ス	6/25 ～ 6/28 (4)	・Kenilworth House Nursing Home ・Earlingmanor Nursing Home /ロンドン ④	老人ホーム	多国籍の入居者を色々な国のスタッ フが介護をしている実態を視察。ア セスメントの重要性を学ぶ	120
7月	ス ウ エ ー デン	6/29 ～ 7/9 (11)	Vastra Faladen Hemvardsgrupp /ランスクローナ ⑧	訪問介護施設	訪問介護の実地研修。日本との違い を模索	119
			Landskrona stad Omsorgsforvalt- ningen /ランスクローナ ②	市の高齢者支援	市とコンピューターでダイレクトに 繋がっている高齢者病院の迅速な介 護体制の状況把握	119
	イ ア タ リ	7/10 ～ 7/18 ⑨	Ospedale Regional Oftalmico 他 /ローマ ⑥	病院	日本と同様に高齢化が進む国での老 人介護の実態と、営利・非営利団体 のボランティア活動の実態	121
計83日		訪問国4カ国 訪問施設 13カ所				

注：( ) 内の数字は滞在日数、○内の数字は研修日数

○ 石山 愛子 (成田～デンマーク～スウェーデン～イギリス～スウェーデン～イタリア～成田)



## I. はじめに

在宅生活をしている高齢者のケアマネジャーとして、悪戦苦闘の毎日だが、特に認知症高齢者の支援は考えさせられることが多い。家族と同居している場合、認知症の症状からくる様々な発言や行動に家族は悩まされ、そして高齢者自身も自らの行動によって、苦しめられる場合もあるが、その状況を自分で打開することはできない。独居の場合、更に状況は厳しくなる。誰かが側にいなければ、食事、排泄、入浴などの日常生活もままならない。介護保険下にある在宅の介護サービスだけでは、認知症高齢者を自宅で支えるのは限界がある。認知症に限らず、在宅生活の限界を感じると考え始めるのが、施設入所である。施設は特養と呼ばれる特別養老人ホーム、老健と呼ばれる介護老人保健施設、有料老人ホームと呼ばれる施設などがあるが、特養は数年待ち、待機者何百人という状態で、いつ入れるかわからない。老健はリハビリテーションを中心とした医療サービスを提供し、在宅復帰を目的としているので、終の棲家ではない。有料老人ホームは一般的に、費用が特養よりかかるので、誰でもが利用できるわけではない。認知症高齢者の場合、グループホームと呼ばれる認知症対応型共同生活介護があるが、これも費用がかかるので、誰もが入れるという状況にはない。需要は多いのに、供給が追いつかないのが、日本の介護の現状である。それは介護現場の慢性的人員不足とも関係している。

職場で財団法人中央競馬馬主社会福祉財団の海外研修生募集の回覧が回った。漠然と「行けたら、いいな」と思った。興味はあるけど、受けても受からないだろうと思い、職場の上司に相談した。「受けてみては」と背中を押してもらい、受けることにした。そして、まさかの合格。もやもやと知りたかった興味合格と同時にわき上がってきた。でも、どうやったら、この興味は満たされるのであろう。行き先はもちろん、福祉の先進国であると言われているデンマーク、北欧でぜひ、最先端の福祉を見に行こう。もやもやの知りたかったことをはっきりさせよう、できれば私のケアマネジャーの仕事に役立つこと、職場に還元できることをテーマにしよう。そう思い日々の仕事の中で、考えさせられていた“地域で取り組む認知症ケア”と興味のある“先端技術と介護”に決めた。その他に研修に行かせて下さる寛大な職場でテーマを募った。三ヶ月間、どうなるのかと期待を膨らませた。

<出発の日>

「欠航です」旅行業者担当の一言に、一同、肩を落とした。アイルランドの火山噴火により、出発の前から、不安を感じていたが、まさか自分たちも出国できないとは思ってもみなかった。

その後、色々な方のご尽力のお陰で、予定より遅れること8日、4月27日に無事にデンマークへと成田空港から旅立った。

## II . デンマーク

### 1 . Vesterbo Plejecenter (高齢者住宅) (5月3日～5月16日)



両脇にあるのが高齢者住宅



一つの建物の中に10～12戸

デンマークで最初の個人研修先は高齢者住宅である。高齢者住宅と言っても、一つの大きな建物の中に個人の住居が入っており、キッチン、ダイニング、リビングなどの共有スペースがある。そこにスタッフがいて介護にあたる。高齢者住宅は一戸当たり、おおよそ60㎡くらいの広さで、二つの部屋とミニキッチン、バスルームといった間取りで、そこに住む高齢者は住宅費、食費、光熱費などを払う。もし、年金で賄いきれない場合は市町村から補助がでる。ほとんどの方は高齢者住宅の支払いをして、数万円のお小遣いがでるそうだ。医療費も税金で賄われているので、医療費の心配をする必要もない。

私が実習させていただいた高齢者住宅は12戸あり、12人の高齢者が住んでいた。皆、疾病は様々だが、介護が必要な状態である。デンマークは完全三交代制で、日勤は7:00～15:00、準夜勤は15:00～23:00、夜勤は23:00～7:00までだ。12人の高齢者に対し、日勤帯は4人の介護スタッフ、準夜勤は2人である。夜勤帯はこの高齢者住宅60世帯すべてを担当する2人の夜勤者がいる。朝、7:00少し前に夜勤者からの申し送りを各棟の日勤者が聞く。その後、7:00には各棟のスタッフで、夜勤者からの申し送り事項の確認と今日の予定の確認、担当決めなどを行って、援助を開始する。

まず、驚いたのが各部屋の天井にリフトのレールが標準装備されていたことだ。リフトが必要になった時にリフトをつければすぐに使用できる。居室内はどこでも使用可能だが、浴室・トイレにはレールがないので、浴室・トイレは床走行するリフトを使用する。高齢者はコールボタンを身に付けていて、いつでもどこでもコールを押すことができる。コールはスタッフが携帯する電話に送られ、誰が呼んでいるのかわかる。またスタッフがコールをとると、高齢者と話ができる。その方の使いやすさに合わせて、腕時計のように腕にはめている方や首から下げている方がいた。



天井にはリフトのレールが敷いてある



レールに設置してあるリフト

朝、モーニングケアに伺うとまだ、寝ている方もいれば目覚めている方など様々だ。デンマーク人は朝にシャワーを浴びる。日本人と違って、浴槽に浸かって、ゆっくり疲れを癒すという入浴習慣でないためさっと洗っておしまい、簡単なものである。

朝食は大体、7:30～10:00 くらいの間にとればよい。とる場所も個人の部屋か共同のダイニングと各自、選ぶことができる。昨日は自分の部屋で、今日は共同のダイニングで、といった具合に決めることができる。朝食も様々、その朝に食べたいものを召し上がっていただく。そう聞くと、非常に手間がかかるかと思われであろうが、デンマークの朝食は非常に簡単である。黒パンにバターをたっぷりぬって、チーズをのせた物や、その黒パンのおかゆ、オートミール、ヨーグルト、白いパンにバターとチーズやジャム、それに飲み物、殆どの方がコーヒーである。毎日、今日は何を召し上がりますか？と聞いても殆どの方が同じものを召し上がっていた。

朝食が終わると、10:00～昼食の間までコーヒーの時間となる。スタッフも混ざって、会話を楽しみながらのコーヒーの時間である。個人の居室の清掃は介護スタッフが行うが、廊下、ダイニングなどの共有スペースは清掃専門のスタッフがいる。因みに、個々人の部屋の清掃は一週間に1回である。もちろん、何らかの事情で、汚れた場合はその都度行う。洗濯も一週間に1回だが、ほとんどの方がそれでは間に合わないほどの洗濯物を出していた。

シーツなどのリネン類やリフトを使うときのベルトなどの福祉用具も全て洗う。洗濯はその方の物だけを洗う。洗濯機の前は大抵、洗濯物が並んでいた。昼食はセントラルキッチンから来たものを電子レンジで温めて食べる。居住者のAさんがジャガイモの皮をむいて、ゆでる。Aさんはここに来て、やりがいや生きがいをみつけ、大分、元気になったそうだ。生活の中で目標をみつけられるというのは大変に良いことである。車椅子だったAさんも歩行器で歩くことを始め、自分で廊下を何周と決め、毎日、訓練していた。デンマーク人は温かい食事を1日1回しかとらない。ここの高齢者たちは自分たちで昼食に温かい食事をとることを決め、ペットの猫も共同で飼うことも決めた。天気が良ければ散歩に行く。決まっている

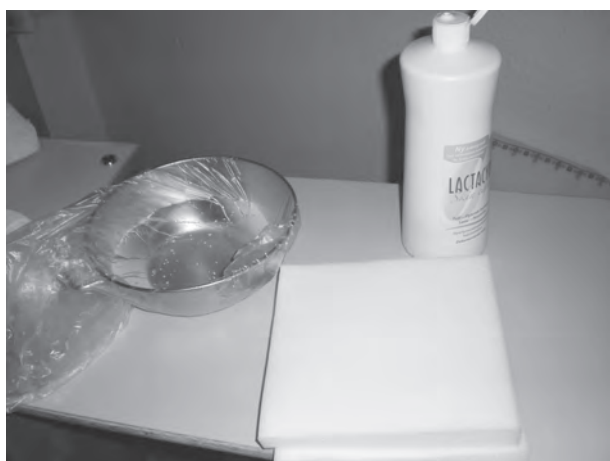


のは食事の時間とコーヒーの時間くらいで、他に決まったスケジュールはない。デンマークの介護スタッフは足の爪を切ってはいけない為、ご自分で切れない方はフットケアを頼む。

ある朝、スタッフと私がある高齢者の住居にモーニングケア伺い、部屋をノックしたところ、まったく、返事がない。いつもは返事を返してくれる方だけに、おかしいと思い、声をかけながら、入室すると、バスルームに血だらけで倒れていた。声をかけると意識あり、外傷を確認すると、腕の皮がむけ、そこからの出血のようだ。そこで、スタッフ、「リフトを取ってくる」とどんな事態にあっても、決して、無理にスタッフの力で助け起こさず、リフトを使うことが徹底されていた。その方の怪我はたいしたことはなく、その後、数時間でいつものように歩行器を使い、歩かれていた。

### (1) 排泄介助

排泄介助はそれぞれの住まいにあるバスルームやベッド上で行われているので、まず、それだけで、個人のプライバシーは保たれる。デンマークでは介護者は持ち上げてはいけないため、押したり、引いたりして、介助する。ベッド上のオムツ交換についても、介護者が力任せになどということとは決してなく、シーツの下には摩擦を少なくするための素材の敷物がしかれ、その上にシーツは軽く乗せるだけである。日本のようにベッドシーツの角がきれいに入っているかなんて問われない。見栄えより、実務優先である。必要な方にはシーツの上にさらに防水用のシーツが加わる。陰部の清拭の仕方も日本とは方法が違う。日本ではシャワーボトルでお湯をかけて、洗浄し、タオルで拭いたり、温タオルで拭いたりと思うところだと思うが、デンマークではまず、ボールにビニール袋をかぶせ、お湯をはる。その中に液体石鹸を数滴たらし、その中に薄いスポンジを1枚～3枚つけ、軽くしぼって、拭く。もちろん、スポンジは使い捨てだ。ボールにビニール袋をかぶせるのは衛生上の理由である。使用済みオムツは透明なビニール袋に入れて、屋外のゴミ箱へ捨てる。



手前の正方形が使い捨ての薄いスポンジ



摩擦を少なくする素材の敷物

## (2) 入浴介助

ベッド上で夜間使用したオムツをとり、陰部洗浄が終わったらバスルームへ移動し、シャワーチェアに腰掛けてもらい、シャワーを浴びる。洗髪後、ここでまた、先ほどの薄いスポンジを使用して、それに液体石鹸をたらし、身体を洗う。シャワーで流して、終了である。その間、大体10分。シャンプーなどはもちろん、個人の好みによって使っているものは違う。シャワーチェアに座ったまま、バスタオルで身体を拭き、着替えを行う。ほとんどの方が、脇の下に塗るタイプのデオドラントを使うか、香水を使っている。皆、いい香りを漂わせている。

## (3) 記録について

デンマークでは日本にあるようなチェック記録はほとんど行われない。日本では、血圧、体温、食事量、水分量、トイレ回数、排便チェック、服薬チェックなどはどこの施設でも行われていると思うが、デンマークの高齢者住宅では疾患の為に測定が必要であるとか風邪をひいているとか特別な状況でない限り、行われない。デンマークでは多くの市町村が記録のIT化を進めており、その高齢者の情報は病院、市町村、高齢者住宅のスタッフが閲覧でき、情報の共有が効率的に図られている。個人情報なので、パスワード管理されている。



共有スペースのダイニング

## (4) 看取りについて

看取りも高齢者住宅では行われる。Vesterboplejecenter では居住する際に、できるだけ本人に聞き取りを行い、書面に記してもらおう。

私が研修中に居住者が1人亡くなった。数日間、食事がとれなくなり、ホームドクターや看護師に連絡をとり、家族への連絡もしながら、夜間に亡くなった。ある朝、実習に行くと、その居室の前にはキャンドルと花が供えられていた。食事がとれなくなったら、本人の意思とは関係なく、経管栄養や胃ろうにすることはない。



供えられたキャンドルと花

亡くなった方は自分の死後、どうして欲しいかという遺書を高齢者住宅で介護にあたっている責任者宛に残していたので、その責任者が介護スタッフとその遺書を開けた。その遺書の

中には何を着たいか、葬儀についての希望、埋葬場所など、詳細に記してあった。医師が死亡診断書を書きに来て、その後、家族が到着した。私も故人に会わせてもらおうと、生前と何も変わらない様子でベッドに寝ていた。午後に葬儀屋が来て、ご遺体をお棺に入れて、高齢者住宅から出棺となった。皆で賛美歌を歌って、送り出した。

## 2. Fredensbo Center (訪問介護) (5月17日～5月24日)

この高齢者住宅は一戸一戸が独立していて離れに共有スペースがある造りで、その共有スペースのある建物にデイサービスセンターが併設されていた。ちなみにデンマークでは日本のように浴槽持参で訪問する訪問入浴のサービスはない。自宅のバスルームを使用するのが困難な方が、デイサービスセンターなどにシャワーを浴びにくることはある。地域の方々や敷地内の高齢者住宅にお住まいの方々がデイサービスセンターに通ってきている。こちらのデイサービスセンターでのアクティビティは運動もあれば、市場へ出かける外出行事、伝統のスモークチーズ作りなど様々だ。訪問介護は完全三交代で、日勤7:00～15:00、準夜勤15:00～23:00、深夜勤23:00～7:00となっている。日勤帯は主に起床時の援助が多く、午前中が終われば、それほど援助はない。訪問介護でも食事作りはしてはいけないので、朝食や昼食についても、セントラルキッチンから来た食事を温めるか、パンにバターやチーズをのせる程度だ。掃除などの生活援助は殆ど、日勤帯で終えてしまうので、準夜勤帯、夜勤帯で必要なのは身体介護である。その援助内容はきめ細やかで、できない所を支援するという点が徹底されていた。例えば、加圧ストッキングを脱がせて、一旦、退出、別のご家庭を回って、先ほどのご家庭に戻り、就前薬の介助をするなど、それこそ5分の支援に何回も伺う。



デイサービスセンターのある建物



セントラルキッチンから来る一人分の食事

(1) ある日の準夜勤 (15:00 ~ 23:00)

いかに細かく訪問しているか、ある日の準夜勤を紹介する。

1981年からヘルパーをしている Anna Lisa さんに同行。日勤者から申し送りを受ける。

- Cさん

15:30にまず、Cさんの所に行きリフトを使用して、離床介助を行う。

- Dさん

安否確認とDさんが何時頃、ベッドに入るか聞きに行く。「彼女は特別なの」と Anna Lisa さんが言うのでどのように特別なのかと思ったら、玄関ドアには新聞紙が貼られ、部屋中にキッチンペーパー、新聞紙、広告などが見事に積まれていた。認知症の症状の一つである収集はデンマークであっても、日本であっても変わらないようだ。Dさんはどうして、ヘルパーが自分を車椅子からベッドに持ち上げて、移してくれないのかと不満をもらしていた。Anna Lisa さんは「決まりでできない、法律で決まっている」、「立ち上がりを助けるためのリフト（捕まって立ち上がり、立位のまま、くるっと回転させて方向転換をする福祉用具）で自分でできた方がいい」と話すと納得して、リフトを使って、自ら移乗する。

- Eさん

援助は目薬の介助のみで終了。

- Fさん

近所のお友達が来ており、買い物をしてきた娘がちょうど、食料品を冷蔵庫に入れていた。夕食の薬を出し、「また後で」と伝える。

- Gさん

アルコール依存症。Gさんは薬に対する執着も強く、自宅にあると全部飲んでしまうので、薬は近くの集会所で鍵のかけられる薬箱で管理していた。Gさんに分包された薬を渡すと、「臨時の薬が一錠少ない」という。「そんなことはない」と Anna Lisa さんは言うが、納得せず、怒っている。「薬箱にもそう書いてあったし、無いものはない」と答えるが納得していない。状況を看護師に電話で報告する。



鍵のかかる薬箱

- Hさん

65歳、アルコール依存症と薬物依存症。まったく意欲がなく、非常に静かに話し、「食事もしたくない」といっていた。Anna Lisa さんが「何か夕食を用意しましょうか」と言っても、「いらない」と言う。「また後で様子を見に来ます」と伝える。

- Iさん

アルコール依存症のIさんの所に行く。妻を8年前に亡くしたという。先日、事故を起こしたので、車のボンネットはつぶれていた。彼に怪我がなかったのが、不幸中の幸い。話を聞いて、薬を出して退出する。車の運転もでき、話も普通にされている。どこが病気なのかと思っていたら、Anna Lisaさんが「今日はお酒を飲んでいなかったし、こんなに調子が良いことなんて、めったにない」と言う。

- Jさん

昨年末に大腿骨骨折したJさんの所に薬を出しに行く。

- Hさん

再び、17:36にHさんの所、ジャガイモと魚のフライを食べていた。私が「食事していて、良かった」とAnna Lisaさんに言うと、「Hさんは食事はするけど、片付けはまったくしないのよ」と笑う。

- Kさん

大きな農家に住むKさんの所に加圧ストッキングを脱がしに行く。

- Lさん

18:05に昨日病院から退院した農家のLさんに調子を尋ねる。Anna Lisaさんは「農家の仕事もあるし、奥様の世話もあるし、大変ではないですか」と夫を労わっていた。Lさんは食欲もないし、トイレにも行きたくないと言って、目を閉じた。

- Mさん

18:25に寝たきりのMさんに服薬介助をしに行き、「肌着の上にもどうしても、長袖シャツを着たい」との本人からの要望通りにパジャマではなく長袖シャツを介助する。リフトでベッドに移乗し、オムツから尿道に挿入しないタイプのカテーテル（コンドームカテーテル）へ交換する。18:55に終了する。

- 19:00にFredensboに戻り、他のヘルパーと情報交換をしながらの夕食をとる。

- Cさん

19:40に更衣・歯磨き介助をし、補聴器・眼鏡を外して、ベッドへリフトで移乗する。尿道へ挿入しないタイプのカテーテルへ交換する。

- Nさん

20:30に病院で検査してきたNさんの所に行くが、既に就寝し、妻から様子を聞く。検査が一日がかりで非常に疲れて、寝てしまったようだ。

- Lさん

20:45に再びLさんの所へ行く。バルーンの尿をぬいて、陰部洗浄、更衣介助をして、退出する。



- Fさん

21:10にFさんの所へ行って、加圧ストッキングを脱がせる。色々な話を聞き、Fさん宅を21:30に退出

- Jさん

大腿骨骨折の手術の痕を見せてくれる。右の太ももに20cmほどの傷痕があった。就寝介助をする。

- Nさん

22:00に就寝介助を行う。Nさんは色々Nさんのやり方があり、Anna Lisaさんも慣れるまでは大変だったと言う。週何回か近所の友人の所にカードゲームに行っているらしい。水の置き場所、クリームの置き場所、寝仕度まで、何から何まで、彼女のやり方がある。寝巻きに着替えて、ベッドに入るときは真っ黒な頭巾をかぶり、右手には緑色の布を巻いていた。Nさんは最後に「今、何時？」と聞き、Anna Lisaさんが「22:15」と答えると、「ちょっと、ベッドに入るのが、いつもより早かった」と言う。車の中でAnna Lisaさんが「Nさんはいつも、22:15の訪問を望んでいるから、ああ言ったのだ」と教えてくれた。

Fredensboに戻り、他のヘルパーの手伝いに行く。延べ件数にして、20件以上、走行距離は100kmを超えていた。

### 3. Rådgivnings-og kontaktcentret for demensramte og pårørende

(Alzheimerforening) (アルツハイマー協会) (5月25日～5月30日)

オーデンセ市にあるアルツハイマー協会で実習させてもらおう。ここは所長ともう1人のスタッフだけが有給で、あとのスタッフは全てボランティアだ。高福祉のデンマークではボランティアはあまり盛んではなく、このアルツハイマー協会の運営はボランティアが中心になって行われているということを知り、驚いた。しかも、その運営には認知症の診断を受けた方々もメンバーとして、参加している。アルツハイマー協会にある運営メンバー紹介のパネルには顔写真、名前、家族などの紹介の他にいつ認知症の診断を受けたかと記載してあった。中には若年性認知症で、40代の方もいらした。本人が認知症の告知を受けるだけでも、大変なことであるのに、それを公表できるなんて、とても勇敢だ。その家族だって、認知症だということを受け入れるのには



運営メンバーの紹介

さまざまな思いがあったはずだ。認知症の夫を持ち、夫と共にアルツハイマー協会に通っている70代の妻にお話を聞く。「夫が認知症の診断を受けたとき、どう思いましたか」との私の問いかけに、「その時はそうかと思ったし、夫の不可解な行動にも納得がいった」と話す。「身体の病気もなく元気なので、これから2人でもっと楽しめると思ったのに」と続けた。夫は日常生活に見守りが必要なので、そのことが嫌になったり、辛く思うこともあるが、夫婦でアルツハイマー協会に来て、夫がおかしな行動をとっても、ここに来ている人たちは理解してくれるし、同じ境遇の人たちと話すとなると笑顔を浮かべる。40代の認知症の夫との間に2人の子供を持つ妻に話を聞いた。「夫から、何かおかしいから、検査してもらおうといわれた時には、どこがおかしいのか分からなかったし、診断を受けた後も信じられなかった」と言う。現在は日常生活上、特に妻の支援は必要ないが、約束を忘れてたりすることがあるそうだ。「子供たちにも診断を受けていることは話し、病気が進行してくるこれからのどうなるか心配だが、アルツハイマー協会に来て、色々な情報を得て、これからのことも考えられるので、助かっている」と話す。このアルツハイマー協会の図書室には認知症に関する



色々な情報が揃う図書室

あらゆる情報、認知症の診断を受けた方の著書や病気に関する医学書、福祉用具や便利グッズの紹介などがそろっていて、誰でも自由に閲覧することができる。もちろん、困っていることを相談して、助言を受けることもできる。例えば、認知症になって、症状が進行してくるとアナログ時計が読めなくなり、日付がわからなくなることがある。それを助けてくれる腕時計、ボタンを押せば何月何日、何時何分と音声で教えてくれる。そんな日常の細かな不便を助けてくれる物の紹介など、非常に役に立つと利用さ

れている方は話してくれた。ある時、市の職員が来ていて、現在、訪問介護を利用している認知症の方と家族のことを話し、いつ来てもらうのが良いかと相談していた。

## (1) プログラム

毎日、何らかのプログラムとサークルが組織されていて、認知症の方とその家族がその活動に参加している。一週間のプログラムを紹介しよう。以下の取り組みの他に不定期で、web新聞を発行している。

月曜日祝日 (Pinse)

火曜日 10:00 ~ 12:00 認知症の方の家族の為のお話会

12:00 ~ 15:00 ロスキレのアルツハイマー協会の来訪

記事の書き方についての勉強会

- 水曜日 10:00～13:00 フラワーアレンジメント  
 ガーデニング  
 ビリヤード  
 10:30～12:30 運動（近くの体育館）  
 13:00～15:00 ペタンク（地面にボールを投げて点数を競う遊び）
- 木曜日 09:30～11:30 認知症の方の家族の為の運動（近くの体育館）  
 10:30～12:30 70歳以上の認知症の方とその配偶者の為の運動（近くの体育館）  
 14:30～16:00 聖歌クラブ
- 金曜日 10:00～13:00 運動（近くの体育館）

アルツハイマー協会同士の交流も図られていて、ロスキレのアルツハイマー協会の方々が来訪し、一緒に記事の書き方についての勉強会をした。オーデンセアルツハイマー協会の皆はこの夏にオーフスのアルツハイマー協会を訪問し、その取り組みを紹介する記事を書く予定だ。そのために、今回の記事の書き方についてプロの編集者の方を招いての勉強会となった。皆で、記事を分担して書くという。その勉強会の際に自己紹介をしたのだが、皆、必ず、いつ診断を受けたかと話していた。私も自己紹介させてもらおうと、「すぐに忘れてしまうから、また聞くよ」とおっしゃっていた。「その為に名札をしています」と私が答えると皆が笑った。少し、ブラックユーモアのようなのだが、これがデンマーク流、認知症という病気、忘れてしまうという事実を受け入れることが大事なのである。

勉強会の終わった後に、旅行に付き添うボランティアと所長が話し合っていた。内容はどのような分担にするか、どの方がどこまでできるか、一人一人が自信を持って、取材や記事作りに取り組めるような配慮がなされていた。

#### 4. Solgården（高齢者住宅）（5月31日～6月6日）

ここはプライエムと呼ばれた旧老人ホームであった高齢者住宅で、この秋に新しい高齢者住宅が完成したら、そこに移るといふ。ここには50戸の住居の中に認知症の方のフロアがあり、日勤帯には9人の認知症の方を3名のスタッフで介護していた。準夜勤帯は2名いる。深夜帯は2人のスタッフで介護にあたる。

ここには現在、44人（ショートステイ含む）の方がおり、深夜勤に入った2人のスタッフはともに深夜勤専門で、彼らは23:00～07:00の勤務を7日間続けて、その後、7日間休む。週に換算すると週28時間労働。Hellさんはこの道、25年のベテランで、過去には地域を回る夜間の訪問介護をしていたそうだ。Charlotteさんは13年のベテランで深夜勤の勤務を7年続けている。2人でずっとやるので、何よりも同僚と気が合わないよね、と話す。2人とも

息がぴったりで、家族みたいなものと言う。

○ ある日の深夜勤（23：00～07：00）

・ 申し送り

準夜勤から血糖値が安定しないRさんの血糖値を0：00と4：00に測るように、という指示とショートステイに来る方の為のシャワーチェアがないので探して、等の申し送りがある。

・ Sさん

23:20 認知症のフロアSさんから、コールあり（正しくはベッドの足元においてあるセンサーマットが反応）、「どうしました？」と聞くと「起きなきゃいけない」と答える。「これから私たちが行くので、ベッドに横になって、待っていて下さい」と伝え、部屋に向かう。Sさんが起き上がっていたが、足をベッド柵の間に入れてしまい、それがまたベッドマットとの間に挟まれている様子である。「どうしたのですか？」と聞くと、「これからでかけないと」と言う。Hellさんが「まず、足を抜かないと何もできませんよ」というとSさんは足をあげて抜こうとするが、足首を曲げたまま柵から抜こうとするので、足首が柵に引っ掛かり、「抜けない」とあきらめてしまう。「足首をこう、伸ばして・・・」とCharlotteさんも言うが、一向に抜こうとせず、ベッド柵はベッドに固定してあり、使わないときは折たたむタイプだったために、結局、ネジを外して、ベッド柵を取って、足を抜いた。その後、ポータブルトイレ介助をし、ベッドに横になる。23：40 Sさんから再びコールがある（センサーマットが反する）。Charlotteさんが「寝て下さい」と声をかける。

・ Rさん

0：00 血糖値測定。そのまま認知症の方のフロアを全室、巡回する。

・ Qさん、Tさん、Uさん

Qさんが歩き回っていたので部屋に誘導する。1階、2階、3階のフロアもほぼ全員巡回する。2階のフロアを歩き回っている認知症のTさんがいたので、「おやすみなさい」と声をかける。認知症のUさんも歩き回っていたが、彼を見て、Charlotteさんはすぐに側に行き、「何ですか？」と声をかけ、部屋の方向へ誘導する。Hellさんは物陰に姿を隠し、私に「彼は他に人がいると混乱するから、隠れて」と言い、Charlotteさんが彼を部屋に誘導するまで身を潜めて待つ。

・ 1：00 地域の在宅の方を2人1組で回っている訪問介護のスタッフが休憩に来る。

・ 1：20 には1人で回っている訪問看護師が休憩に来る。Rさんの血糖値を看護師に報告。

・ 2：00 前には訪問介護のスタッフが出発し、2：00 過ぎには看護師も出発。2：10に10人くらいを巡回。体位交換、2人の方にオムツ交換をする。

・ 3：00 には終了し、休憩となる。

・ 4：00 に訪問介護のスタッフが再び休憩に帰ってくる。4：30 には出発。4：00 にRさ



んの血糖値をはかる。

- ・ Uさん、Wさん

5:00 頃から最後の巡回。Wさんのオムツ交換。巡回中、Uさんにばったり会ってしまい、“Jeg hedder Aiko. Jeg er på praktik・・・”（私の名前は愛子です、実習に来ていて・・・）とデンマーク語で自己紹介をした所、彼の口から、“Aiko, Are you from Japan?”と流暢な英語を話し出す。その後、Uさんは英語で自分が英語の先生をしていたこと、日本人の生徒がいたことを話す。その光景を見た Hellさんも Charlotte さんともとても驚き、その後、Uさんがとても落ち着いたことにもっと驚いて、Uさんは部屋に戻り何事もなかったかのようにベッドに横になる。

- ・ 6:00 にコール対応し、トイレ介助。
- ・ 6:45 に日勤者へ申し送って、無事に深夜勤終了となった。



手入れの行き届いた庭

### Ⅲ. スウェーデン

#### 1. Södra långgatans Äldreboende（高齢者住宅）（6月14日～6月24日）



窓から海が見える高齢者住宅

建物は5階建てで、1、2、3、4階に高齢者が住み全部で45人とのこと。3階のフロアには12人の住人がいて、職員は全部で8人。深夜帯20:45～07:00までは2人～3人とのことだ。

勤務体系については日本の早番・遅番のように勤務が細かく、しかも、早番、遅番とも数種類もあった。

朝、8:00の起床介助から入らせてもらう。

今日は2週間に1回のフットケアの日で、順番に高齢者が足の爪を切ってもらっていた。

朝食は7:30～10:00にとり、10:30～11:30がコーヒーの時間、13:00～13:30が昼食時間、15:00～16:00がコーヒーの時間、夕食は18:00～18:30、



フットケア



コーヒーの時間が19:00となっていた。

今日はスタッフが夏休みに入る間にアルバイトに来る人たちへの説明会・研修会が13:00からあり、私もそれに加えてもらった。研修内容は簡単なことで、接遇マナー研修や、記録の書き方であった。15人のアルバイトたちが来ていたのだが、その半分が外国人であった。もちろん、アルバイトの外国人はスウェーデン語を話す、高齢者が外国人のスウェーデン語を理解できるかスタッフは危惧していた。スタッフは大きく2つのグループに分かれ、多少の日数のずれはあるが、3週間の夏休みをとる。Aグループが夏休みの間はBグループとアルバイトで勤務し、Bグループが夏休みの間は休みを終えて戻ったAグループがアルバイトと共に勤務する。スタッフはそれぞれ担当する高齢者住宅の居住者が決まっており、消耗品の購入も担当スタッフが責任を持つので、夏休みに入る前に、物品の補充も欠かせない。各住居の収納の中に備え付けてある金庫の鍵を持っているのは担当者と高齢者住宅の管理者のみだ。お金の出納も担当者が責任を持って行う。各居室は60㎡くらいの広さで、ミニキッチンとバスルーム、寝室とリビングがある。場所によって、住居の大きさは違う。コールボタンは首から下げるペンダント型か腕時計型があり、皆、身に付け、何かあれば押し、それがスタッフの持つ電話につながるようになっている。また、コールを押した記録は全て、パソコンにデータとして残る。入居者から「昨晚、コールボタンを押しても誰も来てくれなかった」、スタッフから「同時にいくつもコールがあり、対応しきれなかった」との説明があったとき、その状況をデータをもとに知ることができる。コールボタンを押しても、誰も来られないほど、同時にコールがあったのか、本当に押しているのか、スタッフが足りていないのかなど、客観的な資料になり、効率的な人員配置ができるという。



コールのデータを管理

リフトはフロアに1台あるので、自力での移動が困難な方はリフトを使用する。ベッド上での体位交換をしやすいようにすべりの良い素材の敷物も使用されている。シーツはきっちり、角も折っていたし、シーツ用のアイロンまであった。スウェーデン人は昼食、夕食ともに温かい食事を食べ、朝食はパン、オートミール、ヨーグルトなどである。スウェーデンでも食事はセントラルキッチンから、運ばれてくる。ホットワゴンでくるので、配達されたら、ワゴンのコンセントを入れ、保温状態にしておく。

高齢者住宅には色々な設備が整っており、日本のような掃除機はない。どうしているのかというと、壁にホースを入れると、それが掃除機になって、ゴミを吸い込む。この方法だと、

排気がでないので、ハウスダストを舞い上げることもないし、衛生的だと言う。使用済みオムツをいれるゴミ箱もない。ゴミ袋にまとめたゴミを壁の穴に放り込むと1階のコンテナに入る仕組みになっている。定期的にごみ処理業者がゴミを回収する。ほとんどの高齢者住宅ではこのような仕組みになっているようだ。



ゴミはカベの穴に放り込む



左上のパイプからゴミが落ちてくる

高齢者1人当たりの費用を聞くと食事が2,200kr、住居費が3,700kr、介護費が1,000～2,000kr、お小遣い5,000krとのこと。スウェーデンでは65歳以上の高齢者が9,000～14,000krの年金をもらっている。少ない人では6,300kr。スタッフの給料は初任給で18,000kr 非常に有能だと24,000kr、それに夜は1,000krほどの手当があるとのこと。そのうち30%の税金を払うそうだ(1kr スウェーデンクローナ=15円前後)。現在、経費削減で深夜勤帯の水・金・土が2人勤務、それ以外の日は3人勤務である。アクティビティについては木・金に2階で映画鑑賞等するそうだ。お散歩などもアクティビティの一環。

#### (1) タクティールマッサージ

私が研修させていただいた高齢者住宅ではスタッフ全員がタクティールマッサージを行える資格を持つ。介護の質をあげるためにスタッフ教育の一環として、タクティールマッサージ資格の全員取得の予算を市に希望し、それが叶ったという。タクティールマッサージとはスウェーデンの看護師 Siv Ardeby が考え出したマッサージ方法で、手による触れ合いで、孤独感やストレスを緩和し、相手に安心感を与えることができるマッサージである。タクティールマッサージは身体の部分部分に行うことができる。手だけでも、背中だけでもいい。認知症の方もタクティールマッサージによって落ち着いたこともあるそうだ。ただ、何事にも、好みがあるので、好きな方にはやるが、嫌がる方にはしないのが基本とのことである。この高齢者住宅では定期的にタクティールマッサージを行うと共に、タクティールマッサージ用の部屋も増築している。



バスタオルで保温し、安心感を与える



手のマッサージ

## 2. Västra Fäladen Hemvårdsgrupp (訪問介護) (6月29日～7月8日)

ここでは地域に住む方の訪問介護の研修を行わせてもらった。日勤帯7:30～15:30、準夜勤帯15:30～22:30、深夜帯は広い地域をカバーするナイトパトロールが行うそうだ。高齢者住宅でもなく、一般のマンションや一戸建てに住むお宅だ。訪問は自転車で行い、起床時の援助が一番多い。1回訪問して、退出して、また伺うというスタイルはデンマークと一緒だ。地域に住む方々もペンダント型か腕時計型のコールボタンを身に付けていて、必要な時にいつでもボタンを押せばコールセンターにつながるようになっているそうだ。そして、コールセンターから訪問介護事業所に連絡が来る。食事はセントラルキッチンから配達されるので、訪問介護では食事は温めるだけである。入浴介助については、シャワーを浴びるだけなので、日本の入浴介助に比べ、時間もかからない。

ある準夜勤帯でのこと、18:00過ぎに病院から電話があり、今朝、入院してきたVさんを迎えに来て欲しいと言う。そんなに急に言われても人員がさけるわけもなく、訪問介護事業所のリーダーは断る。その電話がかかってきたことに、私は驚き、「退院する時は家族ではなくて、訪問介護事業所に連絡がくるのですか」とリーダーに聞くと、「訪問介護を利用していることが分かっているからね」と言う。退院の知らせが家族より先に訪問介護事業所に来るなんて、日本ではありえないことである。結局、病院は家族に連絡し、他市に住む娘さんが迎えに行くことになった。予定していた訪問介護の合間、19:30に先ほど退院してきたVさんの所に行く。娘さんが夕食を食べさせていた。娘さんから引き継いで、着替え、歯磨き、トイレ介助などを行う。ベッドに入床し、20:40に退出する。

## 3. Landskrona stad Omsorgsförvaltningen (市の高齢者支援) (7月1日、6日)

Landskrona 市で病院から退院する人の支援を決めるためには3人1組 (Handläggare と呼ばれる対応担当者、作業療法士、看護師) で担当し、Handläggare が中心となって、病院か

ら退院する人を受け持つ。市の病院と市はコンピューターでダイレクトにつながっていて、入院中の様子も分かり、情報共有も図られているようだ。9:09 から会議開始、Handläggare、作業療法士、看護師などの担当者 10 人くらいが集まって、それぞれ、自分が担当する人の状況を説明し、皆から意見を求める。1 人の Handläggare あたり、2 人～4 人の新規受け持ちがあり、それぞれのケースについて説明、10 分くらいで、自宅に帰ってからの支援を決定していた。Landskrona 市の人口は 40,000 人、市役所職員が 3,000 人、そのうち社会福祉に従事するものは 1,200 人（うち 50 人が男性）。予算は 60,000,000kr そのうち 75% が人件費である。高齢者分野の Undersköterska（準看護師）は 730 人、25 がリーダー、ハンディキャップ分野は 175 人、リーダー 13 人。14 ヶ所の高齢者住宅があるため、入居待ちはほとんどないようだ。Landskrona 市には認知症専門の看護師がいて、認知症についてのあらゆる相談にのってくれる。主な仕事としては認知症に対するあらゆる問い合わせに答えることと、介護スタッフや家族に対し、教育を行うことである。認知症専門のデイサービスもあり、少人数でゆったりとした時間を過ごせるようにし、タクティールマッサージも行っているようだ。認知症専門フロアのある高齢者住宅もあるが、診断を受けていないだけで、高齢者住宅には認知症の方はたくさんいると言う。認知症専門のショートステイもあるが、1 床しかない。認知症専門の資格としてはシルビアシスターがある。シルビアシスターとはスウェーデンのシルビア王妃のお母様が認知症になり、その経験を踏まえ、認知症ケアの専門のスタッフ養成のため作った資格である。



認知症デイサービス感覚の部屋

## IV. イギリス

### 1. Kenilworth House Nursing home、 Earlingmanor Nursing home(老人ホーム) (6月25日～6月28日)

イギリスには老人ホームであるナーシングホームがある。イギリスの老人ホームはロンドンであったためか、色々な国の方々が入居し、介護にあたるスタッフも色々な国の方々だっ



ナーシングホーム



た。一軒目は認知症の方を中心に入居しているところで、二軒目は身体的に重度の方が入居しているところであった。一軒目の施設長に聞いたところ、色々な国の入居者がいるので、食生活、生活習慣を知ることでも大変で、1人として同じケアはないと話す。また、スタッフも様々であるので、その得意分野を生かせるようにしているそうだ。アセスメントは非常に大事で、どのように生活をしてきたか、何を食べるのか、探ることから始まるという。そういう中で、同じ国のスタッフがいる所で助けになることもあり、その国の郷土料理を皆で楽しんだり、多国籍ならではの楽しみ方もあるそうだ。二軒目の身体的重度の方が入居しているところでも、色々な国の方々がいるので、その方のアセスメントが非常に重要と話していた。看取りまで行うので、医療との連携が重要だ。寝たきりの方や身体の高い方の移動には必ずリフトを使うそうだ。どちらのナーシングホームも、住宅改修型であり、デンマークやスウェーデンから比べると狭い印象を受ける。一部屋に洗面台が付いて、トイレと浴室は共同であった。

## V. イタリア

### 1. ローマ（家庭での介護）（7月10日～7月13日）



病院の中にある教会

デンマーク人やスウェーデン人、そして、スウェーデンで働いているアルバニア人に薦められ、イタリアのローマでの研修を決めた。デンマーク人やスウェーデン人は宗教感の違い、キリスト教が今も深く根付いているローマを見た方が良いといい、イタリアの側にあるアルバニアから来た人々にはイタリアと北欧では、福祉が全然違うから参考になるよ、と教えられた。

イタリアは日本と同じく、高齢化が進み、家族介護が基本で、施設はまだ一般的ではないそうだ。

日本と違う点は家族介護に限界があるため、移民の外国人を自宅に住み込みさせ、その外国人に介護や家事をしてもらっているという。朝、起床し、自分の身支度を整えつつ、高齢者の着替え、モーニングケアを行い、朝食の用意、食事介助をして、朝食の片付けや洗濯をし、高齢者を連れて散歩に出たり、通院し、昼食時には昼食を作り、介助をし午後には掃除、そしてまた夕食、就寝介助と休む間もない。移民の外国人の多くが、専門知識もなく、低賃金である。福祉については自治体によって差が大きいですが、外国人ヘルパーがいなければ家庭介護は成り立たない。介護サービスの主体は北欧とは違って、民間の営利団体、非営利団体、そして、市民ボランティアが多い。キリスト教が生活に密接に根付いており、病院にも必ず、礼拝堂があった。



## VI. おわりに

デンマークでは1988年に施設は建設せず、高齢者住宅を建設することを決めたので、日本の特別養護老人ホームにあたる施設はない。デンマークの高齢者医療福祉の三原則は継続性の尊重・自己資源の活用・自己決定の尊重である。デンマークでは福祉については市町村が行うため、自治体によって、サービスの質や量が違う。デンマークでは75歳以上の高齢者のもとへ市町村の担当者が年に2回訪問する。その時に、高齢者から直接、困っていることはないか聞き、生活状況を見ることによって、支援が必要な状態か確認する。もし、訪問の結果、支援が必要なら、市のVisitorと呼ばれるソーシャルワーカーが訪問して、具体的な支援内容を決定する。訪問介護が必要とか、デイサービスに通う等である。長年住んだ自宅での生活が高齢になり、自宅内での段差や玄関の出入りが大変になり、住宅改修が必要になる場合がある。デンマークの場合、その改修費があまりにかかり、高齢者住宅への住み替えの方が経済的である場合は積極的に住み替えを勧める。長年住んだ広い一軒屋より、高齢者住宅の方が生活しやすいと思う高齢者も多い。子供との同居はない。介護現場については、IT化が進められ、記録や医療機関・自治体・介護サービス事業所が同じシステムを使うことによって、容易に情報共有が図られる。身体介護の分野でも、先端技術であるロボットを使って、ノウハウを研究している。オーデンセ市は介護にロボット技術を導入するため、日本のサイバーダインという会社からロボットスーツHALを輸入し、現場での使用の仕方について、研究している。今回は残念ながら、まだ研究段階で、研修生を受け入れられる状況ではないこと、夏休み期間に入るという理由で研修受け入れを断られてしまったが、その研究成果に期待したい。

今回、研修させていただいたアルツハイマー協会での取り組みはぜひ、参考にしたいと思った。ケアマネジャーの業務をする上で、色々な問題があるが、悩むことの一つに若年者の要介護の方に対する介護サービスの提供である。第2号被保険者と呼ばれる40歳以上65歳未満の要介護の方々だ。例えば、デイサービスに行かれたとしても、周りが80代の方ばかりでは、興味対象が違うし、体力差もあるので、中々、満足いただけるサービスの提供ができない。第2号被保険者の方々は要介護者になられても、仕事があったり、子育て中であったり、その取り巻く社会環境も高齢の方々とは違う。認知症についても同じことがいえる。80代の認知症の方と40代の認知症の方では求められる支援に大きな差がある。日本でも認知症カフェが少しずつ出来始めていると聞くが、まだまだ、若年者の方の要望に応えられるサービスは少ない。このような所を日本でも多くの方が必要としている。

スウェーデンでも施設は存在せず、高齢者住宅があちこちに作られ、400,000人のLandskrona市は14ヶ所500戸あまりの高齢者住宅があるため、入居待ちはほとんどないと

いう。介護現場のIT化が進められているのは、スウェーデンもデンマークと同様だ。

そんな先進国と言われる北欧を見た後にイギリスやイタリアを見るとまた違った発見があった。イギリスは多国籍の高齢者を多国籍のスタッフが介護している。色々な国の人が色々な国で年をとり、介護が必要になってくる。そのような中でイギリスは先例になるであろう。イタリアは日本と同じく急速な高齢化が進む中、主流は家庭介護、しかし、女性の就労率の上昇と共に、家庭介護の限界が来ているという状況である。どのような介護システムになるのか今後が興味深い。

今回の研修のテーマである“地域で取り組む認知症ケア”と“先端技術と介護”という視点を持って、研修させてもらったが、“地域で取り組む認知症ケア”について、認知症ケアは専門知識が重要であること、家族だけでなく、色々な人が関わること、認知症への理解が特別なことではなく、一般的になることが必要だとわかった。誰でも年をとるし、社会全体の高齢化が進む中で、認知症の方が増えるのは間違いないので、皆が関心を持っていかなければならない。ケアマネジャーとしてできることは家族だけでなく、色々な方に認知症を知ってもらいその理解を深めてもらうことだ。この海外研修で経験させていただいたことを活用したい。“先端技術と介護”については、デンマーク人に「技術では日本にかなわない、だから、どう使うかというノウハウを作る」、「なぜ、日本は素晴らしい技術があるのに、それを使おうとしないのか」と言われた。先端技術を使い、身体的にだけでも、介護の仕事が重労働でなくなれば、人手不足は解消されるのではないだろうか。そして、先端技術を使用した日本の介護モデルを世界に発信し、「福祉の先進国」となる日が来ることを一人の介護職として願わずにはいられない。

## <謝辞>

三ヶ月の研修はあっという間でした。アイルランドの火山噴火の影響で、出国できなかった時はどうなることかと思いましたが、無事に出発、日欧文化交流学院の千葉忠夫先生、錢本さん、Momoyoさんには合同研修、個人研修ともに大変お世話になり、ありがとうございました。そして、この貴重な機会を与えて下さった財団法人中央競馬馬主社会福祉財団の小川理事長、大川専務、本多事務局長、研修前、研修中、研修後とずっと私たちの支援をして下さった長井企画管理部長、英語研修をしてくれた富田先生、皆様にお礼申し上げます。第38回の研修生の皆に刺激を受け、高齢者福祉だけでなく、色々な日本の現状を知ることができました。皆と知り合えたことは一生の財産です。Ms Bodil, Ms Ina, Ms Anne, Ms Ulla, Ms Inger, Ms Dorthe, Ms Karina, Ms Sussane, Ms Ann-Mari, Mizuho, Kyokoさん、研修中は多くの良き方々に恵まれ、支援をいただいて、充実した研修期間を過ごす事ができました。

最後に三ヶ月もの間、研修に快く送り出してくれた社会福祉法人六高台福祉会特別養護老人ホーム松寿園の松澤理事長、正田施設長、総務部の堂前部長、地域福祉部の小山部長、松寿園ケアプランセンターの菱沼さん、上野さん、居宅介護支援事業所松寿園の平居さん、松寿園ホームヘルプサービスの栗原さんに心より、感謝申し上げます。多くの皆様の支えがあったからこそ、研修に行き、無事に帰ってくることができました。この経験をこれからの業務に活かしていきたいと思います。

《参考文献》

「世界一幸福な国デンマークの暮らし方」(PHP新書) 千葉忠夫(著)

《研修先一覧》

〈デンマーク〉

Vesterbo Plejecenter (高齢者住宅)

Vestervænget 42 5471 Sønderød

TEL: (+45) 64 82 83 50

Fredensbo Center (高齢者住宅・訪問介護)

Vestergade 59-61 5471 Sønderød

TEL: (+45) 64 81 11 31

Rådgivnings-og kontaktcentret for demensramte og pårørende  
(Alzheimerforening) (アルツハイマー協会)

Kallerupvej 58 5230 Odense

TEL: (+45) 66 19 40 91

Pjecenter Solgården (高齢者住宅)

Skovvej 1 5400 Bogense

TEL: (+45) 64 82 87 50

〈スウェーデン〉

Södra långgatan Äldreboende (高齢者住宅)

Södra Långgatan 4 261 31 Landskrona

TEL: (+46) 0418-470000

Äldreboende Kassakroken (高齢者住宅)

Parkgatan6 26131 Landskrona

TEL: (+46) 0418-470000

Västra Fäladen Hemvårdsgrupp (訪問介護)

Segergatan 5 261 45 Landskrona

TEL: (+46) 0418-473937

Landskrona stad, Omsorgsförvaltningen (ランスクローナ市役所)

Säbygatan 17, 2vån 26180 Landskrona

TEL: (+46) 0418-470938

〈イギリス〉

Kenilworth House Nursing home (老人ホーム)

Kenilworth Road , Ealing, London W5 3UH

TEL: (+44) 020-8567-1414

Earlingmannor Nursing home (老人ホーム)

5Grange Park, Ealing, London W5 3PL

TEL: (+44) 020-8840-3490

〈イタリア〉

Ospedale Regionale Oftalmico (病院)

Piazzale degli Eroi, 11 00136 Roma Italia

TEL: (+39) 066 8351

Chirsa di Santo Sprito in Sassia (病院)

Lungotevere in Sassia, 1 00193 Roma Italia

TEL: (+39) 066 8352333

参考 URL

<http://www.landskrona.se> (ランスクローナ市)

<http://www.nordfynskommune.dk> (北フュン市)

<http://www.alzheimer-avisen.dk/> (アルツハイマー新聞)

<http://www.taktil.se/07/> (タクティールセラピー)